

IBM EMM Reports
バージョン 9 リリース 1.1
2014 年 11 月 26 日

インストールおよび構成ガイド



お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、181 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Reports バージョン 9、リリース 1、モディフィケーション 1、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM EMM Reports
Version 9 Release 1.1
November 26, 2014
Installation and Configuration Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1999, 2014.

目次

第 1 章 インストールの概要	1
インストール・ロードマップ	1
インストーラーの機能	5
インストールのモード	5
インストール・ファイル	6
第 2 章 IBM EMM レポートのインストールの計画	7
前提条件	7
eMessage レポートの前提条件	8
第 3 章 レポート・コンポーネントのインストール	11
ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除	11
ReportsSystem 役割を持つユーザーの構成	11
IBM EMM システムへのレポート・スキーマのインストール	12
JDBC データ・ソースの作成	13
第 4 章 IBM Cognos BI のインストールおよびテスト	15
IBM Cognos BI アプリケーション	15
IBM Cognos BI のインストール・オプション	15
IBM Cognos BI Web アプリケーションと Web サーバー	16
IBM Cognos BI とロケール	16
第 5 章 IBM EMM および Cognos の統合	19
インストール・チェックリスト: IBM Cognos 統合	19
Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手	20
IBM Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのインストール	20
IBM EMM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成	21
E メール通知のセットアップ	22
IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM の構成	23
eMessage レポートのデルタ処理のためのストアード・プロシージャのインストール	23
eMessage レポート用のストアード・プロシージャ、ステージング表および索引の作成	25
レポート SQL ジェネレーターテンプレートのロード	26
ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成	26
データソース別の SQL スクリプト	28
Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューの作成	29

Interact 用のビューまたは具体化されたビューの作成	30
Campaign 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定	32
Interact 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定	33
Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート	33
データ・モデルの構成および公開	34
レポート内の内部リンクの有効化	35
データ・ソース名の確認と公開	36
Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成	37
レポート・フォルダー権限の設定	37
レポート・フォルダー権限の構成	38
eMessage 用のストアード・プロシージャの実行およびスケジューリング	38
Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャ	46
Interact イベント・パターン・レポートのストアード・プロシージャの有効化	49
Interact イベント・パターン・レポートにおける並列実行の度合いの変更	52
Interact イベント・パターン・レポートの UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブルの読み方	53
認証を有効にする前の構成のテスト	55
IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する	56
レポート・システム・ユーザーの作成	56
IBM EMM での Cognos 認証プロパティの構成	57
IBM EMM Authentication Provider を使用するための IBM Cognos の構成	58
Marketing Platform の追加設定の構成	60
認証が構成された状態での構成のテスト	60
第 6 章 レポート作成の構成	63
レポートおよびセキュリティー	64
レポート・フォルダー権限	64
IBM EMM Authentication Provider を使用した IBM Cognos BI システムの保護	65
レポート権限のリファレンス	67
レポート・スキーマ	68
レポート SQL ジェネレーター	68
レポート配置オプション	69
レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ	70
オーディエンス・レベルとレポート	70
レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キー	71
パーティションとレポート・スキーマ	71
Framework Manager データ・モデル	71
Report Authoring レポート	72

フォルダー、サブフォルダー、およびアクセス設定	72
レポートのスタイルと外観	73
レポート生成スケジュールのセットアップ	74
レポート・スキーマのカスタマイズ	74
レポート・スキーマ	74
コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加	75
カスタム属性の追加	75
レスポンス・タイプの追加	76
コンタクト・ステータス・コードの追加	77
パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定	77
パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエンス・レベルの構成	77
追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマ	78
キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキーマの作成	79
キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳スキーマの作成	79
オファー・パフォーマンス・スキーマの作成	80
キャンペーン・パフォーマンス・スキーマの作成	81
キャンペーン・カスタム属性スキーマの作成	82
対話実績スキーマの作成	82
IBM Cognos モデルのカスタマイズ	83
データ・モデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加	84
IBM Cognos データ・モデルへの新規ビューの追加	85
IBM EMM アプリケーション用の Cognos レポートのカスタマイズまたは作成	86
新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン	87
インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードの構成	87
新規カスタム・ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン	88

第 7 章 Cognos のフォルダーおよびレポートに対するユーザー権限 89

CJAP セキュリティーを実装する方法	90
CJAP のバックアップの実行	90
プロパティ・ファイルの編集と同期	90
Cognos での新しい名前空間プロバイダーの構成	91
同期の検査	92
新しい役割に対する Cognos の権限の割り当て	93
Cognos の System Administrators 役割からの Everyone グループの削除	94
すべての Reports ユーザーに対するパブリック・フォルダーの読み取り専用アクセス権の付与	94
パブリック・フォルダーのセキュリティ保護	95
Cognos でのユーザー権限の検証	95
環境からの CJAP 実装の削除	96

第 8 章 複数パーティション用のレポートの構成 97

複数パーティション用の IBM Cognos レポートの構成	97
複数パーティションのための前提条件	97
レポート・パーティション・ツールを実行してレポート・アーカイブ .zip ファイルのコピーを作成する	98
Campaign 用の Cognos モデルのコピーの作成	99
eMessage 用の Cognos モデルのコピーの作成	100
IBM EMM 「構成」 ページでのパーティションのレポート・プロパティの更新	100
パーティションのレポート・プロパティの更新	101

第 9 章 レポートのアップグレード . . . 103

アップグレードの前提条件	104
ビュー、具体化されたビュー、またはテーブルをドロップする SQL の生成および製品データベースでの SQL の実行	105
Marketing Platform でのレポート・スキーマのアップグレード	107
Marketing Platform でのレポート・テンプレートのアップグレード	107
IBM EMM 統合コンポーネントのアップグレード	108
eMessage および Interact のルックアップ・テーブルの更新	109
製品データベースでのビューまたはテーブルのアップグレード	109

第 10 章 バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード 111

7.5.1 モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール	112
古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートの更新	116
「セル別のパフォーマンス」クロスオブジェクト・レポートの修正	116
オブジェクト固有の「セル別のパフォーマンス」レポートの修正	118
古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートの更新	119
「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポートの修正	119
単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートの修正	121

第 11 章 8.x または 9.x モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール 125

付録 A. レポート作成の構成プロパティ

—	131
レポート 統合 Cognos [バージョン]	131
レポート スキーマ (Schemas) [製品] [スキーマ名 (schema name)] SQL 構成 (SQL Configuration)	135
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン	136

レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン オ ファー・パフォーマンス (Offer Performance) . . .	136
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン [スキーマ名 (schema name)] 列 [コンタクト指標 (Contact Metric)] . . .	137
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン [スキーマ名 (schema name)] 列 [レスポンス指標 (Response Metric)] . . .	139
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン キ ャンペーン・パフォーマンス . . .	140
レポート スキーマ キャンペーン キャンペー ン・オファー・レスポンス内訳 . . .	141
レポート スキーマ キャンペーン キャンペー ン・オファー・レスポンスの詳細 カラム [レス ポンス・タイプ] . . .	142
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン キ ャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスに よるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout) . . .	143
レポート スキーマ キャンペーン キャンペー ン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳 カ ラム [コンタクト・ステータス] . . .	144
レポート スキーマ キャンペーン キャンペー ン・カスタム属性 カラム [キャンペーン・カス タム・カラム] . . .	145
レポート スキーマ キャンペーン キャンペー ン・カスタム属性 カラム [オファー・カス タム・カラム] . . .	146
レポート スキーマ キャンペーン キャンペー ン・カスタム属性 カラム [セル・カスタム・カ ラム] . . .	147
レポート スキーマ (Schemas) インタラクト (Interact) . . .	147
レポート スキーマ (Schemas) インタラクト (Interact) インタラクト・パフォーマンス (Interact Performance) . . .	148

レポート スキーマ (Schemas) eMessage. . .	149
Campaign partitions partition[n] reports . . .	150

付録 B. Cognos レポートの書式設定 153

グローバル・レポートのスタイル . . .	153
レポートのページ・スタイル . . .	155
リスト・レポート・スタイル . . .	156
クロス集計レポートのスタイル . . .	158
チャートのスタイル . . .	159
ダッシュボード・レポートのスタイル . . .	161

付録 C. Campaign および eMessage の Cognos レポートの書式設定 . . . 163

グローバル・レポートのスタイル . . .	163
リスト・レポート・スタイル . . .	168
クロス集計レポートのスタイル . . .	170
チャートのスタイル . . .	170
ダッシュボード・レポートのスタイル . . .	172

付録 D. 製品別のレポートおよびレポー ト・スキーマ . . . 173

eMessage レポートおよびレポート・スキーマ . . .	176
Interact レポートおよびレポート・スキーマ . . .	176

IBM 技術サポートに問い合わせる前に 179

特記事項 . . . 181

商標 . . .	183
プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考 慮事項 . . .	183

第 1 章 インストールの概要

IBM® EMM レポートのインストールは、IBM Cognos® BI をインストールして、それを IBM EMM アプリケーション用に構成すると完了します。「IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド」には、IBM Cognos BI の構成、および IBM Cognos BI と IBM EMM の統合に関する詳細情報が掲載されています。

eMessage レポートを使用している場合、レポートをインストールまたはアップグレードする追加のステップを実行する必要があります。また、eMessage レポートをインストールまたはアップグレードするプロセスには、データベース管理者の関与が必要です。

『インストール・ロードマップ』セクションを利用すると、「IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド」の使用について幅広く理解することができます。

インストール・ロードマップ

インストール・ロードマップを使用して、IBM EMM レポートのインストールに必要な情報を素早く見つけることができます。

次の表には、IBM EMM レポートのインストール・プロセスの概要と、関係するステップの要旨、および詳細な説明が記されている場所についての情報が記載されています。

表 1. レポートのインストール・ロードマップ:

ステップ	説明	詳細の参照先
レポート・コンポーネントのインストール		
前提条件について理解する。	レポートのインストールに必要なシステム前提条件について理解します。	「 <i>IBM Enterprise Marketing Management Products Recommended Software Environments and Minimum System Requirements</i> 」を参照してください。
eMessage に関する前提条件について理解する。	eMessage レポートのインストールに関する追加の前提条件について理解します。	8 ページの『eMessage レポートの前提条件』を参照してください。
IBM EMM 製品のインストール。	レポートで使用するデータを提供する製品をインストールします。	個別の製品インストール・ガイドを参照。
システム・ユーザーのセットアップ。	「設定」>「構成」および「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」ページにアクセスできるユーザーを構成し、レポート・プロパティを構成して、レポート・スキーマの作成に使用する SQL を生成する必要があるときにこのユーザーとしてログインできるようにします。	11 ページの『ReportsSystem 役割を持つユーザーの構成』を参照してください。

表 1. レポートのインストール・ロードマップ (続き):

ステップ	説明	詳細の参照先
Marketing Platform がインストールされているマシンへのレポート・スキーマのインストール。	IBM マスター・インストーラーとレポート・バック・インストーラーを同じディレクトリーに配置し、マスター・インストーラーを起動します。	12 ページの『IBM EMM システムへのレポート・スキーマのインストール』を参照してください。
JDBC データ・ソースの作成。	Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーで、レポートに使用する製品用のシステム・テーブル・データベースに対する JDBC データ・ソース接続を作成します。	13 ページの『JDBC データ・ソースの作成』を参照。
IBM Cognos BI のインストールおよびテスト		
IBM Cognos BI のインストール	IBM Cognos 資料の指示に従ってインストールを行ってから、システムをテストします。	15 ページの『第 4 章 IBM Cognos BI のインストールおよびテスト』を参照。
Cognos システムへの IBM EMM 統合コンポーネントおよびレポート・モデルのインストール		
Marketing Platform システム・テーブルで使用する JDBC ドライバーの入手。	Marketing Platform で使用する JDBC ドライバーを、Cognos Content Manager がインストールされているマシンにコピーします。IBM 認証が実装されている場合、Cognos はユーザー情報を入手する際にこの認証を使用します。	20 ページの『Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』を参照。
Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのインストール。	IBM EMM マスター・インストーラー、Marketing Platform インストーラー、および製品レポート・バック・インストーラーを、Cognos Content Manager がインストールされているマシンで同じディレクトリーに配置し、マスター・インストーラーを起動します。	20 ページの『IBM Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのインストール』を参照。
IBM EMM アプリケーション・データベース用の Cognos データ・ソースの作成。	Cognos アプリケーションでは、レポートのために IBM EMM アプリケーション・データ・ソースに対する接続が必要です。Cognos Connection の「管理」セクションを使用して、こうしたデータ・ソースを作成します。	21 ページの『IBM EMM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照。
E メール通知のセットアップ。	レポートを E メール添付ファイルとして送信するオプションを有効にする場合、Cognos Configuration で通知を構成します。	22 ページの『E メール通知のセットアップ』を参照。
Cognos ファイアウォールの構成。	Cognos Configuration で、IBM EMM システムを有効なドメインまたはホストとして指定します。	23 ページの『IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM の構成』を参照。
eMessage の場合、ステージング表、索引、およびストアド・プロシージャを作成するためのスクリプトの実行。	eMessage レポート用のステージング表、索引、およびストアド・プロシージャを作成するために必要なスクリプトを実行します。	25 ページの『eMessage レポート用のストアド・プロシージャ、ステージング表および索引の作成』を参照してください。

表 1. レポートのインストール・ロードマップ (続き):

ステップ	説明	詳細の参照先
レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード。	Campaign、eMessage、および Interact にレポートを実装するには、レポートがレポート可能データを抽出するレポート・ビューまたはテーブルを作成します。これらのビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成する際にレポート SQL ジェネレーターが使用するテンプレートは、レポート・バックに含まれています。このステップでは、こうしたテンプレートを Marketing Platform システム・テーブル・データベースにロードします。	26 ページの『レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード』を参照。
ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成。	いくつかの必要な構成プロパティを設定し、レポート SQL ジェネレーターを使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成するための SQL を生成します。	26 ページの『ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』を参照。
レポート・ビューまたはレポート・テーブルの作成。	IBM EMM 製品システム・テーブル・データベースにビューまたはテーブルを作成します。	以下のいずれかのトピックを参照。 32 ページの『Campaign 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定』 33 ページの『Interact 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定』 29 ページの『Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューの作成』 30 ページの『Interact 用のビューまたは具体化されたビューの作成』
レポート・フォルダーのインポート。	Cognos Connection で、レポートの圧縮ファイルをインポートします。	33 ページの『Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート』を参照。
データ・モデルの構成および公開	Cognos データ・ソースの作成時に使用したデータ・ソース・ログインが IBM EMM システム・テーブルの所有者ではない場合は、このステップを実行します。	34 ページの『データ・モデルの構成および公開』を参照。
レポート内の内部リンクの有効化。	IBM EMM レポートには、標準リンクがあります。それらを有効にするには、Cognos データ・モデルでリダイレクト URL を構成する必要があります。	35 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照。
データ・ソース名の確認と公開。	このステップは、Cognos Connection でデフォルトのデータ・ソース名を使用したかどうかによって異なります (このステップの説明を参照)。	36 ページの『データ・ソース名の確認と公開』を参照。
IBM EMM での Cognos レポート・プロパティの構成。	IBM EMM にログインし、Cognos レポート・プロパティを設定します。	37 ページの『Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成』を参照。

表 1. レポートのインストール・ロードマップ (続き):

ステップ	説明	詳細の参照先
レポート・フォルダー権限の構成。	ユーザーに IBM EMM アプリケーション内からレポートを実行する権限を付与するには、デフォルトの ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユーザーに割り当てます。	37 ページの『レポート・フォルダー権限の設定』を参照。
eMessage の場合、ストアード・プロシーチャーの実行およびスケジュール。	eMessage レポートでは、デルタ・リフレッシュ操作を実行するストアード・プロシーチャーによって設定される、ステージング表に入れられたデータを使用します。プロシーチャーのスケジューリングは、ご使用のデータベースに応じて決まります。プロシーチャーのスケジューリングは、IBM Campaign 環境および eMessage 環境や、ビジネス要件に精通したデータベース管理者が行なう必要があります。 注: スタード・プロシーチャーを実行するまで、eMessage レポートのデータは確認できません。	38 ページの『eMessage 用のストアード・プロシーチャーの実行およびスケジューリング』を参照してください。
Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシーチャー。	Interact イベント・パターン・レポートは、ステージング・テーブルに格納されているデータを使用します。このデータは、ストアード・プロシーチャーによって設定されます。ストアード・プロシーチャーは、デルタ・リフレッシュ操作を実行します。 Interact ETL は、自動的にレポート・データの集計をトリガーするので、デルタ・リフレッシュを実行するデータベース・ジョブを構成する必要はありません。	46 ページの『Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシーチャー』を参照してください。
Interact イベント・パターン・レポートのストアード・プロシーチャーの有効化	Interact イベント・パターン・レポートでは、レポートのレンダリングを高速にするため、データの集計処理としてデルタ・リフレッシュ処理を使用します。	49 ページの『Interact イベント・パターン・レポートのストアード・プロシーチャーの有効化』を参照してください。
Interact イベント・パターン・レポートにおける並列実行の度合いの変更	Interact イベント・パターン・レポートの集計処理において並列実行の度合いを高めると、高速になり、パフォーマンスが改善されます。	52 ページの『Interact イベント・パターン・レポートにおける並列実行の度合いの変更』を参照してください。
認証を有効にしない状態での構成のテスト。	レポートをインストールして構成した後で、認証を有効にする前に、いくつかのレポートを実行してセットアップをテストします。	55 ページの『認証を有効にする前の構成のテスト』を参照。
IBM EMM 認証を使用するための Cognos の構成。	IBM EMM Authentication Provider を使用すると、Cognos アプリケーションは IBM EMM 認証を使用して、スイート内のもう 1 つのアプリケーションであるかのように Marketing Platform と通信できるようになります。このステップには、いくつかのサブステップがあります。	56 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』を参照。
認証が構成された状態での構成のテスト。	IBM EMM 認証を使用するように Cognos を構成した後、システムを再びテストします。	60 ページの『認証が構成された状態での構成のテスト』を参照。
レポートのカスタマイズ		

表 1. レポートのインストール・ロードマップ (続き):

ステップ	説明	詳細の参照先
カスタマイズ・ステップの実行。	この時点では、レポートは適切に機能しており、サンプル・レポートはデフォルトの状態にあります。 Campaign、Interact、または Marketing Operations のレポートやレポート・スキーマをカスタマイズしなければならない場合があります。	74 ページの『レポート・スキーマのカスタマイズ』を参照。

インストーラーの機能

どの IBM EMM 製品をインストールまたはアップグレードする場合も、スイート・インストーラーおよび製品インストーラーを使用する必要があります。例えば Marketing Platform をインストールする場合は、IBM EMM スイート・インストーラーおよび IBM Marketing Platform インストーラーを使用する必要があります。

IBM EMM スイート・インストーラーおよび製品インストーラーを使用する前に、以下のガイドラインを確認してください。

- スイート・インストーラーおよび製品インストーラーは、製品のインストール先のコンピューターの同じディレクトリーにある必要があります。ディレクトリー内にマスター・インストーラーと共に複数のバージョンの製品インストーラーがある場合、マスター・インストーラーは常に製品の最新バージョンを、インストール・ウィザードの IBM EMM 製品画面に表示します。
- IBM EMM 製品のインストール直後にパッチをインストールする場合は、パッチのインストーラーがスイートおよび製品のインストーラーと同じディレクトリーにあるようにしてください。
- IBM EMM インストールのデフォルトの最上位ディレクトリーは /IBM/EMM (UNIX) または C:\IBM\EMM (Windows) です。ただし、このディレクトリーはインストール時に変更できます。

インストールのモード

IBM EMM スイート・インストーラーは、GUI モード、コンソール・モード、またはサイレント・モード (無人モードとも呼ぶ) のいずれかのモードで実行できます。Marketing Platform をインストールする際は要件に見合ったモードを選択してください。

GUI モード

グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して Marketing Platform をインストールするには、Windows の GUI モード、または UNIX の X Window System モードを使用します。

コンソール・モード

コマンド・ライン・ウィンドウを使用して Marketing Platform をインストールするには、コンソール・モードを使用します。

注: コンソール・モードでインストーラー画面を正しく表示するには、UTF-8 文字エンコードをサポートするように端末ソフトウェアを構成してください。ANSI などその他の文字エンコードでは、テキストが正しくレンダリングされず、一部の情報が読み取れなくなります。

サイレント・モード

Marketing Platform を複数回インストールするには、サイレント・モード (無人モード) を使用します。サイレント・モードは、インストールに応答ファイルを使用し、インストール・プロセスの間にユーザー入力が必要としません。

インストール・ファイル

全 IBM EMM 製品のインストール・ファイルは、製品のバージョンおよびその製品をインストールする必要のあるオペレーティング・システム (UNIX を除く) に従って命名されています。UNIX の場合、X Window System モードとコンソール・モードでは、インストール・ファイルが異なります。

例

次の表に、製品のバージョンとオペレーティング・システムに従って命名されたインストール・ファイルの例を示します。

表 2. インストール・ファイル:

オペレーティング・システム	インストール・ファイル
Windows: GUI およびコンソール・モード	製品に応じて、インストール・ファイルは <i>Product_N.N.N.N_win64.exe</i> または <i>Product_N.N.N.N_win.exe</i> (ここで、 <i>Product</i> はご使用の製品の名前、 <i>N.N.N.N</i> はその製品のバージョン番号) のようになります。
UNIX: X Window System モード	製品に応じて、インストール・ファイルは <i>Product_N.N.N.N_solaris64.bin</i> または <i>Product_N.N.N.N_solaris.bin</i> (ここで、 <i>Product</i> はご使用の製品の名前、 <i>N.N.N.N</i> はその製品のバージョン番号) のようになります。
UNIX: コンソール・モード	<i>Product_N.N.N.N.bin</i> 。ここで、 <i>Product</i> はご使用の製品の名前、 <i>N.N.N.N</i> はその製品のバージョン番号です。すべての UNIX ベースのオペレーティング・システムで、このファイルをインストールに使用できます。

第 2 章 IBM EMM レポートのインストールの計画

IBM EMM レポートのインストールを計画している場合、システムを正しくセットアップしていることと、環境が障害に対処できるように構成していることを確認する必要があります。

前提条件

IBM EMM 製品をインストールまたはアップグレードするには、その前に、ご使用のコンピューターがすべてのソフトウェアおよびハードウェアの前提条件を満たしていることを確認する必要があります。

システム要件

システム要件について詳しくは、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」ガイドを参照してください。

ネットワーク・ドメイン要件

スイートとしてインストールされる IBM EMM 製品は同じネットワーク・ドメインにインストールする必要があります。これは、クロスサイト・スクリプティングで生じ得るセキュリティー・リスクを制限することを目的としたブラウザー制限に準拠するためです。

JVM 要件

スイート内の IBM EMM アプリケーションは、専用の JavaTM 仮想マシン (JVM) に配置しなければなりません。IBM EMM 製品は、Web アプリケーション・サーバーによって使用される JVM をカスタマイズします。JVM に関連するエラーが発生する場合、IBM EMM 製品専用の Oracle WebLogic または WebSphere[®]ドメインを作成する必要があります。

知識要件

IBM EMM 製品をインストールするには、製品をインストールする環境全般に関する知識が必要です。この知識には、オペレーティング・システム、データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が含まれます。

インターネット・ブラウザー設定

ご使用のインターネット・ブラウザーが、以下の設定に準拠していることを確認してください。

- ブラウザーで Web ページをキャッシュしない。
- ブラウザーはポップアップ・ウィンドウをブロックしてはなりません。

アクセス権限

インストール作業を完了するため、以下のネットワーク権限を保持していることを確認してください。

- 必要なすべてのデータベースに対する管理アクセス権限。
- Web アプリケーション・サーバーおよび IBM EMM コンポーネントを実行するために使用するオペレーティング・システム・アカウントの関連ディレクトリーおよびサブディレクトリーに対する読み取りおよび書き込みアクセス権限
- 編集する必要があるすべてのファイルに対する書き込み権限
- インストール・ディレクトリーやバックアップ・ディレクトリー (アップグレードを行う場合) など、ファイルを保存する必要があるすべてのディレクトリーに対する書き込み権限
- インストーラーを実行するための適切な読み取り/書き込み/実行権限

Web アプリケーション・サーバーの管理パスワードを保持していることを確認してください。

UNIX の場合、IBM 製品のすべてのインストーラー・ファイルはフル権限 (例えば、`rwxr-xr-x`) が必要です。

JAVA_HOME 環境変数

IBM EMM 製品をインストールするコンピューターに **JAVA_HOME** 環境変数が定義されている場合、サポートされる JRE のバージョンがこの変数で指定されていることを確認してください。システム要件について詳しくは、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」ガイドを参照してください。

JAVA_HOME 環境変数が JRE 1.7 を指していることを確認します。**JAVA_HOME** 環境変数が正しくない JRE を指している場合、IBM EMM インストーラーを実行する前に、その **JAVA_HOME** 変数をクリアする必要があります。

以下のいずれかの方法により、**JAVA_HOME** 環境変数をクリアできます。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、**set JAVA_HOME=** (空のままにする) と入力して、Enter キーを押します。
- UNIX: 端末で、**export JAVA_HOME=** (空のままにする) と入力して、Enter キーを押します。

export JAVA_HOME= (空のままにする)

環境変数をクリアした後、IBM EMM インストーラーは、インストーラーにバンドルされている JRE を使用します。インストールが完了した後で、環境変数をリセットすることができます。

eMessage レポートの前提条件

eMessage レポートを使用している場合、レポートをインストールするためのシステム要件に加えて、特定の前提条件に対応する必要があります。

レポートのインストールに関するシステム要件については、7 ページの『前提条件』を参照してください。

パフォーマンスを向上するには、一時表スペースとしてデータ・サイズの 40% が必要になります。データベース管理者と協力し、定期的にデータベースを微調整してください。最良の結果を得るため、別個の非共有ディスクにマウントされた別個のテーブル・スペースに、eMessage システム・テーブルを保管することができます。

IBM DB2® の設定

IBM DB2 バージョン 9.7.8 以降を使用する必要があります。

重要: eMessage レポートの適用を開始する前に、以下の値を設定する必要があります。

db2set DB2_COMPATIBILITY_VECTOR=ORA

DB2 のサイジング例

大部分のデータ設定がレポート・テーブル (UCC_*) に行われる、約 600 GB の IBM DB2 Campaign データベースの場合、以下の設定を使用できます。

- テーブル・スペース・ページ・サイズ: 16K
- 一時テーブル・スペース: 250 GB
- db2 update db cfg using auto_reval DEFERRED_FORCE;
- db2 update db cfg using decflt_rounding ROUND_HALF_UP;
- db2 update db config using LOGFILSIZ 102400;
- db2 update db config using logprimary 13;
- db2 update db config using LOGSECOND 25;
- db2stop force
- db2start

重要: トランザクション・ログのサイズは、レポート処理に影響を与える場合があります。データベース管理者と共に、データベース環境要件、特にトランザクション・ログのサイズについて検討してください。

Oracle 用の設定

Oracle 11g 以上を使用する必要があります。データベース管理者と共に、環境要件を検討してください。

Oracle のサイジング例

大部分のデータ設定がレポート・テーブル (UCC_*) に行われる、約 650 GB の Oracle Campaign データベースの場合、以下の設定を使用できます。

- 一時テーブル・スペース: 250 GB
- REDO ログのサイズ: 2 GB
- REDO ログの数: 4

Microsoft SQL Server の設定

Microsoft SQL Server 2008 以降を使用する必要があります。データベース管理者と共に、環境要件を検討してください。

Microsoft SQL Server のサイジング例

大部分のデータ設定がレポート・テーブル (UCC_*) に行われる、約 520 GB の Microsoft SQL Server データベースの場合、以下の設定を使用できます。

- 一時テーブル・スペース: 250 GB

Internet Explorer 用の設定

Internet Explorer ブラウザーを使用する場合、ブラウザーのセキュリティ設定でファイルのダウンロードの自動プロンプトが許可されていることを確認してください。以下のステップを実行して、ブラウザーでファイルのダウンロードの自動プロンプトが許可されていることを確認します。

1. Internet Explorer を開いて、「ツール」>「インターネット オプション」と移動します。
2. 「セキュリティ」タブで、「レベルのカスタマイズ」をクリックします。
3. 「ダウンロード」セクションまでスクロールダウンします。
4. 「ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示」オプションが「有効にする」に設定されていることを確認します。

第 3 章 レポート・コンポーネントのインストール

ご使用の製品に IBM EMM レポートをインストールするには、レポート・コンポーネントをインストールする必要があります。レポート・コンポーネントには、IBM Cognos システム上の IBM EMM 統合コンポーネントとレポート・モデル、およびレポート・スキーマなどが含まれます。

ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除

「役割の編集」ウィンドウは、ユーザーに役割を割り当てたり、ユーザーから役割を削除したりするために使用します。

以下のタスクを実行して、ユーザーに役割を割り当てる、またはユーザーから役割を削除します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 作業対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。
3. 「役割の編集」をクリックします。

ユーザーに割り当てられていない役割が、左側の「使用可能な役割」ボックスに表示されます。ユーザーに現在割り当てられている役割が、右側の「役割」ボックスに表示されます。

4. 「選択可能な役割」ボックスで役割を選択します。以下のいずれかのタスクを実行します。
 - ユーザーに役割を割り当てる場合は、「選択可能な役割」ボックスで役割を選択して、「追加」をクリックします。
 - ユーザーから役割を削除する場合は、「役割」ボックスで役割を選択して、「削除」をクリックします。
5. 「変更の保存」をクリックしてから、「OK」をクリックします。

ReportsSystem 役割を持つユーザーの構成

レポート・プロパティを構成し、レポート・スキーマの作成に使用される SQL スクリプトを生成するには、ReportsSystem 役割を持つユーザーを構成する必要があります。

ReportsSystem 役割を持つユーザーは、「構成」ページや「レポート SQL ジェネレーター」ページにアクセスして、レポート・プロパティを構成することや、レポート・スキーマの作成に使用される SQL スクリプトを生成することができます。IBM EMM 「設定」>「構成」および「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」ページにアクセスできるユーザーを構成し、レポート・プロパティを構成して、レポート・スキーマの作成に使用する SQL を生成する必要があるときにこのユーザーとしてログインできるようにします。

以下のタスクを実行して、ReportsSystem 役割を持つユーザーを構成します。

1. ユーザーを作成します。platform_admin ユーザーを使用することもできます。

2. 「ユーザーの役割と権限」>「レポート」>「PartitionN」と移動して、作成したユーザーに ReportsSystem 役割を割り当てます。
3. ユーザーが「設定」>「構成」ページおよび「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」ページに対するアクセス権限を保持していることを確認します。

IBM EMM システムへのレポート・スキーマのインストール

IBM EMM スイート・マスター・インストーラーおよびレポート・パッケージ・インストーラーを使用して、Marketing Platform がインストールされているコンピューターにレポート・スキーマをインストールします。

以下のタスクを実行して、レポート・スキーマをインストールします。

1. 「Reports Pack 製品 コンポーネント (Reports Pack Product Components)」ウィンドウで、「レポート・スキーマ」を選択します。
2. 「スキーマ・タイプ選択」ウィンドウに複数のオプションが表示される場合、それは IBM アプリケーションにカスタム属性がプリパッケージされていることを意味します。カスタム属性の有無に応じて、以下のいずれかのタスクを実行します。
 - カスタム属性を含むレポート・スキーマをインストールするには、「**カスタム**」を選択します。Campaign のサンプル・レポートは、カスタム属性を使用するように構成されています。そのため、Campaign レポート・パッケージをインストールし、サンプル・レポートを正しく機能させるには、「**カスタム**」を選択する必要があります。
 - カスタム属性を含まないレポート・スキーマ (eMessage を除く) をインストールするには、「**基本**」を選択します。eMessage では、常に「**カスタム**」を選択してください。

インストーラーはレポート・スキーマをファイル・システムに配置し、スキーマを Marketing Platform に登録します。

3. 以下のタスクを実行して、レポート・スキーマが Marketing Platform に登録されていることを検証します。
 - a. IBM EMM システムに platform_admin ユーザーとしてログインします。
 - b. 「**選択**」>「**構成**」と移動します。
 - c. 「**レポート**」>「**スキーマ**」>「<製品名>」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成プロパティが表示されたら、インストール完了です。

アプリケーションのスキーマ構成プロパティが存在しない場合、レポート・パッケージは登録されておらず、手動でレポート・パッケージを登録する必要があります。以下のタスクを実行して、構成プロパティを手動で登録します。

- a. レポート・パッケージのインストール済み環境の tools ディレクトリーから、**import_all** スクリプトを開きます。

スクリプトは、レポート・パッケージ・インストール済み環境の下の tools ディレクトリーにあります。

- b. **MANAGER_TOOLS_BIN_DIR** 変数の値を、Marketing Platform インストール済み環境の下の **tools/bin** ディレクトリーのパスに設定します。
- c. **import_all.bat** または **import_all.sh** スクリプトを実行します。

このスクリプトによって、Marketing Platform **configTool** ユーティリティーが開始され、スキーマが登録されます。

- d. スキーマ構成プロパティが存在することを確認します。

JDBC データ・ソースの作成

レポートを有効にするすべての IBM EMM で、JDBC データ・ソースを構成する必要があります。IBM EMM レポート SQL ジェネレーター・ツールは、レポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成するために、IBM EMM アプリケーション・データベースに接続できなければなりません。SQL ジェネレーターは、アプリケーション・データベースにアクセスすることなくビューや具体化されたビューを作成する SQL スクリプトを生成することができます。しかし、SQL ジェネレーターはデータ・ソース接続をせずに SQL を検証することはできません。

JDBC データ・ソースを構成するときには、次の表にリストされているデフォルトの JNDI 名を使用してください。

表 3. デフォルトの JNDI 名

IBM アプリケーション	デフォルトの JNDI 名
Campaign	campaignPartition1DS パーティションが複数存在する場合は、パーティションごとにデータ・ソースを作成します。
Interact	+ campaignPartition1DS (設計時データベース用) InteractRTDS (実行時データベース用) InteractLearningDS (学習テーブル用)

デフォルトの JNDI 名を使用しない場合は、使用する名前を書き留めておいてください。SQL ジェネレーター・ツールを実行するときには、データ・ソースの正しい名前を指定する必要があります。

このタスクに関してさらにヘルプが必要な場合は、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

第 4 章 IBM Cognos BI のインストールおよびテスト

IBM との使用許諾契約書によって IBM Cognos BI ライセンスが付与されている場合は、IBM Cognos BI インストール・メディアを IBM Customer Central Web サイトからダウンロードすることができます。

IBM Cognos BI アプリケーション

IBM Cognos BI は、多階層アーキテクチャーに編成される複数のアプリケーション、サーバー、およびサービスの集合です。

IBM Cognos BI を IBM EMM スイートと一緒に使用する際、以下の Cognos BI アプリケーションのサブセットを使用します。

- IBM Cognos BI Server。これは、レポートやフォルダー（および照会やメタデータ・モデル）、Content Manager のためのストレージを提供します。
- IBM Cognos Connection。これは、レポートのインポート、構成、およびスケジュールに使用する Web アプリケーションです。このアプリケーションでは、以下の追加のコンポーネントにアクセスすることもできます。
 - Cognos Viewer。レポートの表示に使用します。Cognos Viewer は、IBM EMM アプリケーションでレポートを表示するモジュールです。
 - Report Authoring。レポートのカスタマイズと新規作成に使用します。
 - Cognos Administration。データ・ソースの構成に使用します。
- IBM Cognos Framework Manager。IBM EMM アプリケーションの IBM Cognos BI レポートをサポートする Cognos データ・モデルの構成とカスタマイズに使用するメタデータ・モデリング・ツールです。
- IBM Cognos Configuration。これは、個々の Cognos BI コンポーネントの構成に使用する構成ツールです。

IBM Cognos BI のインストール・オプション

IBM Cognos BI アプリケーションは、分散環境にインストールするか、すべてのアプリケーションを 1 つのコンピューターにインストールすることができます。

IBM Cognos BI をインストールする前に、「*IBM Cognos BI* アーキテクチャーおよび実装ガイド」で、各種コンポーネント、インストール・オプション、および IBM Cognos が推奨する構成アプローチについて学習してください。

この IBM Cognos 資料では、分散環境にインストールするか 1 台のコンピューターに全コンポーネントをインストールするかの 2 つの一般カテゴリーでインストールを説明しています。最良の結果を得るために、PoC (概念検証) 用かデモンストレーション環境でない限り、1 台のコンピューターに全コンポーネントをインストールしないでください。

IBM レポートが使用する IBM Cognos BI アプリケーションのサブセットをインストールするためには、2 つの IBM Cognos インストーラーを使用する必要があります。

す。1 つは IBM Cognos BI サーバー、Content Manager、Cognos Configuration、および Web ベースのユーザー・インターフェースをインストールするためのものです。別のインストーラーは、メタデータ・モデリング・ツールである Framework Manager をインストールするために使用します。このツールは Windows コンピューターにインストールする必要があるためです。

インストールについて詳しくは、Cognos の資料を参照してください。

IBM Cognos BI Web アプリケーションと Web サーバー

Cognos Connection および IBM Cognos BI Web アプリケーションをホストするには、Microsoft IIS (Internet Information Services) を使用するか、Apache HTTP Web サーバーを使用することができます。

IBM は、Cognos Connection および他の IBM Cognos BI Web アプリケーションをホストする Web サーバーを提供していません。Windows の場合、IBM Cognos の資料は Microsoft IIS (Internet Information Services) を使用していることを前提としていますが、Apache HTTP も使用できます。

Apache HTTP Server を使用する場合は、Apache httpd.conf ファイルの VirtualHost 構成ディレクティブで Cognos Web アプリケーションの Web 別名を正しくセットアップするように注意してください。最も固有性の高い別名 (スクリプト別名) を最初に配列し、別名ごとにディレクトリー権限をセットアップします。

httpd.conf コード・スニペットの例

次の例は、Windows システム上の Apache インストール済み環境のものです。Apache サーバーは、デフォルト・ポート 80 で稼働しています。

```
<VirtualHost *:80>
  ScriptAlias /ibmcognos/cgi-bin "C:/cognos/cgi-bin"
  <Directory "C:/cognos/cgi-bin">
    Order allow,deny
    Allow from all
  </Directory>
  Alias /ibmcognos "C:/cognos/webcontent"
  <Directory "C:/cognos/webcontent">
    Order allow,deny
    Allow from all
  </Directory>
</VirtualHost>
```

注: httpd.conf ファイル・スニペットは、例の目的としてのみ提供されています。ご使用のシステムに応じて Web 別名を構成してください。

IBM Cognos BI とロケール

ローカライズ・バージョン (英語以外) の IBM EMM アプリケーションのレポート・パッケージをインストールするには、アプリケーション・レポート・パッケージの言語に合わせて製品の言語を設定します。

Cognos Content Manager を実行するシステムで、IBM Cognos Configuration を開き、「操作」>「グローバル設定を編集」を選択して、IBM Cognos BI システムのロケールを構成します。詳しくは、「*IBM Cognos Configuration ユーザー・ガイド*」を参照してください。この資料は、Configuration Manager の「ヘルプ」メニューから利用できます。

特定のユーザーに対して製品の言語を変更するには、アプリケーション・レポート・パッケージの言語に合わせて製品の言語を設定します。製品の言語を設定するには、Cognos Connection を開き、「ユーザー設定」の下で、対応する製品の言語を設定します。コンテンツの言語は変更しないでください。コンテンツの言語を変更する場合は、対応するレポートの XPath も変更する必要があります。

第 5 章 IBM EMM および Cognos の統合

IBM Cognos をインストールした後、IBM EMM スイートを IBM Cognos と統合する必要があります。

インストール・チェックリスト: IBM Cognos 統合

IBM Cognos を IBM EMM アプリケーションと統合するには、IBM Cognos データ・ソースを作成し、IBM Cognos アプリケーション・ファイアウォールを構成します。また、レポートを作成し、Marketing Platform 内で Cognos レポート・プロパティを構成し、IBM Cognos で IBM EMM 認証を使用するように構成してテストする必要もあります。

以下のリストは、IBM コンポーネントおよびレポートを IBM Cognos システムにインストールして構成する方法の概要を示しています。

1. 20 ページの『Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』。
2. 20 ページの『IBM Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのインストール』。
3. 21 ページの『IBM EMM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成』。
4. 22 ページの『E メール通知のセットアップ』。
5. 23 ページの『IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM の構成』
6. 23 ページの『eMessage レポートのデルタ処理のためのストアード・プロシージャのインストール』。
7. 25 ページの『eMessage レポート用のストアード・プロシージャ、ステージング表および索引の作成』。
8. 26 ページの『レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード』。
9. 26 ページの『ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』
10. 29 ページの『Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューの作成』
11. 30 ページの『Interact 用のビューまたは具体化されたビューの作成』
12. 32 ページの『Campaign 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定』
13. 33 ページの『Interact 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定』
14. 33 ページの『Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート』
15. 34 ページの『データ・モデルの構成および公開』。
16. 35 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』。
17. 36 ページの『データ・ソース名の確認と公開』。
18. 37 ページの『Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成』。
19. 37 ページの『レポート・フォルダー権限の設定』。

20. 38 ページの『eMessage 用のストアード・プロシージャの実行およびスケジューリング』
21. 55 ページの『認証を有効にする前の構成のテスト』.
22. 56 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』.
23. 60 ページの『認証が構成された状態での構成のテスト』.

Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手

Cognos が Marketing Platform システム・テーブルからユーザー情報を取得できるようにするため、Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーを入手する必要があります。Cognos は、IBM EMM の認証のためにユーザー情報を必要とします。

IBM EMM システムをセットアップしたときに Marketing Platform システム・テーブルの JDBC データ・ソースを構成するために使用した JDBC ドライバーおよび必要な関連ファイルを入手します。さらに、その後で、IBM EMM 認証を使用するように Cognos を構成する必要もあります。

この JDBC ドライバーは、Cognos Content Manager がインストールされているコンピューターの Cognos インストール済み環境にある `webapps\p2pd\WEB-INF\AAA\lib` ディレクトリーにコピーしてください。

IBM Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのインストール

IBM Cognos システムに、レポート・モデルおよび統合コンポーネントをインストールする必要があります。Cognos インストールが分散インストールである場合、Cognos をインストールしたサーバーにレポート・パッケージをインストールする必要があります。

重要: IBM DB に eMessage レポート・パックをインストールしている場合、eMessage レポートの適用を開始する前に、以下の値を設定していることを確認してください。

db2set DB2_COMPATIBILITY_VECTOR=ORA

以下のステップを実行して、レポート・パックをインストールします。

1. Cognos Content Manager がインストールされているサーバーで、単一のディレクトリーに以下の IBM EMM インストーラーを配置します。
 - IBM EMM マスター・インストーラー
 - Marketing Platform
 - レポート・パック・インストーラーまたはレポート作成機能を実装する製品のインストーラー
2. IBM EMM マスター・インストーラーを実行して、Marketing Platform およびインストール対象のレポート・パッケージを選択します。
3. プロンプトに従い、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの接続情報を入力します。

4. Marketing Platform インストーラーが起動して「プラットフォーム・インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)」ウィンドウが表示されたら、「**Reports for IBM Cognos 10 BI**」オプションを選択して、その他のオプションをクリアします。
5. Marketing Platform インストーラーで JDBC ドライバーへのパスの入力を求めるプロンプトが出されたら、Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの完全修飾パスを入力します。
6. Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストール済み環境の場所の入力を求めるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール済み環境の最上位ディレクトリーを入力するか、参照します。

このフィールドで提供されるデフォルト値は、ご使用の IBM Cognos システムの実際のファイル構造に基づかない静的な値です。

7. レポート・パック・インストーラーでインストール・オプションが表示された場合、「**製品 Reports Package**」を選択して、レポート・スキーマのオプションをクリアします。

このオプションは、レポート・アーカイブを Cognos コンピューターにコピーします。後ほど、このアーカイブをインポートする必要があります。

IBM EMM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成

IBM Cognos アプリケーションには、IBM EMM アプリケーション・レポート用のデータのソースを識別する独自のデータ・ソースが必要です。

IBM EMM レポート・パッケージで提供される IBM Cognos データ・モデルは、以下の表に示されるデータ・ソース名を使用するように構成されています。

表 4. Cognos データ・ソース

IBM EMM アプリケーション	Cognos データ・ソース名
Campaign	CampaignDS
eMessage	eMessageTrackDS
Interact	InteractDTDS (設計時データベース用) InteractRTDS (実行時データベース用) InteractLearningDS (学習データベース用) InteractETLDS (ETL データベース用)
Marketing Operations	MarketingOperationsDS
Leads	LeadsDS (データマート・テーブル用)
Distributed Marketing	CollaborateDS (Distributed Marketing データベース用) CustomerDS (カスタマー・データベース用) CampaignDS (Campaign データベース用)

IBM アプリケーション・データベースに対応する Cognos データ・ソースを作成するには、以下のガイドラインを使用してください。

- Cognos Connection の「管理」セクションを使用します。
- Cognos データ・ソース・テーブル内に表示されるデフォルトのデータ・ソース名を使用します。これにより、データ・モデルを変更する必要がなくなります。
- 選択するデータベース・タイプは、IBM アプリケーション・データベースのデータベース・タイプと一致していなければなりません。Cognos の資料やヘルプ・トピックを参考に、データベース固有のフィールドにどのように入力するかを判断してください。

Campaign および eMessage の場合、適切なデータベースは Campaign です。

- Cognos Content Store ではなく、必ず IBM EMM アプリケーション・データベースを指定してください。
- 「サインオン」セクションを構成する際に、「パスワード」オプションと「すべてのユーザー' グループで使用できるサインオンを作成」オプションを選択します。
- 「サインオン」セクションで、IBM EMM アプリケーション・データベース・ユーザーのユーザー資格情報を指定します。
- Cognos データ・ソース・テーブルを調べ、構成するレポートのデータ・モデルが必要とするすべてのデータ・ソースを作成してください。例えば、Interact 用のレポート・データは 3 つのデータベースにあるので、それらのデータベースごとに別々の Cognos データ・ソースを作成する必要があります。
- Campaign システムに複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに別々のデータ・ソースを作成します。例えば、Campaign および eMessage が複数パーティション用に構成されている場合、パーティションごとに別々の Campaign および eMessage データ・ソースを作成します。
- 「テスト接続」機能を使用して、各データ・ソースが正しく構成されていることを確認します。

Cognos データ・ソースの構成について詳しくは、「*IBM Cognos 管理およびセキュリティ・ガイド*」および Cognos オンライン・ヘルプを参照してください。

E メール通知のセットアップ

IBM EMM レポートを E メール添付ファイルとして送信するように IBM Cognos を構成できます。このステップはオプションです。IBM Cognos レポートが IBM EMM インターフェースに表示される場合、ウィンドウの Cognos Viewer ツールバーには、レポートを E メール内の添付ファイルとして送信するオプションが表示されます。

E メール通知をセットアップするには、その前に、以下の情報を入手してください。

- SMTP サーバーのホスト名または IP アドレス
- そのサーバーのアカウントのユーザー名およびパスワード
- デフォルトの送信者の E メールアドレス

以下のタスクを実行して、E メール通知をセットアップします。

1. 「Cognos Configuration」ウィンドウで、「データ・アクセス」>「通知」を選択します。
2. 次のいずれかのフォーマットを使用して、SMTP メール・サーバーのホスト名または IP アドレスとポートを指定します。
 - host:port
 - IPAddress:port例えば、serverX:25 または 192.168.1.101:25 と指定します。通常、デフォルトの SMTP ポートは 25 です。
3. アカウントのユーザー名とパスワードを設定するには、「値」列をクリックし、鉛筆アイコンをクリックして「値」ダイアログ・ボックスを開きます。
4. user@company.com フォーマットを使用して、デフォルト送信者を指定します。

IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM の構成

IBM Cognos Application Firewall は、IBM Cognos サーバーで要求が処理される前に、その要求を分析し、検証します。IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM を構成するには、IBM EMM システムを有効なドメインまたはホストとして指定する必要があります。

以下のタスクを実行して、IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM を構成します。

1. 「Cognos Configuration」ウィンドウで、「セキュリティ」>「IBM Cognos Application Firewall」と選択します。
2. 「有効なドメインまたはホスト」プロパティ・ウィンドウに、Marketing Platform が稼働しているコンピューターの完全修飾コンピューター・ホスト名（ドメインおよびポートを含む）を入力します。 以下に例を示します。

serverXYZ.mycompany.com:7001

重要: 分散 IBM EMM 環境を使用している場合は、Cognos レポートを提供する IBM EMM 製品がインストールされているすべてのコンピューターで、上記の手順を実行する必要があります。

例えば、Marketing Platform、Campaign、および Marketing Operations でレポートが提供されます。

3. 構成を保存します。
4. IBM Cognos サービスを再始動します。

eMessage レポートのデルタ処理のためのストアード・プロシージャのインストール

IBM eMessage レポートには、eMessage システム・テーブルに関連付けられたスケーリング・テーブルが必要です。システム・テーブルは、Campaign スキーマの一部です。eMessage レポートで使用するメッセージ応答データを処理するためのストアード・プロシージャを、定期的に行う必要があります。

スキーマの変更について詳しくは、「*IBM eMessage System Tables and Data Dictionary*」を参照してください。

eMessage ストアード・プロシージャーの初回セットアップは、以下の新規データベース・スクリプトに依存しています。

- **acer_indexes_DB 名.sql**
- **acer_scripts_DB 名.sql**
- **acer_tables_DB 名.sql**

Oracle、IBM DB2、および Microsoft SQL Server データベースの場合、データベース・スクリプトは *Campaign_reportspack_home¥cognos10¥emessage-dd1* ディレクトリー内にあります。

このスクリプトで、索引、テーブル、ビュー、およびストアード・プロシージャーがセットアップされます。ストアード・プロシージャーは、ステージング・テーブルにデータを設定するためにメッセージ・データをリフレッシュします。バッチ・プロシージャーを定期的に行って、ステージング・テーブルにデータを設定する必要があります。このストアード・プロシージャーを実行する操作を、デルタ処理といいます。

eMessage ストアード・プロシージャーの初回の実行は、テーブルに入れているデータの量によっては、完了までに長時間を要する可能性があります。後続のデルタ処理も、完了までに長時間を要する可能性があります。ストアード・プロシージャーによって処理されるメール配信インスタンス (コンテナ) の数を制限することにより、処理時間を大幅に削減することができます。

デフォルトでは、データは過去 90 日間について処理されます。ただし、このデフォルト値は変更できます。eMessage 用の SQL スクリプトを実行する前または後に、デフォルト値を変更できます。SQL スクリプトの実行について詳しくは、25 ページの『eMessage レポート用のストアード・プロシージャー、ステージング表および索引の作成』を参照してください。

次の例では、使用データベースが Oracle である場合に、処理を過去 30 日に制限するために **acer_tables** スクリプトに加えることのできる変更について説明しています。

注: この変更には、UARE_MAILING_MASTER ビューの変更も含まれます。

現行ビューの定義

```
CREATE VIEW UARE_MAILING_MASTER AS
(
  (SELECT UCC_CONTAINER.CAMPAIGNID,UCC_CONTAINER.CONTAINERID,
    substr(UCC_CONTAINERATTR.STRINGVALUE,1,100) AS CAMPAIGN_NAME,
    UCC_CONTAINER.CONTAINERNAME AS MAILING_INST,
    UCC_CONTAINER.CREATED AS MAILING_CREATED,
    UCC_CONTAINER.CONTAINERTYPEID CONTAINERTYPEID,
    UCC_CONTAINER.CONTCHANNELTYPEID CONTCHANNELTYPEID
  FROM
    UCC_CONTAINER,UCC_CONTAINERATTR
  WHERE
    UCC_CONTAINERATTR.CONTAINERID=UCC_CONTAINER.CONTAINERID AND
    UCC_CONTAINERATTR.ATTRIBUTENAME='CampaignName' AND
    UCC_CONTAINER.CREATED >= sysdate - 91
  )
)
```

上述のユース・ケース用に変更したビューの定義 (Oracle データベース)

```
CREATE VIEW UARE_MAILING_MASTER AS
(
SELECT UCC_CONTAINER.CAMPAIGNID, UCC_CONTAINER.CONTAINERID,
substr(UCC_CONTAINERATTR.STRINGVALUE,1,100) AS CAMPAIGN_NAME,
UCC_CONTAINER.CONTAINERNAME AS MAILING_INST, UCC_CONTAINER.CREATED AS
MAILING_CREATED FROM UCC_CONTAINER,UCC_CONTAINERATTR WHERE
UCC_CONTAINERATTR.CONTAINERID=UCC_CONTAINER.CONTAINERID AND
UCC_CONTAINERATTR.ATTRIBUTENAME='CampaignName'
AND
UCC_CONTAINER.CREATED >= sysdate - 30
)
```

使用可能なすべてのレポート・データを再表示するには、
UARE_MAILING_MASTER ビューを変更してビューから日付フィルターを削除し、
すべての Oracle または DB2 の具体化されたビューを再度リフレッシュします。例
えば、上記のビュー作成のサンプルの場合は、次の行を削除します。

```
UCC_CONTAINER.CREATED >= sysdate - 30
```

eMessage レポート用のストアード・プロシージャ、ステージング表および索引の作成

レポート・テンプレートをインストールまたはアップグレードした後、eMessage レポートをレンダリングする前に、特定の SQL スクリプトを実行する必要があります。この SQL スクリプトはストアード・プロシージャとステージング・テーブルを作成します。

Campaign Reports Pack のホーム¥cognos10¥emessage-dd1 ディレクトリーは、IBM Cognos Content Manager をホストするサーバー上にあり、Oracle、IBM DB2、および Microsoft SQL Server を対象とした以下のデータベース・スクリプトが入っています。

- acer_indexes_DB 名.sql
- acer_scripts_DB 名.sql
- acer_tables_DB 名.sql

以下のステップを実行して、データベース・スクリプトを実行します。

1. Campaign データベースに対して以下のスクリプトを実行します。

acer_indexes_DB 名.sql

スクリプトが完了するまでに十分な時間がかかることを確認してください。スクリプトが完了するまでに要する時間は、eMessage システム・テーブルに保管されているデータの量に応じて異なります。詳細については、23 ページの『eMessage レポートのデルタ処理のためのストアード・プロシージャのインストール』を参照してください。

2. Campaign データベースに対して以下のスクリプトを実行します。

acer_tables_DB 名.sql

このスクリプトは、eMessage システム・スキーマにデルタ処理ステージング表を作成します。

3. Campaign データベースに対して以下のスクリプトを実行します。

acer_scripts_DB 名.sql

このスクリプトは、eMessage にレポートをインストールした後で構成する必要があるストアード・プロシージャを作成します。

データベースが DB2 である場合は、このスクリプトを使用する際に、終了文字を ; (セミコロン) から ! (感嘆符) に変更します。

注: このストアード・プロシージャを定期的に行われるように構成して、ステージング・テーブルにデータを設定する必要があります。eMessage レポート用のストアード・プロシージャを実行するまで、レポートのデータは確認できません。

ストアード・プロシージャの実行とスケジューリングについては、38 ページの『eMessage 用のストアード・プロシージャの実行およびスケジューリング』を参照してください。

レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード

レポート・スキーマを持つ IBM EMM アプリケーションのレポート・パッケージには、テンプレート SQL select ステートメントを uar_common_sql テーブルにロードする SQL スクリプトが含まれます。レポート SQL ジェネレーターは、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成する際に、これらのテンプレートを使用します。

以下のステップを実行して、テンプレートをロードするスクリプトを実行します。

1. レポート・バック・インストール済み環境の下の schema ディレクトリを参照し、**templates_sql_load.sql** スクリプトを見つけます。
2. この **templates_sql_load.sql** スクリプトを Marketing Platform データベースで実行します。

ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成

ビューまたはテーブルの作成スクリプトを使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成することができます。レポートは、レポート・ビューまたはレポート・テーブルからレポート可能データを抽出します。SQL ジェネレーターを使用して、ビューまたはテーブルの作成スクリプトを作成します。

eMessage レポートを使用している場合は、Campaign データベースに対して SQL スクリプトを実行してステージング表とバッチ・プロシージャを作成したことを確認します。詳しくは、25 ページの『eMessage レポート用のストアード・プロシージャ、ステージング表および索引の作成』を参照してください。

以下のタスクを実行して、ビューまたはテーブルの作成スクリプトを作成します。

1. ReportsSystem 役割を持つユーザーとして IBM EMM にログインします。

JDBC データ・ソースでデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合は、ステップ 2 に進みます。

JDBC データ・ソースでデフォルトの JNDI 名を使用した場合は、ステップ 3 に進みます。

2. JDBC データ・ソースでデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合は、以下のステップを実行します。
 - a. 「設定」>「構成」>「レポート」>「スキーマ」>「製品名」を選択します。
 - b. JNDI プロパティのデフォルト値を、JDBC 接続で使った JNDI 名に一致するように変更します。
3. 「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」を選択します。
4. 「製品」フィールドで、適切な IBM アプリケーションを選択します。
5. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。
6. 「データベース・タイプ」を選択します。
7. 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション (ビュー、具体化されたビュー、またはテーブル) を選択します。

注:

- データベース・タイプが Microsoft SQL Server に設定されている場合、具体化されたビューは選択できません。
- **eMessage の場合のみ。** Oracle および IBM DB2 の場合、eMessage には具体化されたビューが必要です。SQL Server の場合、eMessage にはビューが必要です。

eMessage のビューまたは具体化されたビューの作成について詳しくは、29 ページの『Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューの作成』を参照してください。

重要: JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成する SQL スクリプトを検証できません。

8. 「Drop 文を生成しますか?」を「いいえ」に設定しておきます。
9. 生成された SQL スクリプトを調べるには、「生成」をクリックします。SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにそのスクリプトが表示されます。
10. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定を求めるプロンプトが出されます。「スキーマ」フィールドから単一のレポート・スキーマを選択した場合、スクリプト名はスキーマの名称 (例: **eMessage_Mailing_Performance.sql**) と一致します。複数のレポート・スキーマを選択すると、スクリプト名には製品名 (例: **Campaign.sql**) が使われます。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行すると、データベースに次のエラーが表示される場合があります。

"SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません。"

この場合でも、具体化されたビューは正常に作成されます。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行すると、データベースに次のエラーが表示される場合があります。

SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません。

11. スクリプトを保存する場所を指定して、「保存」をクリックします。ファイルの名前を変更する場合は、必ず選択したスキーマを明確に示す名前を使用してください。
12. 生成する各スクリプトについて、ステップ 5 から 12 までを繰り返します。

注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

データソース別の SQL スクリプト

各データ・ソース用にビューまたは具体化されたビューを作成するには、別個の SQL スクリプトを使用します。

次の表には、各データ・ソース用に生成する必要があるスクリプト、結果として生成されるスクリプト名、およびビューまたは具体化されたビューを作成するために IBM EMM アプリケーション・データベースに対して実行する必要があるスクリプトに関する情報が示されます。

注:

- この表にはデータ・ソースおよび生成スクリプトのデフォルト名をリストしていますが、これらはお客様が変更している場合があります。
- Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

表 5. データソース別の SQL スクリプト

レポート・スキーマ	データソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルト名)
すべての Campaign レポート・スキーマ	Campaign システム・テーブル (campaignPartition1DS)	Campaign.sql (レポート・スキーマごとに別のスクリプトを生成していない場合)。別のスクリプトを生成している場合、各スクリプトの名前は個々のスキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システム・テーブルに関する表を追跡します。 (campaignPartition1DS)	eMessage_Mailing_Performance.sql
Interact 配置履歴、Interact パフォーマンス、および Interact ビュー	Interact 設計時間データベース (campaignPartition1DS)	Interact.sql
Interact 学習	Interact 学習テーブル (InteractLearningDS)	Interact_Learning.sql
Interact ランタイム	Interact ランタイム・データベース (InteractRTDS)	Interact_Runtime.sql

Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューの作成

SQL スクリプトを使用して、Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューを作成することができます。レポートでは、ビューまたは具体化されたビューを使用してレポート可能なデータを抽出します。

注: Oracle および DB2 の場合、eMessage には具体化されたビューが必要です。SQL Server の場合、eMessage にはビューが必要です。

以下のステップを実行して、Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューを作成します。

1. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。
2. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当するアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行すると、データベースから次のエラーが返される場合があります。

SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません。 この場合でも、具体化されたビューは正常に作成されます。

DB2 データベースを使用する Campaign の場合は、ステップ 3 に進みます。

eMessage の場合は、ステップ 4 に進みます。

3. DB2 データベースを使用する Campaign の場合、DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします。デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です。次のコマンドを使用して、ヒープ・サイズを増やします。

```
db2 update db cfg for databasename using stmtheap 10240
```

databasename は、Campaign データベースの名前です。

ヒープ・サイズを増やすことで、ユーザーが収支サマリー・レポートのようなレポートの実行時にキャンペーンをすべて選択した場合でも、IBM Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

4. eMessage に対して、以下のアクションを実行します。
 - a. レポート・パック・インストール済み環境の ReportsPackCampaignTools ディレクトリーで、**uare_lookup_create_DB_type.sql** スクリプト (ここで、*DB_type* は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ) を見つけます。
 - b. スクリプトの該当するバージョンを編集して **drop table** ステートメントを除去し、スクリプトを保存します。
 - c. Campaign システム・テーブル・データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを実行します。

データ同期のセットアップ

データベース管理ツールを使用して、必ず IBM EMM アプリケーションの実動データベースと具体化されたビューの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

eMessage の場合、Oracle および DB2 用の具体化されたビューは、ストアド・プロシージャによってリフレッシュされます。ストアド・プロシージャはまた、uare_delta_refresh_log テーブルも更新します。DB2 のリフレッシュ・プロセスが失敗した場合、ログ・テーブルにエラーが表示されます。ストアド・プロシージャについて詳しくは、38 ページの『eMessage 用のストアド・プロシージャの実行およびスケジューリング』を参照してください。

Interact 用のビューまたは具体化されたビューの作成

SQL スクリプトを使用して、Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成することができます。レポートでは、ビューまたは具体化されたビューを使用してレポート可能なデータを抽出します。

Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成するには、その前に、**lookup_create SQL** スクリプトを実行するコンピューターの言語設定で UTF-8 エンコード方式が有効になっていることを確認してください。言語設定を UTF-8 に変更するためのガイドラインとして、次の表を参照してください。

表 6. Oracle および DB2 での言語設定の変更

データベース・タイプ	ガイドライン
Oracle	ご使用のデータベースが Oracle である場合、以下のステップをガイドラインとして使用します。 1. 開いている Oracle セッションがあれば、すべて閉じます。 2. 「レジストリー エディター」を開きます。 3. 「HKEY_LOCAL_MACHINE」>「SOFTWARE」>「ORACLE」と参照して、Oracle ホームのフォルダー（例えば、KEY_OraDb10g_home1）を開きます。 4. NLS_LANG 設定を検索します。 5. 指定されている値の最後の部分が UTF8 であることを確認します。例えば、AMERICAN_AMERICA.UTF8 です。

表 6. Oracle および DB2 での言語設定の変更 (続き)

データベース・タイプ	ガイドライン
DB2	ご使用のデータベースが DB2 である場合、以下のステップをガイドラインとして使用します。 1. スクリプトを実行する、DB2 クライアントがインストールされているコンピューターから、DB2 コマンド・ウィンドウを実行します。その後、以下のコマンドを実行します。 db2set 2. 出力で、変数/値のペア DB2CODEPAGE=1208 を探します。 3. DB2CODEPAGE=1208 変数が設定されていない場合、以下のコマンドを実行します。 db2 db2set db2codepage=1208 4. 変更を有効にするために、セッション・ウィンドウを閉じます。

以下のステップを実行して、Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成します。

1. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。
2. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当するアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行すると、データベースに次のエラーが表示される場合があります。

"SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません。"

この場合でも、具体化されたビューは正常に作成されます。

3. レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の tools サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに合った **lookup_create** スクリプトを探します。例えば、SQL Server 用のスクリプトの名前は **uari_lookup_create_MSSQL.sql**、というようになっています。
4. **lookup_create** スクリプトを Interact 設計時データベースで実行します。使用するデータベース・ツールが変更をコミットするようにしてください。例えば、データベースの自動コミット・オプションを **true** に設定しなければならない場合があります。
5. **<Interact_ReportPack_Installer_Home>%Cognos10%\interact-ddl\<DB Type>%** フォルダを参照します。
6. DB2 の場合は、**db2set DB2_COMPATIBILITY_VECTOR=ORA** パラメーターを設定します。
7. ETL データベースで **acir_tables_<DB Type>.sql** スクリプトを実行します。

データ同期のセットアップ

スケジュールされた抽出、変換、およびロード (Extraction、Transformation、および Load (ETL)) 方式または任意のカスタム方式を使用して、必ず IBM EMM アプリケーションの実動データベースと新規のレポート・テーブルの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

Campaign 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定

SQL スクリプトを使用して、Campaign 用のレポート・テーブルを作成し、データを設定することができます。レポートでは、レポート・テーブルを使用してレポート可能なデータを抽出します。

以下のステップを実行して、Campaign 用のレポート・テーブルを作成し、データを設定します。

1. レポート・データベースを作成します。
2. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。
3. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当するアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。
4. DB2 データベースを使用する Campaign の場合、DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします。デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です。次のコマンドを使用して、ヒープ・サイズを増やします。

db2 update db cfg for *databasename* using stmtheap 10240

databasename は、Campaign データベースの名前です。

ヒープ・サイズを増やすことで、ユーザーが収支サマリー・レポートのようなレポートの実行時にキャンペーンをすべて選択した場合でも、IBM Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

5. Marketing Platform インストール・ディレクトリー内の db/calendar サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに該当する **ReportsCalendarPopulate** スクリプトを探します。 **ReportsCalendarPopulate** スクリプトで、次のテーブルが作成されます。

- UA_Calendar
- UA_Time

6. テーブル作成スクリプトを使用して作成した新規データベースで **ReportsCalendarPopulate** スクリプトを実行します。

7. **DB2 の場合のみ**、以下のタスクを実行します。

- 次のコマンドを使用して、コマンド・プロンプトからスクリプトを実行します。

db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql

- DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合は、「ステートメント終了文字」フィールドで終了文字を @ 文字に変更します。

8. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実稼働システム・データベースからの適切なデータを設定します。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

データ同期のセットアップ

スケジュールされた抽出、変換、およびロード (Extraction、Transformation、および Load (ETL)) 方式または任意のカスタム方式を使用して、必ず IBM EMM アプリケーションの実動データベースと新規のレポート・テーブルの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

Interact 用のレポート・テーブルの作成およびデータ設定

SQL スクリプトを使用して、Interact 用のレポート・テーブルを作成し、データを設定することができます。レポートでは、レポート・テーブルを使用してレポート可能なデータを抽出します。

以下のステップを実行して、Interact 用のレポート・テーブルを作成し、データを設定します。

1. レポート・データベースを作成します。
2. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当するアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。
3. **lookup_create** スクリプトを Interact 設計時データベースで実行します。使用するデータベース・ツールが、変更を確実にコミットするようにしてください。例えば、データベースの自動コミット・オプションを **true** に設定しなければならない場合があります。
4. レポート・パッケージのインストール・ディレクトリ内の **tools** サブディレクトリを見つけ、データベース・タイプに合った **lookup_create** スクリプトを探します。例えば、SQL Server 用のスクリプトの名前は **uari_lookup_create_MSSQL.sql**、というようになっています。
5. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実稼働システム・データベースからの適切なデータを設定します。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

データ同期のセットアップ

スケジュールされた抽出、変換、およびロード (Extraction、Transformation、および Load (ETL)) 方式または任意のカスタム方式を使用して、必ず IBM EMM アプリケーションの実動データベースと新規のレポート・テーブルの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート

IBM EMM アプリケーション・レポートは、レポート・パッケージ・インストーラーによって IBM Cognos コンピューターにコピーされる圧縮 (.zip) ファイルに入っています。Cognos Connection にこの圧縮ファイルをインポートする必要があります。

以下のタスクを実行して、レポートを含んだ圧縮ファイルを Cognos Connection にインポートします。

1. IBM Cognos コンピューター上のレポート・パッケージ・インストール済み環境の Cognosnn ディレクトリーを参照します。ここで、nn はバージョン番号を示します。
2. 圧縮レポート・アーカイブ・ファイル (例えば、Unica Reports for Campaign.zip) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。分散 IBM Cognos 環境では、これは Content Manager を実行しているシステム上にあります。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレクトリーで、Cognos Content Manager と一緒にインストールされた Cognos Configuration ツールで指定されます。例えば、cognos¥deployment です。

3. Cognos コンピューターでレポート・パッケージ・インストール済み環境の下の Cognosnn\ProductNameModel サブディレクトリーを見つけます。
4. サブディレクトリー全体を、Cognos Framework Manager を実行しているシステム上の、Framework Manager がアクセスできる任意の場所にコピーします。
5. Cognos Connection を開きます。
6. 「ようこそ」ページで、「Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)」をクリックします。

「ようこそ」ページがオフになっている場合は、Cognos Connection ユーザー設定でオンに戻してください。

7. 「構成」タブをクリックします。
8. 「コンテンツ管理」を選択します。



9. Click the  icon on the toolbar. (**New Import**) on the toolbar.
10. 「インポートの新規作成ウィザード」で一連の操作を行う際には、以下のガイドラインに従ってください。
 - a. 前の手順でコピーしたレポート・アーカイブを選択します。
 - b. パブリック・フォルダーの内容リストで、パッケージそのもの (青のフォルダー) を含む、すべてのオプションを選択します。
 - c. まだユーザーにパッケージおよびそのエントリーにアクセスさせない場合は、「インポート後に無効化」を選択します。IBM EMM アプリケーション・ユーザーがレポートを使用できるようにする前にそのレポートをテストする場合、この選択を行います。

データ・モデルの構成および公開

IBM EMM システム・テーブルを Cognos データ・ソースとしてセットアップする際に、IBM EMM アプリケーション・システム・テーブルの所有者ではないユーザーとしてログインしている可能性があります。このような場合には、データ・モデルを構成し、公開する必要があります。

注: IBM EMM アプリケーション・システム・テーブルの所有者を使用してデータ・ソースにログインしている場合、そのデータ・ソースのデータ・モデルを構成および公開する必要はありません。

このステップは eMessage レポートの場合はオプションです。

以下のタスクを実行して、データ・モデルを構成および公開します。

1. レポート・パッケージ・インストール済み環境で Model ディレクトリーを見つけ、Model ディレクトリー内のすべてのファイルを Cognos Framework Manager インストール・ディレクトリーの下の任意の場所にコピーします。ファイルは、アプリケーション固有のデータ・モデルを構成します。
2. Framework Manager でプロジェクト・ファイルを開きます。プロジェクト・ファイルの拡張子は .cpf であり、ファイル名には IBM EMM アプリケーション名が含まれます (例えば、製品名 Model.cpf)。
3. アプリケーションのデータ・モデルを開き、以下のステップを実行します。
 - a. プロジェクト・ビューアーで「データ・ソース」を展開します。
 - b. アプリケーションのデータ・ソースをクリックします。
 - c. 次の表の説明に従って、データ・ソースを更新します。

表 7. データ・ソース :

データベース	フィールド
SQL Server	• カタログ: IBM EMM アプリケーション・データベースの名前を入力します。 • スキーマ: IBM EMM アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。例えば、dbo と入力します。
Oracle	• スキーマ: IBM EMM アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。
DB2	• スキーマ: IBM EMM アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。

4. パッケージを保存し、再公開します。

IBM Cognos でのパッケージの公開の詳細については、「*Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド*」を参照してください。

レポート内の内部リンクの有効化

IBM EMM アプリケーション・レポートには、標準リンクがあります。リンクが適切に機能できるようにするには、IBM Cognos Application Firewall を構成する必要があります。また、IBM EMM アプリケーション・レポートの Cognos データ・モデルでリダイレクト URL を構成することも必要です。

注: このステップは、eMessage レポートの場合は不要です。

以下のタスクを実行して、IBM EMM アプリケーション・レポートの Cognos データ・モデルでリダイレクト URL を構成します。

1. Cognos Framework Manager から、Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした <製品名>Model サブディレクトリーを参照し、.cpf ファイルを選択します。例えば、CampaignModel.cpf を選択します。
2. 「パラメーター・マップ」>「環境」を選択します。
3. 「環境」を右クリックし、「定義の編集」を選択します。
4. 「リダイレクト URL (Redirect URL)」セクションで、「値」フィールドを選択します。サーバー名とポート番号を IBM EMM システムに合わせて編集し、残りの URL はそのままにしておきます。規則として、ホスト名にはドメイン・ネームが含まれます。

例えば、Campaign の場合は次のようになります。

```
http://serverX.ABCompany.com:7001/Campaign/  
redirectToSummary.do?external=true&
```

例えば、Marketing Operations の場合は次のようになります。

```
http://serverX.ABCompany.com:7001/plan/callback.jsp?
```

5. モデルを保存し、パッケージを公開します。
 - a. ナビゲーション・ツリーから、モデルの「パッケージ」ノードを展開します。
 - b. パッケージ・インスタンスを右クリックし、「パッケージを発行」を選択します。

データ・ソース名の確認と公開

モデルを Framework Manager から Cognos Content Store に公開する際、モデルでレポートのデータ・ソースとして指定する名前は、Cognos Connection で作成したデータ・ソースの名前と一致する必要があります。データ・ソース名が一致することを確認する必要があります。

デフォルトのデータ・ソース名を使用した場合、データ・ソース名は一致します。デフォルトのデータ・ソース名を使用しなかった場合、モデルのデータ・ソース名を変更する必要があります。

以下のタスクを実行して、モデルのデータ・ソース名を変更します。

1. Cognos Connection で、作成したデータ・ソースの名前を判別します。
2. Framework Manager で、「プロジェクトを開く」オプションを選択します。
3. Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした <productName>Model サブディレクトリーを参照し、.cpf ファイルを選択します。例えば、CampaignModel.cpf を選択します。
4. 「データ・ソース」項目を展開し、データ・ソースの名前を調べます。それらが、Cognos Connection で付けた名前と一致することを確認します。
 - a. 一致する場合は、この手順は終了です。
 - b. 一致しない場合は、データ・ソース・インスタンスを選択し、「プロパティ」セクションで名前を編集します。変更を保存します。
5. パッケージを Cognos Content Store に公開します。

Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成

IBM EMM には、レポート作成を構成するためのプロパティのセットがいくつかあります。Marketing Platform のレポート・コンポーネントのパラメーター値を指定するプロパティや、IBM Cognos システム用の URL およびその他のパラメーターを指定するプロパティがあります。パラメーター値を指定するプロパティは、ビューまたはテーブルを作成するスクリプトが生成されるときに指定されます。IBM Cognos システム用の URL およびその他のパラメーターを指定するプロパティを指定する必要があります。

以下のタスクを実行して、IBM Cognos システム用の URL およびその他のパラメーターを指定するプロパティを構成してください。

1. platform_admin ユーザー、または ReportsSystem の役割を持つ別のユーザーとして IBM EMM にログインします。
2. 「設定」>「構成」>「レポート」>「統合」>「Cognos バージョン」を選択します。
3. 「有効化」プロパティの値を True に設定します。
4. 「ドメイン」プロパティの値を、IBM Cognos システムが稼働している会社のドメインの名前に設定します。例: xyzCompany.com

会社でサブドメインを使用している場合は、このフィールドの値に会社のドメインとサブドメインが含まれている必要があります。

5. 「ポータル URL」プロパティの値を、Cognos Connection ポータルの URL に設定します。（「ドメイン」プロパティで指定した）ドメインおよびサブドメインを含む完全修飾ホスト名を使用してください。例: `http://MyCognosServer.xyzCompany.com/cognos10/cgi-bin/cognos.cgi`

この URL は Cognos 構成ユーティリティの「ローカル構成」>「環境」の下に見つかります。

6. 「ディスパッチ URL」フィールドで、1 次 Cognos Content Manager ディスパッチャーの URL を指定します。（「ドメイン」プロパティで指定した）ドメインおよびサブドメインを含む完全修飾ホスト名を使用してください。例: `http://MyCognosServer.xyzCompany.com:9300/p2pd/servlet/dispatch`

この URL は Cognos 構成ユーティリティの「ローカル構成」>「環境」の下に見つかります。

7. 現時点では、「認証モード」の設定を **anonymous** のままにします。
8. 設定を保存します。

レポート・フォルダー権限の設定

ユーザーごとに認証モードを使用するようにレポート・システムを構成した場合、適切な IBM ユーザーが IBM EMM アプリケーションからレポートを実行できることを確認してください。これを実行する最も簡単な方法は、デフォルトの ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユーザーに割り当てる方法です。

レポート・フォルダー権限の構成

「分析」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファー) の「分析」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限を、それらのレポートが物理的に保管される IBM Cognos システム上のフォルダー構造に基づいて構成することができます。

「レポート・フォルダー権限の同期」を実行する前に、以下の条件が満たされていることを確認する必要があります。

- レポート作成が有効になっている。
- レポートを構成する Cognos サーバーが稼働している。

以下のステップを実行して、レポート・フォルダー権限を構成します。

1. **ReportSystem** 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
2. 「設定」>「レポート・フォルダー権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」と選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにあるフォルダーの名前を取得します。(これは、いずれかのパーティションのフォルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対して構成する必要があることを意味します。)

3. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「キャンペーン」と選択します。
4. 「キャンペーン」ノードの下で最初のパーティションを選択します。
5. 「役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)」を選択します。
6. 「保存と権限の編集 (Save and Edit Permissions)」を選択します。
7. 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。

「レポート」エントリーは、「レポート・フォルダー権限の同期」オプションの初回実行後に表示されます。

8. 「パフォーマンス・レポート」の権限に適切な役割を付与します。
9. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
10. パーティションごとに、ステップ 4 から 8 を繰り返します。

eMessage 用のストアード・プロシージャの実行およびスケジューリング

eMessage レポートでは、ストアード・プロシージャによって設定されるステージング表に含まれるデータを使用します。ストアード・プロシージャは、デルタ・リフレッシュ操作を実行します。ストアード・プロシージャは、1 日 1 回以上実行します。それ以上の頻度でプロシージャを実行する場合、デルタ・リフレッシュ方式では、複数同時に実行することはできません。

次の表には、ストアード・プロシージャと、それによって実行されるタスクに関する情報が示されます。

表 8. eMessage 用のストアード・プロシージャ

ストアード・プロシージャ	タスク
sp_runid	このストアード・プロシージャは、固有の実行 ID を作成します。実行 ID のリストは、UARE_Runid テーブルに保管されます。
sp_update_ucc_tables_stats	このストアード・プロシージャは、ucc_tables の統計を更新します。このスクリプトは、sp_populate_* スクリプトの前に実行できます。
sp_populate_mailing_contacts	このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信したメール配信のコンタクト・データを処理します。
sp_populate_mailing_responses	このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信したメール配信のレスポンス・データを処理します。
sp_populate_sms_contacts	SMS 機能が有効になっている場合、このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信した SMS コンタクト・データを処理します。
sp_populate_sms_responses	SMS 機能が有効になっている場合、このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信した SMS レスポンス・データを処理します。
sp_get_delta_mailing_contacts	このストアード・プロシージャは、sp_populate_mailing_contacts プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に送信されたメール配信のコンタクトの取得を担当します。
sp_generate_mailing_contacts	このストアード・プロシージャは、sp_populate_mailing_contacts プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に実行されたメール配信でコンタクトを受けた顧客のメール配信とリンク・レベルのカウントの取得を担当します。
sp_get_delta_mailing_responses	このストアード・プロシージャは、sp_populate_mailing_responses プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信されたレスポンスの取得を担当します。
sp_generate_mailing_responses	このストアード・プロシージャは、sp_populate_mailing_responses プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降のメール配信およびリンク・レベル・レスポンスの取得を担当します。

表 8. eMessage 用のストアード・プロシージャ (続き)

ストアード・プロシージャ	タスク
sp_get_delta_sms_contacts	このストアード・プロシージャは、 sp_populate_sms_contacts プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降の SMS の取得を担当します。
sp_generate_sms_contacts	このストアード・プロシージャは、 sp_populate_sms_contacts procedure プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降にコンタクトを受けた顧客のメール配信とリンク・レベルのカウントの取得を担当します。
sp_get_delta_sms_responses	このストアード・プロシージャは、 sp_populate_sms_responses プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降の SMS レスポンスの取得を担当します。
sp_generate_sms_responses	このストアード・プロシージャは、 sp_populate_sms_responses プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降のメール配信およびリンク・レベル SMS レスポンスの取得を担当します。
sp_populate_mobile_responses	このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信したモバイル・レスポンス・データを処理します。
sp_get_delta_mobile_responses	このストアード・プロシージャは、 sp_populate_mobile_responses プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信されたレスポンスの取得を担当します。
sp_generate_mobile_responses	このストアード・プロシージャは、 sp_populate_mobile_responses プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降のモバイル・レスポンスの取得を担当します。

eMessage 用のストアード・プロシージャの実行に関するガイドライン

ストアード・プロシージャを実行する際には、以下のガイドラインに従います。

- sp_runid をスケジュールした少なくとも 10 分後に実行されるように、
sp_populate_mailing_contacts および sp_populate_mailing_responses をスケジュールする必要があります。
- インストール済み環境のテーブルおよび索引のサイズを考慮します。テーブルが大きいほど、更新により多くの時間が必要です。コンタクト・データおよびレス

ポンス・データを処理するのに十分な時間を割り当ててください。初回の実行は、以降の実行に比べてより多くの時間を要する傾向があります。

- ストアード・プロシージャは長時間実行される場合があるので、システム・アクティビティーが減少する夜間などの時間帯にプロシージャを実行することを検討してください。
- 処理されるレポート・データの有効範囲を制限することにより、レポート・データのリフレッシュに必要な時間を削減することができます。
- インストール・ファイルと共に提供されるスクリプトを使用して、データベース用にストアード・プロシージャを作成する必要があります。

スクリプトが正常に実行されると、最終戻りコード 0 が表示されます。

Oracle のストアード・プロシージャの構成例

Oracle データベース用にストアード・プロシージャを構成する際には、以下のガイドラインを念頭に置いてください。

- IBM は、Oracle Automatic Memory Management (AMM) の使用を推奨します。詳しくは、http://docs.oracle.com/cd/B28359_01/server.111/b28310/memory003.htm を参照してください。
- SQL Plus などのデータベース・ユーティリティーを使用して、ストアード・プロシージャを作成します。
- 他のスクリプトの少なくとも 10 分前に実行されるように sp_runid プロシージャをスケジュールします。

次の例では、ジョブを作成し、実行 ID を生成する方法について説明します。この例ではまた、ジョブ完了時のジョブ ID についても説明します。

実行 ID の作成例

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

```
declare
jobno number;

BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_runid;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:00','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/
```

E メール・コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。このジョブは、毎日 21:10 に実行されます。

```
declare
jobno number;

BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_mailing_contacts;',
```

```

next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/

```

E メール・レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。このジョブは、毎日 21:10 に実行されます。

```

declare
jobno number;

BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_mailing_responses;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/

```

SMS コンタクト・データの処理例

重要: SMS 機能は、デフォルト・レポート・オファリングには含まれておらず、この機能のライセンスを別個に購入する必要があります。しかし、デルタ配置は、SMS 機能を購入しているかどうかにかかわらず発生します。

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

```

BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_SMS_contacts;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/

```

SMS レスポンス・データの処理例

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

```

BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_SMS_responses;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/

```

モバイル・レスポンス・データの処理例

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

```

BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_MOBILE_responses;',

```

```

next_date => to_date('29-Aug-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/

```

Microsoft SQL Server 用ストアード・プロシージャの構成例

Microsoft SQL Server データベース用にストアード・プロシージャを構成する際には、以下のガイドラインを念頭に置いてください。

- SQL Server Agent を使用して、ストアード・プロシージャごとに新規ジョブを作成します。
- 少なくとも毎日実行されるようにジョブをスケジュールします。他のスクリプトの少なくとも 10 分前に実行されるように sp_runid をスケジュールする必要があります。
- SQL Server Agent インターフェースで、ジョブごとに以下のステップを実行します。
 1. ステップ・タイプを Transact-SQL スクリプト (T-SQL) として指定します。
 2. Campaign データベースを選択します。

実行 ID の作成例

次のコマンドを定義します。

```

DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_RUNID]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO

```

E メール・コンタクト・データの処理例

次のコマンドを定義します。

```

DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_MAILING_CONTACTS]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO

```

実行 ID を生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジュールします。

E メール・レスポンス・データの処理例

次のコマンドを定義します。

```

DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_MAILING_RESPONSES]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO

```

実行 ID を生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジュールします。

SMS コンタクト・データの処理例

次のコマンドを定義します。

```

DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_SMS_CONTACTS]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO

```

SMS レスポンス・データの処理例

次のコマンドを定義します。

```

DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_SMS_RESPONSES]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO

```

モバイル・レスポンス・データの処理例

次のコマンドを定義します。

```

DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_MOBILE_RESPONSES]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO

```

IBM DB2 用ストアード・プロシーチャーの構成例

IBM DB2 データベース用にストアード・プロシーチャーを構成する際には、以下のガイドラインを念頭に置いてください。

- データベースは DB2 バージョン 9.7.8 以上でなければなりません。
- DB2 Administrative Task Scheduler (ATS) で新規ジョブを作成します。
- 少なくとも毎日実行されるようにジョブをスケジュールします。他のスクリプトの少なくとも 10 分前に実行されるように sp_runid をスケジュールする必要があります。

IBM DB2 用のストアード・プロシーチャーを構成する前に、以下のステップを実行します。

1. レジストリーを有効にします。

DB2_ATS_ENABLE レジストリー変数を YES、TRUE、1、または ON に設定します。変数の設定後に、DB2 データベースを再始動します。

2. SYSTOOLSPACE 表スペースを作成します。

このスペースは、SYSADM グループまたは SYSCTRL グループに属するユーザーが作成できます。次の照会を使用して、このスペースが存在することを検証します。

```
SELECT TBSPACE FROM SYSCAT.TABLESPACES WHERE TBSPACE = 'SYSTOOLSPACE'
```

3. 権限を付与します。次の例の値を、ご使用の環境に合わせて置き換えてください。

EMESSAGE: eMessage システム・テーブルを含んでいるデータベース。

USER1: EMESSAGE データベースの所有者

DB2ADMIN: DB2 管理ユーザー

Administrator: スーパーユーザー

4. 管理ユーザーとして DB2 に接続し、以下の GRANT コマンドを実行します。

- **db2 GRANT DBADM ON DATABASE TO USER DB2ADMIN**
 - **db2 GRANT DBADM ON DATABASE TO USER USER1**
 - **db2 grant all on table SYSTOOLS.ADMINTASKS to USER1**
 - **db2 grant all on table SYSTOOLS.ADMINTASKS to DB2ADMIN**
5. SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD テーブルが存在する場合は、以下の GRANT コマンドを実行します。
- **db2 grant execute on procedure SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD to USER1**
 - **db2 grant execute on procedure SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD to DB2ADMIN**

実行 ID の作成例

次の例では、毎日 20:50 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。

```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('RunID_Job',null,null,
null,'50 20 * * *','USER1','SP_RUNID',null,null,null)
```

メーリング・コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('Email_Contact_Job',null,null,null,'00 21 * * *',
'USER1','SP_POPULATE_MAILING_CONTACTS',null,null,null)
```

実行 ID を生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジュールします。

メーリング・レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('Email_Response_Job',null,null,
null,'00 21 * * *','USER1','SP_POPULATE_MAILING_RESPONSES',null,
null,null)
```

実行 ID を生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジュールします。

SMS コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('SMS_Contact_Job',null,null,null,'00 21 * * *',
'USER1','SP_POPULATE_SMS_CONTACTS',null,null,null)
```

実行 ID を生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジュールします。

SMS レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。


```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('SMS_Response_Job',null,null,
null,'00 21 * * *','USER1','SP_POPULATE_SMS_RESPONSES',null,
null,null)
```

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('SMS_Response_Job',null,null,null,'00 21 * * *',
'USER1','SP_POPULATE_MAILING_RESPONSES',null,null,null)
```

実行 ID を生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジュールします。

モバイル・レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

```
call SYSPROC.ADMIN_TASK_ADD('MOBILE_Response_Job',null,null,
null,'00 21 * * *','USER1','SP_POPULATE_MOBILE_RESPONSES',null,
null,null)
```

Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャ

Interact イベント・パターン・レポートは、ステー징・テーブルに格納されているデータを使用します。このデータは、ストアード・プロシージャによって設定されます。ストアード・プロシージャは、デルタ・リフレッシュ操作を実行します。

Interact イベント・パターン・レポートのデータは、2 つのステップで作成されます。最初に、Interact ETL プロセスによってオーディエンス blob データが変換され、ETL データベース表に読み込まれます。2 番目に、レポート統合機能により、事前に構成された並列実行でデータがパターン・タイプごとに増分的に集計されます。これは、Interact レポート・パックの機能です。

この両方のプロセスは、テーブル UACI_ETLPATTERNSTATERUN に対するデータベース・トリガーと統合されています。このトリガーは、ETL の実行が成功すると起動します。このトリガーにより、レポート・データを集計するデータベース・ジョブがサブミットされます。

次の表には、ストアード・プロシージャと、それによって実行されるタスクに関する情報が示されます。

表 9. Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャ

ストアード・プロシージャ	タスク
SP_GENERATE_PATTERN_MATCHALL	このストアード・プロシージャは、SP_POPULATE_PATTERN_MATCHALL プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に実行された「すべて一致」パターンのデータの取得を担当します。

表 9. *Interact* イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャ (続き)

ストアード・プロシージャ	タスク
SP_GENERATE_PATTERN_COUNTER	このストアード・プロシージャは、 SP_POPULATE_PATTERN_COUNTER プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に実行された「カウンター」パターンのデータの取得を担当します。
SP_GENERATE_PATTERN_WC	このストアード・プロシージャは、 SP_POPULATE_PATTERN_WC プロシージャによって内部的に呼び出され、ストアード・プロシージャの前の実行以降に実行された「重みづけカウンター」パターンのデータの取得を担当します。
SP_POPULATE_PATTERN_MATCHALL	このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信した「すべて一致パターン」タイプのデータを処理します。
SP_POPULATE_PATTERN_COUNTER	このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信した「カウンター・パターン」タイプのデータを処理します。
SP_POPULATE_PATTERN_WC	このストアード・プロシージャは、ストアード・プロシージャの前の実行以降に受信した「重みづけカウンター・パターン」タイプのデータを処理します。
SP_UPDATE_UACI_TABLES_STATS	SP_UPDATE_UACI_TABLES_STATS は、トリガーによって呼び出され、まずデータベース統計を更新し、次にレポート・データの集約のためのデータベース・ジョブをサブミットします。 このストアード・プロシージャでは、以下の ETL テーブルの統計を更新します。 • UACI_ETLPATTERNSTATE • UACI_ETLPATTERNSTATEITEM • UACI_ETLPATTERNEVENTINFO
SP_POPULATE_PATTERN_LOCK (p_parallel_degree)	このプロシージャは、構成された並列実行の度合いで UARI_PATTERN_LOCK テーブルを更新します。 p_parallel_degree は、並列に実行される集計処理の度合いです。
SP_AGGR_RUN_STATUS	このプロシージャは、集計処理が始まる前に <i>Interact</i> ETL プロセスによって呼び出され、実行中のストアード・プロシージャのロック状況を検査します。このプロシージャは UARI_PATTERN_LOCK テーブルに対して実行されます。

表 9. Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャ (続き)

ストアード・プロシージャ	タスク
SP_REFRESH_PATTERNINFO	Oracle および DB2 の場合のみ。 このストアード・プロシージャは、UARI_PATTERNSTATE_INFO テーブルをリフレッシュして、IC とカテゴリーの状態およびオーディエンス・レベル情報を取得します。 このプロシージャは、集計プロシージャが開始する前にトリガーによって呼び出されます。 Mviews は SQL Server ではサポートされないため、このプロシージャは SQL Server には適用されません。
SP_UARI_REBIND_PACKAGES	DB2 の場合のみ。 このストアード・プロシージャは、集計トリガーおよびプロシージャに関連付けられたパッケージを再バインドします。このプロシージャは、SP_UPDATE_UACI_TABLES_STATS プロシージャ呼び出しの後に、トリガーによって呼び出されます。

表 10. データベース・シーケンス

ストアード・プロシージャ	タスク
SQ_UARI_RUN	Oracle および DB2 の場合: このシーケンスは、固有の実行 ID を作成します。実行 ID のリストは、UARI_RUNS テーブルに保管されます。

SQL Server の場合: SQL Server では、RunID は RunID 列の IDENTITY プロパティを使用して生成され、実行のたびに新しい ID が生成されます。

表 11. データベース・トリガー

ストアード・プロシージャ	タスク
TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS	値 3 で UACI_ETLPATTERNSTATERUN テーブルが更新された後、データ集計のストアード・プロシージャを呼び出すジョブをサブミットすることにより、トリガーを起動します。

Interact イベント・パターン・レポートのストアド・プロシーチャーの有効化

Interact イベント・パターン・レポートでは、レポートのレンダリングを高速にするため、データの集計処理としてデルタ・リフレッシュ処理を使用します。

Interact イベント・パターン・レポートを使用可能にするには、レポートを使用可能にする手順とは別に、以下の手順を実行する必要があります。

1. `<Interact_ReportPack_Installer_Home>%Cognos10%interact-ddl%<DB Type>%` フォルダーを参照します。
2. DB2 の場合は、以下のパラメーターを設定します。

- `db2set DB2_COMPATIBILITY_VECTOR=ORA`
- `db2set DB2_ATS_ENABLE=YES`

データベースがアクティブの場合は、次のコマンドを使用して実行を検証できます: `db2 list active databases`。

DB2 を明示的にアクティブにするには、次の解決方法を使用できます。

- a. このインスタンスで実行されているアプリケーションを停止するために、次のコマンドを実行します: `db2 force application all`。
- b. 次のコマンドを実行して DB2 を停止します: `db2stop force`。
- c. 次のコマンドを実行してデータベースを始動します: `db2start`。
- d. 次のコマンドを発行してデータベースを明示的にアクティブ化します: `db2 activate db <dbname>`。

次のメッセージが表示されるはずです: `DB20000I ACTIVATE DATABASE コマンドが正常に完了しました`。

- e. データベースがアクティブになったことを検証するため、次のコマンドを発行します: `db2 list active databases`。

次の例のような出力が表示されるはずです。

```
Active Databases
Database name      = <dbname>
Applications connected currently = 0
Database path      = /data04/<DB instance owner>/NODE0000/SQL00001/
```

インスタンスを再始動した場合には、いつでも、この手順を実行する必要があります。

ATS は、履歴データおよび構成情報を格納するために表スペースを必要とします。データベースに表スペースが定義されているかどうかを確認する場合、または表スペースを作成する場合には、<http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/dm-0809see/> を参照してください。

スケジュールされたジョブをタスク・スケジューラーから実行するには、データベースがアクティブであることが必要です。 `developerWorks` の次の記事を参照してください: <http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/dm-0809see/>。

ADMIN_TASK_STATUS は、ADMIN_TASK_ADD プロシージャが初めて呼び出された時点で作成される管理ビューです。これらのビューがデータベースに存在する必要があります。ビューがない場合は、データベース管理者に相談してビューを作成してください。

ADMIN_TASK_STATUS 管理ビューに対するアクセス特権が必要です。

詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/api/content/SSEPGG_9.7.0/com.ibm.db2.luw.admin.gui.doc/doc/t0054396.html および <http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/dm-0809see/> を参照してください。

3. ETL データベース上で以下のスクリプトを順番に実行します。

- a. **acir_tables_<DB Type>.sql**
- b. **acir_scripts_<DB Type>.sql**

注: **acir_tables_<DB Type>.sql** スクリプトは、以前に実行したことがない場合に、必ず実行する必要があります。

SQL Server の場合は、**acir_jobs_sqlserver.sql** スクリプトを実行します。このスクリプトでは、度合い 2 のデータベース・ジョブが作成されます。度合いを変更するには、52 ページの『Interact イベント・パターン・レポートにおける並列実行の度合いの変更』を参照してください。

注: SQL Server エージェント・サービスが実行中であることを確認する必要があります。

4. ETL プロセスを開始する前に、ETL データベースで次のコマンドを実行し、UARI_PATTERN_LOCK 表に並列バッチ度合いレコードを作成します。

- Oracle の場合は、**execute SP_POPULATE_PATTERN_LOCK(2)** を実行します (度合い 2 の場合)。
- DB2 の場合は、**call SP_POPULATE_PATTERN_LOCK(2)** を実行します (度合い 2 の場合)。
- SQL Server の場合は、**EXEC [dbo].[SP_POPULATE_PATTERN_LOCK] @p_parallel_degree = 2** を実行します (度合い 2 の場合)。

スクリプトを実行した後、UARI_PATTERN_LOCK 表に、度合いの値を指定したストアード・プロシージャが格納されます。この度合いの値は構成可能です。Interact イベント・パターン・レポートの集計処理において並列実行の度合いを高めると、経過時間が減少します。この度合いを高い値に設定すると、ハードウェア・リソースの要件もそれに比例して高くなります。データ集計のために実行されるプロシージャ数は、度合いの値に応じて決まります。

最初の実行時に、ETL は UARI_DELTA_PATTERNS 表のそれぞれの PatternID に対して何も値を挿入しません。すべてのパターンが新規またはデルタであるためです。レポート集計処理では、ETL 表からすべての PatternID を収集し、それらを UARI_DELTA_PATTERNS 表に挿入します。

ETL プロセスは、SP_AGGR_RUN_STATUS プロシージャを呼び出します。SP_AGGR_RUN_STATUS プロシージャは UARI_PATTERN_LOCK 表を検査して実行中の JobID を調べます。JobID には、実行中または失敗のシナリオの

場合に、フラグ「Y」が設定されます。失敗したジョブがあると、プロシージャーはフラグを「N」に設定します。実行中のジョブの場合、値は「Y」のままです。ETL プロセスは常に、サブミットされたジョブの状況を検査することにより、レポート集計の状況を検査します。ETL は、レポート集計が実行中であることを検出すると、実行を開始しません。ETL は、その後、スケジュールどおりに再度開始します。

ETL プロセスは、UARI_PATTERN_LOCK 表を検査して、値「Y」の JobID の数を調べます。ETL プロセスが開始するのは、値「Y」の JobID の数が 0 の場合のみです。値「Y」の JobID の数が 1 以上の場合、ETL プロセスはスキップされ、スケジュールされた間隔で次回に実行されます。ETL プロセスに関する詳細は、「*IBM Interact 管理者ガイド*」を参照してください。

2 回目以降の実行の際、ETL プロセスは、更新された PatternID について UARI_DELTA_PATTERNS 表の更新フラグを更新します。データが更新された場合は、Pattern ID に「U」のマークが付きます。データが削除された場合は、PatternID に「D」のマークが付きます。新しく追加されたパターンについては、レポート集計コードによって識別された後、UARI_DELTA_PATTERNS にフラグ「P」が挿入されます。ETL は常に、既存の PatternID について UARI_DELTA_PATTERNS 表のフラグを更新し、新しく追加された PatternID はレポート集計プロセスによって処理されて UARI_DELTA_PATTERNS 表に挿入されます。

集計処理は、PatternID に「U」または「D」フラグが付いている場合にのみ実行されます。

ETL の実行が正常に完了すると、UACI_ETLPATTERNSTATERUN 表の状況が 3 に更新され、トリガー TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS が呼び出されます。そのトリガーにより、並列実行の度合いを設定するストアード・プロシージャーが呼び出されます。

注: 最初のレポート集計タスクは、2 回目以降の集計より時間がかかることがあります。初回は、システムがすべてのデータを集計しようとするためです。

注: ETL 機能が有効であるときに集計処理をオフにする必要がある場合には、任意の時点でこのトリガーを無効にして、レポート集計が呼び出されないように設定できます。

トリガーを無効にするそれぞれのデータベースで、次のコマンドを実行します。

DB2 の場合は、<http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/0211swart/0211swart.html> を参照してください。

Oracle の場合: `alter trigger TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS disable;`

SQL Server の場合: `Disable Trigger TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS on uaci_etlpatternstaterun`

レポート集計をオンにするには: `alter trigger TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS enable;`

SQL Server の場合: Enable Trigger TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS on uaci_etlpatternstaterun

Interact イベント・パターン・レポートにおける並列実行の度合いの変更

この度合いの値は構成可能です。Interact イベント・パターン・レポートの集計処理において並列実行の度合いを高めると、経過時間が減少します。この度合いを高い値に設定すると、ハードウェア・リソースの要件もそれに比例して高くなります。

Interact イベント・パターン・レポートのレンダリングが高速になるように、集計処理実行の度合いを構成します。

集計処理を並列実行できる度合いの値を変更するには、以下の手順を実行してください。

データベース・ジョブの度合いを 3 に構成するには、使用しているデータベースに応じて以下の手順を実行します。

表 12. 並列実行の度合いを変更するために実行するコマンド

データベース・タイプ	ETL データベースに対して実行するコマンド
Oracle	度合いの値を 3 に構成するには、 execute SP_POPULATE_PATTERN_LOCK(3) コマンドを Interact の ETL データベースに対して実行します。
IBM DB2	度合いの値を 3 に構成するには、 call SP_POPULATE_PATTERN_LOCK(3) コマンドを Interact の ETL データベースに対して実行します。

表 12. 並列実行の度合いを変更するために実行するコマンド (続き)

データベース・タイプ	ETL データベースに対して実行するコマンド
SQLServer	デフォルトの acir_jobs_sqlserver.sql スクリプトを実行すると、度合いの値が 1 および 2 のデータベース・ジョブが作成されます。度合いの値が 1 および 2 のパターンは、UARI_PROCESSED_PATTERNS 表に集約されます。 Match All Pattern (すべて一致パターン) を度合い 3 に変更するには、度合い 1 のサンプル・コードをコピーし、以下の手順を実行します。 1. @job_name を作成して JOB_MA_3 を設定します。 2. @p_parallel_degree を作成して値 3 を設定します。 Interact の ETL データベースに対して、次のコマンドを実行します。 度合い 3 の Match All Pattern のためのコマンド <pre> DECLARE @jobId BINARY(16), @status int, @schedule_name varchar(16), @dbname varchar(100) set @dbname= (SELECT DB_NAME()); EXEC msdb.dbo.sp_add_job @job_name=N'JOB_MA_3', @job_id = @jobId OUTPUT; EXEC msdb.dbo.sp_add_jobstep @job_id=@jobId, @step_name=N'first', @command=N'EXEC [dbo].[SP_POPULATE_PATTERN_MATCHALL] @p_parallel_degree = 3', @database_name=@dbname; EXEC msdb.dbo.sp_add_jobserver @job_id=@jobId, @server_name=N'(local)'; GO </pre> Counter Pattern (カウンター・パターン) および Weighted Counter Pattern (重みづけカウンター・パターン) の度合いを作成し、コマンドを ETL データベースに対して実行できます。 Counter Pattern を度合い 3 に変更するには、度合い 1 のサンプル・コードをコピーして、次の手順を実行します。 1. @job_name を作成し、名前を JOB_C_3 に設定します。 2. @p_parallel_degree を作成して値 3 を設定します。 Weighted Counter Pattern を度合い 3 に変更するには、度合い 1 のサンプル・コードをコピーして、次の手順を実行します。 1. @job_name を作成し、名前を JOB_WC_3 に設定します。 2. @p_parallel_degree を作成して値 3 を設定します。

Interact イベント・パターン・レポートの UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブルの読み方

UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブルには、すべてのプロシーチャーのロギング情報が含まれています。

度合いの値 2 で集計を実行すると、このテーブルに以下のログ・メッセージが表示されます。

集計処理の状況を確認する方法

MESSAGE_LINE:

```
<pattern type> patterns delta refresh completed for parallel degree <degree value>
Aggregation of the patterns with degree value is started.
```

MESSAGE_LINE:

```
<pattern type> patterns delta refresh completed for parallel degree <degree value>
Aggregation of the patterns with degree value is completed.
```

ここで、pattern type はパターンのタイプで、Match All、Counter、または Weighted Counter です。degree 値は、パターンを処理する際の並列度の値です。

以下に例を示します。

```
MatchAll patterns delta refresh started for parallel degree 1
MatchAll patterns delta refresh completed for parallel degree 1
MatchAll patterns delta refresh started for parallel degree 2
MatchAll patterns delta refresh completed for parallel degree 2
```

UARI_PATTERNSTATE_INFO テーブルが最新表示されたかどうかを確認する方法

MESSAGE_LINE:

```
Pattern State information refresh procedure started
--The procedure to refresh the data in UARI_PATTERNSTATE_INFO is running.
```

MESSAGE_LINE:

```
Pattern State information refresh procedure completed
--The procedure to refresh the data in UARI_PATTERNSTATE_INFO is completed.
```

ロック・フラグがプロシージャ SP_AGGR_RUN_STATUS によってリセットされたかどうかを確認する方法

MESSAGE_LINE:

```
patterns lock has been reset for parallel degree <degree value>
```

UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブルの OBJECT 列には、ロックがリセットされたプロシージャの名前が含まれます。

ここで、degree 値は、パターンを処理する際の並列度の値です。

以下に例を示します。

```
patterns lock has been reset for parallel degree 1
```

完了したパッケージの再バインドを確認する方法 (DB2 の場合のみ)

MESSAGE_LINE:

```
Rebind of packages started
--Rebinding of the packages started
```

MESSAGE_LINE:

Rebinding of packages completed successfully on <datetime>
--Rebinding of the packages completed successfully on the given date.

ETL 表で統計が更新されたかどうかを確認する方法

MESSAGE_LINE:

Table statistics update started

--Update statistics on the ETL tables is in process

MESSAGE_LINE:

Statistics on Tables UACI_ETLPATTERNSTATE UACI_ETLPATTERNSTATEITEM
UACI_ETLPATTERNEVENTINFO and indexes have been updated successfully
on <Datetime>

--Statistics are updated on the mentioned ETL tables on the given date.

並列実行の度合いを確認する方法

MESSAGE_LINE:

Pattern aggregation processing Parallel degree is set to <degree value>

--Parallel degree with which report aggregation will run is set to 2.

以下に例を示します。

Pattern aggregation processing Parallel degree is set to 2.

認証を有効にする前の構成のテスト

レポートをインストールして構成した後で、認証を有効にする前に構成をテストする必要があります。いくつかのレポートを実行することで、構成をテストできます。

以下のタスクを実行して、認証を有効にする前に構成をテストします。

1. IBM EMM が実行されていること、および IBM Cognos BI サービスが実行されていることを確認します。
2. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM EMM にログインし、いくつかのデータを作成します。(そうしないと、レポートに表示されるものはありません)。
3. Cognos Connection を開きます。
4. インポートしたレポート・フォルダーを参照し、基本レポートへのリンクをクリックします。例えば、Campaign の場合、「共有フォルダー」>「キャンペーン」>「キャンペーン」>「キャンペーン・サマリー」を選択します。

レポートが失敗する場合、IBM EMM アプリケーション・データベース用の Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 21 ページの『IBM EMM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。

5. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 35 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照してください。

6. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM EMM アプリケーションにログインし、「分析」ページを参照します。

IBM EMM アプリケーションの URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。以下に例を示します。

`http://serverX.ABCompany.com:7001/unica`

7. Cognos でテストしたものと同一レポートへのリンクをクリックします。

レポートを表示できない場合には、おそらく IBM Cognos ファイアウォールが正しく構成されていません。 23 ページの『IBM Cognos Application Firewall for IBM EMM の構成』を参照してください。

eMessage レポートを表示できない場合、最近 eMessage ストアード・プロセスジャーが実行されたかどうかを確認してください。

8. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 35 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照してください。

9. 個々の項目を開き、「分析」タブをクリックして、レポートが正しいことを確認します。

IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する

IBM EMM Authentication Provider は、Cognos アプリケーションがスイート内の別の IBM EMM アプリケーションであるかのように IBM EMM 認証を使用して IBM EMM システムと通信できるようにします。

IBM Cognos で IBM EMM 認証を使用するように構成する前に、「認証」と「ユーザーごとに認証」のどちらの認証モードを構成する予定かを把握しておいてください。

レポート・システム・ユーザーの作成

認証用に認証モードを使用している場合は、レポート・システム・ユーザーを作成する必要があります。レポート・システム・ユーザーを作成するには、ユーザーを作成してから、そのユーザーに対してデータ・ソース資格情報を作成して、IBM Cognos BI ログイン情報を保持できるようにします。認証用にユーザーごとに認証モードを使用している場合、レポート・システム・ユーザーを作成する必要はありません。

レポート・システム・ユーザーを作成するには、同じユーザーに対して以下のログイン資格情報を構成することができます。

- IBM システム用のログイン資格情報 1 セット: ユーザー名とパスワードは、レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) に対して指定されます。

- IBM Cognos BI 用のログイン資格情報 1 セット: ユーザー名とパスワードは、レポート・システム・ユーザーのデータ・ソース資格情報として指定されます。

以下のタスクを実行して、レポート・システム・ユーザーを作成します。

1. IBM EMM に platform_admin ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」>「ユーザー」を選択します。
3. 以下の属性を持つ IBM ユーザーを作成します。
 - a. ユーザー名: cognos_admin
 - b. パスワード: admin
4. このユーザー用に、以下の属性を持つデータ・ソースを作成します。
 - a. データ・ソース: Cognos
 - b. データ・ソース・ログオン (Data Source Logon): cognos_admin

データ・ソースのユーザー名は、ステップ 3 で作成した IBM ユーザーのユーザー名と正確に一致するようにしてください。
 - c. データ・ソース・パスワード: admin
5. レポート・システム役割をユーザーに追加します。
6. IBM EMM でユーザー・パスワードの有効期限切れが構成されている場合、ログアウトし、レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) として再びログインします。このステップを実行すると、後のタスクでこのユーザーとして IBM Cognos にログインする前に、必ず IBM セキュリティーによる「パスワードの変更」チャレンジと対話して、パスワードを再設定することになります。

IBM EMM での Cognos 認証プロパティの構成

IBM EMM アプリケーションと Cognos アプリケーションが異なるネットワーク・ドメインにインストールされている場合に、IBM EMM で Cognos 認証プロパティを構成して、IBM EMM アプリケーションが Cognos アプリケーションと通信できるようにする必要があります。

以下のタスクを実行して、IBM EMM で Cognos 認証プロパティを構成します。

1. IBM EMM に platform_admin ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」>「構成」を選択します。
3. 「レポート」>「統合」>「Cognos バージョン」を展開します。
4. **authenticated** または **authenticatedPerUser** のうち、ご使用のシステムに適する方法を選択することによって、「認証モード」プロパティの値を設定します。
5. 「authenticated」の場合のみ。「認証ユーザー名」および「認証データ・ソース名」フィールドの値が、前のタスク（56 ページの『レポート・システム・ユーザーの作成』）で作成したユーザーおよびデータ・ソースに一致することを確認します。
6. 「フォーム認証を有効にする」プロパティの値を設定します。

この設定値は、Cookie の代わりにフォームに基づく認証を IBM EMM セキュリティーで使用することを示します。以下のいずれかが該当する場合に、このプロパティを True に設定します。

- IBM EMM が Cognos アプリケーションと同じネットワーク・ドメインにインストールされていない場合。
- IBM EMM アプリケーションと Cognos インストール済み環境の両方が同じコンピューター上にあっても、Cognos が、完全修飾ホスト名 (IBM EMM アプリケーションへのアクセスに使用される) の代わりに IP アドレス (同じネットワーク・ドメイン内) を使用してアクセスされる場合。

ただし、値が True の場合、Cognos Connection へのログイン・プロセスは、ログイン名とパスワードを平文で渡すため、Cognos と IBM EMM が SSL 通信を使用するように構成されていない場合、安全ではありません。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、Cognos と IBM EMM は、同じネットワーク・ドメインにインストールする必要があります。

注: 「フォーム認証を有効にする」プロパティを True に設定した場合は、自動的に、「認証モード」プロパティが「**authenticated**」に設定されている場合のように動作します。それで、56 ページの『レポート・システム・ユーザーの作成』に説明されている、このモードに必要なステップを完了する必要があります。

7. 新しい設定を保存します。
8. 「**authenticatedPeruser**」の場合のみ。デフォルトの asm_admin ユーザーに ReportUser 役割を割り当てます。レポートのテストを可能にするために、このステップを完了します (IBM EMM アプリケーションとレポート・データの両方にアクセスできるユーザーが必要です)。platform_admin ユーザーは IBM EMM アプリケーション機能へのアクセス権限を持っていません。

IBM EMM Authentication Provider を使用するための IBM Cognos の構成

Cognos Configuration アプリケーションおよび Cognos Connection アプリケーションを使用して、IBM Cognos BI アプリケーションが IBM EMM Authentication Provider を使用するように構成する必要があります。

以下のタスクを実行して、IBM Cognos が IBM EMM Authentication Provider を使用するように構成します。

1. Cognos Content Manager を実行しているコンピューターで、Cognos Configuration を開きます。
2. 「ローカル構成」>「セキュリティ」>「認証」を選択します。
3. 「認証」を右クリックし、「リソースの新規作成」>「ネームスペース」を選択します。
4. フィールドに以下のように入力して、「OK」をクリックします。
 - a. 名前: Unica
 - b. タイプ: カスタム Java プロバイダー
5. 「リソース・プロパティ」ページで、以下のようにフィールドに入力し、変更内容を保存します。

- a. **ネームスペース ID:** Unica
 - b. **Java クラス名:** com.unica.report.adapter.UnicaAuthenticationProvider
6. IBM Cognos BI サービスを停止し、再始動します。

Windows システムでは、Cognos インターフェースにおいて、サービスが停止していないのに停止していると示される場合があります。サービスを確実に停止させるには、Windows 管理ツールを使用してサービスを停止します。

7. 「ローカル構成」>「セキュリティ」>「認証」の下で、「Unica」を右クリックして「テスト」を選択します。

Cognos Connection でエラーが表示される場合、Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにある cogserver.log ファイルを調べて、問題を判別してください。

8. IBM EMM Authentication Provider が正しく構成されていることを検査するために、以下のように Cognos Connection にログインします。
- IBM EMM 構成プロパティーで Cognos 認証モードを「**authenticated**」に設定した場合、cognos_admin (レポート・システム) ユーザーとしてログインします。
 - IBM EMM 構成プロパティーで認証モードを「**authenticatedPerUser**」に設定した場合、asm_admin ユーザーとしてログインします。

IBM Cognos が「サード・パーティー・プロバイダーにより回復不能な例外が返されました」というエラーが表示する場合、そのエラー・メッセージを展開してください。「資格情報が無効です」と示されている場合、ユーザー資格情報の入力間違っていたことを示します。再試行してください。しかし、「パスワードが期限切れ」という内容のメッセージが表示された場合は、IBM EMM のパスワードの有効期限が切れています。レポート作成システム・ユーザーとして IBM EMM アプリケーションにログインし、パスワードを再設定してください。その後、再度 Cognos Connection へのログインを試みてください。

それでも Cognos Connection にログインできない場合、Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにある cogserver.log ファイルを調べて、問題を判別してください。

9. Cognos Connection に正常にログインすることができたら、再度 Cognos Configuration を開きます。
10. 「ローカル設定」>「セキュリティ」>「認証」>「Cognos」を選択します。
11. 「匿名アクセスを許可」を false に設定することにより、IBM Cognos BI への匿名アクセスを無効にします。
12. 変更を保存します。
13. IBM Cognos サービスを停止し、再始動します。

IBM Cognos サービスは、認証プロバイダーと正常に通信できない場合、開始できません。IBM Cognos サービスを開始できない場合は、この手順のステップを注意して見直して、構成を確認してください。

14. **分散システムの場合のみ。** フェイルオーバー・サポートのためにバックアップ Content Manager が IBM Cognos で構成されている場合、Content Manager がインストールされているすべてのサーバーでこの手順を繰り返してください。

この時点で、Cognos システム上のアプリケーションにログインしているどのユーザーも、IBM EMM によって認証されているはずですが、加えて、ログオンおよびセキュリティ管理タスク用の認証ネームスペース「Unica」が IBM Cognos ユーザー・インターフェースに表示されるようになりました。

Marketing Platform の追加設定の構成

IBM Marketing Platform を LDAP サーバー、Windows Active Directory (Windows 統合ログイン)、または Web アクセス制御システム (Tivoli® や SiteMinder など) と統合するには、追加の構成が必要です。

以下のタスクを実行して、Marketing Platform の追加設定を構成します。

1. Cognos Configuration で、Unica® 認証ネームスペースについて、フラグ「**認証で選択可能**」を「**false**」に設定します。

このフラグを「**false**」に設定すると、Cognos Connection と Cognos Administration は、認証用に Unica ネームスペースにアクセスすることができなくなります。しかし、IBM EMM アプリケーションは、引き続き Cognos SDK API を介して Unica ネームスペースにアクセスできます (ユーザーが IBM EMM アプリケーション内から Cognos レポートを表示する場合など)。

2. Cognos URL への認証アクセスが必要な場合は、以下のタスクを実行します。
 - a. Cognos Configuration で、バンドルされた適切な認証プロバイダーを使用して、ネームスペースを構成します。
 - b. 「**認証で選択可能**」を「**true**」に設定します。
 - c. この新規ネームスペースを Cognos URL 用に使用します。

認証が構成された状態での構成のテスト

IBM 認証を構成した後で、IBM Cognos BI の構成をテストする必要があります。

以下のタスクを実行して、IBM Cognos BI の構成をテストします。

1. IBM EMM が実行されていること、および IBM Cognos サービスが実行されていることを確認します。
2. Cognos Connection を開きます。
3. インポートしたレポート・フォルダーを参照し、基本レポートへのリンクをクリックします。例えば、Campaign の場合、「共有フォルダー」>「キャンペーン」>「キャンペーン」>「キャンペーン・サマリー」を選択します。

レポートが失敗する場合、IBM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 21 ページの『IBM EMM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。

4. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 35 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照してください。

5. IBM EMM にログインし、「分析」ページを参照します。

IBM アプリケーションの URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。 例:

<http://serverX.ABCompany.com:7001/unica>

6. IBM Cognos でテストしたものと同一レポートへのリンクをクリックします。

セキュリティに関するエラー・メッセージが表示される場合、おそらく IBM Authentication Provider が正しく構成されていません。 56 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』を参照してください。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、おそらく URL のいずれかでドメイン・ネームが欠落しています。管理権限を持つユーザーとして IBM EMM にログインしてください。次に、「設定」>「構成」を選択し、以下のプロパティ内の URL に、ドメイン・ネームと、適切なサブドメイン・ネームが含まれていることを確認してください。

- 「レポート」>「統合」>「Cognos」>「ポータル URL」および「ディスパッチ URL」
- IBM アプリケーションの URL プロパティ (例えば 「キャンペーン」>「ナビゲーション」>「サーバー URL」)

7. レポート内のリンクをクリックします。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、おそらく URL のいずれかでドメイン・ネームが欠落しています。

8. 個々の項目を開き、「分析」タブをクリックして、レポートが正しいことを確認します。

セキュリティに関するエラー・メッセージが表示される場合、おそらく IBM Application Provider が正しく構成されていません。

これで、レポートが正常に機能するようになり、サンプル・レポートはデフォルトの状態になります。 IBM EMM アプリケーションの実際のデータ設計 (キャンペーン・コード、カスタム・キャンペーン属性、レスポンス・メトリックなど) の構成が終了したら、レポートまたはレポート・スキーマのカスタマイズが必要になる可能性があるので、レポートに戻る必要があります。

Campaign または Interact を使用している場合、『レポート作成の構成』の章を参照してください。

Marketing Operations を使用している場合、「IBM Marketing Operations 管理者ガイド」にある『レポートの使用』を参照してください。

eMessage のレポートを設定している場合、レポートの構成は完了です。

第 6 章 レポート作成の構成

レポート・パッケージをインストールまたはアップグレードした後で、レポートのインストール済み環境を構成する必要があります。

レポート作成機能のために、IBM EMM はサード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos と統合します。レポート作成は、以下のコンポーネントに依存します。

- IBM Cognos のインストール済み環境
- IBM Enterprise アプリケーションと IBM Cognos インストール済み環境を統合する IBM EMM コンポーネントのセット
- いくつかの IBM EMM アプリケーションでは、アプリケーションの IBM システム・テーブルでレポート・ビューやテーブルを作成できるようにするレポート・スキーマ
- IBM Cognos Report Authoring を使用して作成された、IBM EMM アプリケーションのレポートの例

IBM EMM アプリケーションをインストールする場合、各アプリケーションは自己を Marketing Platform に登録します。登録処理時に、各アプリケーションは自己のエントリーを「分析」メニュー項目に追加します。

アプリケーションのレポート・パッケージを構成した後は、次のようにします。

- アプリケーションの「分析」メニュー項目で、クロスオブジェクト・レポートへのアクセスが提供されます。
- 次に、該当するオブジェクトの「分析」タブに単一オブジェクト・レポートが表示されます。
- アプリケーションのダッシュボード・レポートを有効にしてダッシュボードで 사용할ことができます。

通常、IBM EMM アプリケーションのインストール時に、IBM EMM 製品のレポート・パッケージがインストールされます。レポート・スキーマは、すべてのレポート・パッケージに含まれているわけではありませんが、以下の IBM Cognos BI コンポーネントはすべてに含まれています。

- IBM EMM アプリケーション・レポート用のカスタマイズ可能な IBM Cognos レポート・メタデータ・モデル
- IBM Cognos BI Report Authoring で作成された、カスタマイズ可能な IBM EMM アプリケーション・レポート
- レポート・データ・モデルおよびレポートについて説明した参考資料

IBM Cognos モデルは、IBM EMM アプリケーション・データベース内のレポート・ビュー（またはテーブル）を参照し、また IBM EMM レポート・パッケージでも配信される IBM Cognos レポートで、そのデータを利用できるようにします。

インストール直後は、レポートはデフォルトの状態にあり、サンプルのレポートと見なされます。理由は次のとおりです。多くの IBM EMM アプリケーションには、

追加やカスタマイズが可能なオブジェクト、属性、またはメトリックのセットがあります。例えば、Campaign では、レスポンス・タイプ、カスタム・キャンペーン属性、追加オーディエンス・レベルを追加することができます。ご使用のシステムのデータ設計を実装した後、レポートを再表示して、レポート例をカスタマイズしたり、新しいレポートを作成したりできます。

実装のデータ設計フェーズの後でレポートを構成する方法は、IBM EMM システムに組み込まれている IBM EMM アプリケーションによって異なります。

- Campaign および Interact の場合、レポート・スキーマをカスタマイズしてから、インストール時に作成されたビューまたはレポート・テーブルを更新します。その時に、Cognos データ・モデルと新しく更新されたレポート・ビューを同期化し、Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みのモデルを公開します。これで、新規カスタム属性が、Report Authoring で使用可能になり、それらの属性をレポート例に追加したり、属性を表示する新規レポートを作成したりすることができます。
- レポート・スキーマを提供しない IBM EMM アプリケーションおよび eMessage (カスタマイズ可能なスキーマを提供) については、Cognos IBM レポートのみを構成します。

このセクションでは、セキュリティー・モデル、スキーマ、データ・モデル、およびレポートについて説明します。

レポートおよびセキュリティー

セキュリティーのため、レポート機能は特定のアクセス制御機構によって制御されます。

以下のようなアクセス制御機構があります。

- アプリケーション・アクセス制御設定。ユーザーが IBM EMM インターフェースからレポートを実行可能かどうかは、IBM EMM アプリケーション・アクセス設定によって付与されている権限に応じて決まります。さらに、Campaign、eMessage、および Interact の場合、IBM Cognos システム上でのフォルダー構造に基づいて、レポートのグループへのアクセス権限を付与または否認することができます。
- Marketing Platform アクセス制御設定。管理者がスキーマのカスタマイズやレポート SQL ジェネレーターの実行を行えるかどうかは、Marketing Platform に構成されている権限によって決まります。
- IBM EMM 認証。IBM Cognos BI システムで IBM EMM 認証を使用するように構成することによって、IBM Cognos システムから IBM アプリケーション・データへのアクセスを制御することもできます。

レポート・フォルダー権限

IBM Cognos システムにインストールした IBM Cognos レポート・パッケージには、フォルダーに編成された IBM アプリケーション用のレポート仕様が含まれています。例えば、「Interact Reports」フォルダーは Interact 用のフォルダーであり、レポート仕様は IBM Cognos システムの「Interact Reports」フォルダーにあります。

Campaign、eMessage、および Interact の場合、レポートのグループに対する権限を、それらが IBM Cognos システム内で物理的に格納されているフォルダー構造に基づいて構成することができます。

IBM Cognos ファイル・ディレクトリーとの同期

レポートがインストールされた後、IBM Cognos システム上のレポート・フォルダーを IBM システムに認識させるには、IBM インターフェースの「設定」メニューにある「レポート・フォルダー権限の同期」オプションを実行します。このオプションは、IBM Cognos システムに接続して、どのフォルダーが存在するのかを判別します。その後、Campaign パーティションのユーザー権限リストにエントリーを作成します。「レポート」という名前のエントリーが、「ログ」エントリーと「システム・テーブル」エントリーの間の権限リストに表示されます。これで、「レポート」エントリーを展開すると、レポート・フォルダー名がリストされ、権限が表示されています。

新規権限のデフォルト設定は「不認可」です。したがって、「レポート・フォルダーの権限の同期」オプションを実行した後で、レポート・フォルダーの権限を構成する必要があります。そうしないと、誰も IBM Cognos レポートにアクセスできなくなります。

パーティションとフォルダー・パーティション

フォルダー同期プロセスでは、すべてのパーティションについて、Cognos システムにある全フォルダーの名前を取得します。いずれかのパーティションのレポート・フォルダー権限を構成することにした場合、すべてのパーティションについて権限を構成する必要があります。

IBM EMM Authentication Provider を使用した IBM Cognos BI システムの保護

デフォルトでは、IBM Cognos アプリケーションにアクセスしたすべてのユーザーが IBM EMM アプリケーション・データベースのデータにアクセスできるので、Cognos システムは無保護です。IBM EMM Authentication Provider を使用すると、Cognos システムを保護できます。

IBM EMM システムが IBM Cognos BI システムと統合されると、IBM Cognos システムは IBM EMM アプリケーション・データに次の方法でアクセスできるようにします。

- IBM EMM アプリケーションから: 誰かが IBM EMM インターフェースからレポートを要求した場合、IBM EMM システムは IBM Cognos システムに接続し、レポート・ビューまたはテーブルに対して照会を実行してから、IBM EMM インターフェースに戻ってレポートを送信します。
- IBM Cognos アプリケーションから: Framework Manager で IBM EMM アプリケーション・データ・モデルに関する作業をする場合や、Report Authoring でレポートに関する作業をする場合は、IBM EMM アプリケーションのデータベースに接続します。

IBM Cognos が IBM EMM 認証を使用するように構成されると、IBM Cognos BI システムにインストールされた IBM EMM Authentication Provider が、Marketing

Platform のセキュリティ層と通信してユーザーを認証します。アクセス権限については、ユーザーは有効な IBM EMM ユーザーでなければならず、また次の権限のいずれかを付与する役割を持っている必要があります。

- **report_system**、これは IBM EMM インターフェースのレポート構成オプションへのアクセス権限も付与します。「**ReportsSystem**」役割は、この権限を付与します。
- **report_user**、これは IBM EMM インターフェースのレポート構成オプションではなく、レポートへのアクセス権限を付与します。「**ReportsUser**」役割は、この権限を付与します。

以下のような認証オプションがあります。

- 認証
- ユーザーごとに認証

認証モード

認証モードが認証に設定されている場合、IBM EMM システムと IBM Cognos システムとの間の通信は、マシン・レベルで保護されています。ユーザーの認証モードを使用するには、レポート・システム・ユーザーを構成し、そのユーザーをレポート構成設定で識別する必要があります。

以下のタスクを実行して、レポート・システム・ユーザーを構成します。

1. ユーザーを作成し、そのユーザーに、**ReportsSystem** の役割を割り当てます。
ReportsSystem は、すべてのレポート機能へのアクセス権限をユーザーに付与します。
2. ユーザーのデータ・ソースに、IBM Cognos システムのログイン資格情報を格納します。
3. 規則に従って名前を付けます (必須ではありません)。**cognos_admin** と名前を付ける。

IBM EMM Authentication Provider は、以下の方法を使用してレポート・システム・ユーザーを認証します。

- IBM EMM ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、Marketing Platform は、Cognos システムとの通信で、レポート・システム・ユーザーのレコードに格納された資格情報を使用します。認証プロバイダーは、ユーザーの資格情報を検証します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、レポート・システム・ユーザー (**cognos_admin**) としてログインし、認証プロバイダーがユーザー資格情報を検証します。

ユーザーごとに認証モード

認証モードが「ユーザーごとに認証」に設定されている場合、レポート・システムはレポート・システム・ユーザーを使用せず、各個人ユーザーの資格情報を評価します。IBM EMM Authentication Provider は、ユーザーごとに認証モードで以下の方法を使用します。

- IBM EMM ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、Marketing Platform は、そのユーザー資格情報を Cognos システムとの通信に組み込みます。認証プロバイダーは、ユーザーの資格情報を検証します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、自分自身の資格でログインし、認証プロバイダーが資格情報を検証します。

ユーザーごとに認証モードでは、レポートを参照するために、すべてのユーザーが ReportsUser または ReportsSystem のいずれかの役割を持っている必要があります。通常は、1 人または 2 人の管理者に ReportsSystem の役割を割り当て、IBM EMM インターフェースでレポートを参照する必要がある IBM EMM ユーザーのユーザー・グループに ReportsUser の役割を割り当てます。

認証プロバイダーでは、レポート権限を確認する以外に、権限を検査しません。Cognos アプリケーションにログインするレポート作成者は、レポート・フォルダー権限が IBM EMM システム上でどのように設定されていても、Cognos システム上のすべてのレポートにアクセスすることができます。

レポート権限のリファレンス

レポート構成機能およびレポートに対するアクセス権限を付与するには、「構成」ページの設定を構成します。

レポート構成機能にアクセスし、次の設定によってレポート自体を制御します。

ユーザー・インターフェース項目	アクセス制御
「設定」メニューの「構成」オプション（「構成」ページでレポート・スキーマを構成します）	「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「プラットフォーム」の下にあるプラットフォーム権限「構成へのアクセス権限 (Access to Configuration)」
「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレーター」および「レポート・フォルダーの権限の同期」オプション	「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「プラットフォーム」の下にあるレポート権限「report_system」 標準の ReportsSystem 役割には、この権限があります。
分析機能のメニュー	製品ごとに異なるアプリケーションのアクセス設定は、次のとおりです。 • Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」のキャンペーン・パーティション・レベルにある「管理」>「アクセス分析セクション (Access Analysis Section)」の権限です。 • Marketing Operations および Distributed Marketing については、セキュリティ・ポリシーの「分析」権限です。
「分析」タブ	個々のオブジェクトに関するセキュリティ・ポリシーの分析（または解析）権限です。

ユーザー・インターフェース項目	アクセス制御
レポートで表示されるデータ	Cognos システムの認証モードが「ユーザーごとの認証」である場合、ユーザーがレポート内のデータを参照するには、ReportsSystem または ReportsUser のどちらかの役割を持っている必要があります。

レポート・スキーマ

Campaign、Interact、および eMessage にレポートを実装するには、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成する必要があります。レポートは、レポート・ビューまたはレポート・テーブルでレポート可能データを抽出できます。

Campaign、Interact、および eMessage のレポート・パッケージには、レポート・ビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成するためにレポート SQL ジェネレーターで使用されるレポート・スキーマが含まれています。

Campaign および Interact の場合は、レポートに含めるデータが表示されるようにスキーマ・テンプレートをカスタマイズする必要があります。スキーマ・テンプレートをカスタマイズした後で、レポート SQL ジェネレーターを実行できます。SQL ジェネレーターが生成した SQL スクリプトを実行し、そのスクリプトをアプリケーション・データベースで実行することができます。

eMessage レポート・スキーマはカスタマイズできません。しかし、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成し、そのスクリプトを eMessage データベースで実行する必要があります。

レポート・スキーマを使用すると、サード・パーティーのレポート・ツールを使用して、より簡単に IBM アプリケーション・データを検査できるようになります。ただし、IBM EMM のユーザー・インターフェースでレポートを表示する場合は、ご使用のシステムを IBM Cognos BI と統合する必要があります。

レポート SQL ジェネレーター

レポート SQL ジェネレーターは、レポート・スキーマを使用して、IBM EMM アプリケーションのデータベースからデータを抽出するために必要な分析ロジックを判別します。次に、レポート SQL ジェネレーターは SQL スクリプトを生成します。このスクリプトは、分析ロジックを実装し、レポート可能データを抽出するビジネス・インテリジェンス・ツールを有効にするビューまたはレポート・テーブルを作成します。

インストールおよび構成時に、システム実装者が IBM EMM のアプリケーション・データベースを識別するデータ・ソース・プロパティを構成済みです。レポート SQL ジェネレーターは、以下のタスクを実行するためにアプリケーション・データベースに接続します。

- ビューまたは具体化されたビューを作成するスクリプトの検証
- レポート・テーブルを作成するスクリプトで使用するための正しいデータ型の判別

JNDI データ・ソース名が正しくないか欠落している場合、レポート SQL ジェネレーターは、レポート・テーブルを作成するスクリプトを検証できません。

レポート配置オプション

レポート SQL ジェネレーター・ツールの実行時に、配置オプションを選択できます。

レポート SQL ジェネレーター・ツールを実行する場合は、スクリプトでビュー、実体化ビュー、またはテーブルを作成するかどうかを指定します。使用する配置オプションは、システムに含まれるデータの量によって異なります。

- 小規模な実装環境の場合は、必要に応じて、実稼働データを直接照会するレポート・ビューを効率的に実行することができます。効率がよくない場合は、具体化されたビューを試してみてください。
- 中規模の実装環境の場合は、実稼働システム・データベースで具体化されたビューを使用するか、またはレポート・テーブルを別のデータベースにセットアップします。
- 大規模の実装環境の場合は、別個のレポートデータベースを構成します。

すべての実装環境で、Cognos Connection Administration を使用して、大量のデータを取得するレポートを業務外の時間帯に実行するようにスケジュールすることができます。

具体化されたビューおよび Microsoft SQL Server

レポート機能は、Microsoft SQL Server の具体化されたビューをサポートしていません。

SQL Server では、具体化されたビューは「インデックス・ビュー」と呼ばれています。しかし、SQL Server 上のビューにインデックスを作成する定義では、特定の集計、関数、およびレポート・ビューが含まれているオプションを使用することができません。したがって、SQL サーバー・データベースを使用している場合は、ビューまたはレポート・テーブルを使用してください。

注: eMessage の場合、ビューを使用する必要があります。

eMessage および Oracle

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが Oracle である場合は、具体化されたビューまたはレポート・テーブルを使用する必要があります。

eMessage および IBM DB2

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが IBM DB2 である場合は、具体化されたビューまたはレポート・テーブルを使用する必要があります。

データ同期

実体化ビューまたはレポート・テーブルと一緒に配置する場合、データを実稼働システムのデータと同期する頻度を決定します。その後、データベース管理ツールを使用して、データの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的にレポート・データを最新表示してください。

eMessage の場合、eMessage デルタ・リフレッシュ・ストアード・プロシージャーを実行するときに、具体化されたビューは自動的に最新表示されます。詳しくは、38 ページの『eMessage 用のストアード・プロシージャーの実行およびスケジュールリング』を参照してください。

レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ

レポート・パッケージの IBM Cognos BI レポートの例には、ターゲット・グループとコントロール・グループの両方からのデータが含まれています。これらのレポートをサポートするために、レポート・スキーマには、デフォルトのコンタクトおよびレスポンス履歴メトリックとデフォルトのレスポンス・タイプそれぞれについて 2 つの列が含まれています。1 つの列にはコントロール・グループからのレスポンスが表示され、もう 1 つの列にはターゲットグループからのレスポンスが表示されます。

サンプルのレポートの拡張や、独自の新規レポートの作成を行う予定の場合、ターゲット・グループとコントロール・グループの両方からのレスポンス情報を組み込むかどうかを決定します。組み込む場合は、メトリックまたはレスポンス・タイプを追加するため、レポート・スキーマにターゲット用と制御用の 2 つの列を作成します。組み込まない場合は、レポート・スキーマにターゲット・グループの項目用の列のみを作成します。

オーディエンス・レベルとレポート

正しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを参照するようにパフォーマンス・スキーマとレスポンス・スキーマを編集することで、レポートのオーディエンス・レベルを変更することができます。

デフォルトの状態では、レポート・スキーマは、Campaign に付属の単一の定義済みオーディエンス・レベル「顧客」のシステム・テーブルを参照します。これは、パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴レポートが、デフォルトで顧客オーディエンス・レベルを参照することを意味します。

正しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを参照するようにパフォーマンス・スキーマとレスポンス・スキーマを編集することで、レポートのオーディエンス・レベルを変更することができます。

さらに、Campaign および Interact については、追加のオーディエンス・レベル用のレポート・スキーマを追加することができます。レポート・スキーマは、「設定」>「構成」ページにあるテンプレートから作成します。追加のレポート・ビューを Cognos データ・モデルに追加します。その後、Cognos レポートを変更して、追加のオーディエンス・レベルに対応するように変更します。

レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キー

パフォーマンス・レポートとレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成する場合、または追加オーディエンス・レベル用に新規レポート・スキーマを作成する場合は、オーディエンス・レベルのオーディエンス・キーを指定します。

キーに複数のデータベースの列が含まれている場合 (マルチキー・オーディエンス・キーと呼ばれることがある)、列名の間にはコンマを使用してください。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

レポート・スキーマの「オーディエンス・キー」フィールドに入力できるストリングの最大長は、255 文字です。オーディエンス・キーが 255 文字より長い場合は、生成済みの SQL でこの制限を回避することができます。「オーディエンス・キー」フィールドにキーの最初の 255 文字を入力して、通常どおりに SQL スクリプトを生成します。次に、エディターで生成されたスクリプトを開き、検索と置換を使用して、切り捨てられたオーディエンス・キー参照のそれぞれを完全なストリングに置換します。

パーティションとレポート・スキーマ

Campaign に複数のパーティションがある場合は、パーティションごとにレポート・スキーマを追加できます。レポート・スキーマは、スキーマ構成ページにあるテンプレートから作成します。

Campaign に複数のパーティションがある場合は、システムの実装者が Cognos システムでパーティションごとにレポート・パッケージを構成します。ただし、ご使用のシステムのデータ設計が実装された後で、パーティションごとにレポート・ビューまたはテーブルを再表示する必要があります。

Framework Manager データ・モデル

Cognos モデルは、物理データベース・オブジェクトと、照会サブジェクトおよび照会項目に対する物理データベース・オブジェクトの関係を記述するレポート・メタデータです。IBM Cognos 10 BI Report Authoring でレポートを作成する場合は、データ・モデルに記述された照会サブジェクトおよび項目から作成します。

IBM EMM アプリケーションのデータ・モデルは、IBM EMM アプリケーション・データベース内のレポート・ビューを参照して、そのデータを IBM EMM レポート・パッケージでも提供される Cognos 10 レポートで利用できるようにします。

レポート・ビューを構成して、追加の属性、メトリック、レスポンス・タイプを組み込んだ場合は、Cognos レポート・モデルとレポート・ビューを同期させ、Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みモデルを公開します。これで、新規属性が Report Authoring で使用可能になり、それらの属性を IBM EMM レポートに追加することができます。

IBM EMM レポート・パッケージの IBM Cognos 10 モデルでは、以下の 3 つのカテゴリ (フォルダー) で IBM EMM アプリケーション・メタデータを提供しています。

- ・ インポート・ビュー。このレベルでは、IBM EMM アプリケーション・データベース内のレポート・スキーマからデータを表示します。データ・ソース接続を介

して、データ・モデルと IBM EMM データベース・ビュー、具体化されたビュー、またはレポート・テーブルを同期化するには、このビューを使用します。

- モデル・ビュー。これは、基本的なメタデータ変換を実行する作業域です。照会サブジェクトによって表示されるオブジェクト・エンティティー間の関係をセットアップして、ビジネス・ビューで使用可能な構成要素を作成します。
- ビジネス・ビュー。このレベルでは、ビジネス・オブジェクトの観点から照会サブジェクトを編成して、レポート作成を単純化します。これは、Report Authoring で IBM EMM アプリケーションのレポートを開いたときに表示される情報です。

Campaign モデルおよび eMessage モデルには、モデル・ビューからビジネス・ビューへのショートカットが含まれています。Interact モデルでは、その照会サブジェクトの一部が 2 つのデータ・ソースにまたがるため、同じ方法のショートカットを使用しません。

注: IBM Cognos Configuration でのプロジェクトの作成中に、「プロジェクトを開く」オプションを使用してプロジェクトを作成します。「作成を開く (Open Create)」オプションを使用すると、照会モードが「互換」に設定されます。「新規プロジェクトの作成」オプションは使用しないでください。「新規プロジェクトの作成」オプションは、照会モードを「動的 (Dynamic)」に設定するデフォルト・テンプレートを使用します。

Report Authoring レポート

それぞれの IBM EMM レポート・パッケージには、IBM Cognos Report Authoring で作成された、アプリケーション用のレポートがいくつか含まれています。アプリケーションをインストールすると、IBM EMM スイートの共通ユーザー・インターフェースで、サンプル・レポートを選択して実行することができます。

サンプル・レポートは、以下の場所から IBM EMM スイートの共通ユーザー・インターフェースで実行できます。

- 「分析」メニューから複数のオブジェクト・レポートにアクセス可能です。
- 単一オブジェクト・レポートは、キャンペーンやオファーなどの項目の「分析」タブに表示されます。
- さらに、Campaign、Marketing Operations、eMessage、および Interact の場合は、IBM EMM ダッシュボードで使用するための事前に構成されたポートレット (レポート) がレポート・パッケージに含まれています。ダッシュボードの操作について詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

フォルダー、サブフォルダー、およびアクセス設定

各 IBM EMM アプリケーションのレポートはフォルダーとサブフォルダーに編成され、フォルダーとサブフォルダーには、アプリケーションとそのパブリック・フォルダー領域でのレポートの目的の両方を表す名前が付いています。

インストール時に、システムの実装者が Cognos Connection にある IBM EMM アプリケーションのレポートのアーカイブをパブリック・フォルダー領域にインポート済みです。

また、これらのフォルダーとサブフォルダーは、Campaign、Interact、および eMessage のセキュリティー・アクセス制御モデルでも使用されます。セキュリティー・アクセス制御モデルには、フォルダー別のレポートのセキュリティー設定が含まれています。つまり、これらのアプリケーションのセキュリティー・ポリシーによって、ユーザーにフォルダー内のすべてのレポートに対するアクセス権限が付与されます。Marketing Operations のアクセス制御モデルはこのレベルのアクセス権限を提供しません。Marketing Operations では、すべてのレポートへのアクセス権限があるか、レポートへのアクセス権限がまったくないかのいずれかです。

ベスト・プラクティスとして、IBM Cognos Connection インターフェースのフォルダーまたはサブフォルダーを名前変更しないようにしてください。名前変更する場合は、必ず IBM アプリケーションが変更済みのフォルダー名を認識するように構成してください。

- Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「構成」を選択し、「**Campaign**」>「**partition**」>「**partition[n]**」>「**reports**」で、レポート・フォルダーのプロパティの値を編集して、フォルダーの実際の名前と一致するようにしてください。
- Marketing Operations の場合は、plan_config.xml ファイルを開き、reportsAnalysisSectionHome および reportsAnalysisTabHome 構成設定の値を編集してください。

レポートのスタイルと外観

GlobalReportStyles.css スタイル・シートは、すべての IBM EMM アプリケーションのレポートにわたって共通するレポート・スタイルを設定します。

このスタイル・シートは、すべての IBM EMM アプリケーションのレポート全体にわたって共通するレポート・スタイルを設定します。スタイルについて詳しくは、付録の 153 ページの『付録 B. Cognos レポートの書式設定』を参照してください。この付録では、さまざまな種類のレポートに関する以下の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- レポートの作成時に手動で行う必要のあるスタイルの書式設定 (特定のスタイルはスタイル・シートを使用して実装できないため)。

IBM EMM レポートでは、ダッシュ文字 (「-」) には特殊な意味があります。これは、計算が適用されないことを示します。例えば、合計を表示する行に固有のカウントを計算できない場合は、その事実を示すために「-」が表示されます。

一部のレポートは、データがほとんどまたはまったくない場合、システムで最良の状態では表示されません。例えば、データ・ポイントが 1 つの折れ線グラフは、線を表示することができないため、グラフが空のように見えることになります。また、サマリー・データのグラフィカル表現では、データのないデータ・ポイントの日付や時刻はリストされません。例えば、指定した日付範囲にデータのある日が 1 日だけ含まれている場合、グラフにはその日付のみが表示されます。

レポートをカスタマイズして、ご使用のシステムからのデータに最適なチャートやグラフの種類を使用することができます。

レポート生成スケジュールのセットアップ

IBM Cognos Connection では、レポートの自動実行をスケジュールすることができます。レポートごとに、実行頻度、フォーマット・オプション、配信方法、および保存場所を選択できます。

例えば、毎週月曜日の午前 9:00 にレポートを実行し、そのレポートを、指定された受信者グループに自動生成 E メールを使用して配布するようスケジュールすることができます。

レポートのスケジューリングと配布について詳しくは「*IBM Cognos Connection User Guide*」のスケジュールの章を参照してください。

レポート・スキーマのカスタマイズ

レポートをカスタマイズすれば、レポートにカスタム・データを組み込んで表示できます。

システムのレポートの目的に応じて、以下のセクションの該当する手順のステップを実行してください。

- 『レポート・スキーマ』
- 75 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』
- 75 ページの『カスタム属性の追加』
- 76 ページの『レスポンス・タイプの追加』
- 77 ページの『コンタクト・ステータス・コードの追加』
- 77 ページの『パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定』
- 77 ページの『パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエンス・レベルの構成』

レポート・スキーマ

変更する必要があるレポート・スキーマは、カスタマイズする予定のレポートに応じて決まります。付録の「製品別のレポートおよびレポート・スキーマ」には、レポート・パッケージで提供されているレポート例をサポートするレポート・スキーマを示す表があります。

カスタマイズするレポートを決定してから、レポート・スキーマ・マップで適切なレポートを参照してください。

- 173 ページの『付録 D. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ』
- 176 ページの『Interact レポートおよびレポート・スキーマ』
- 176 ページの『eMessage レポートおよびレポート・スキーマ』

注: eMessage レポート・スキーマをカスタマイズすることはできませんが、変更および新規 eMessage レポートの作成はできます。

コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加

キャンペーン・パフォーマンスおよびオファー・パフォーマンスのレポート・スキーマにコンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加することができます。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- メトリックを追加したいレポートをサポートしているレポート・スキーマ。詳しくは、付録の 173 ページの『付録 D. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ』を参照してください。
- ターゲット・グループに加えて、コントロール・グループのレポート・スキーマに列を追加する必要があるかどうか。70 ページの『レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ』を参照してください。
- メトリックの計算方法。例えば、メトリックの合計、平均、カウントを出すことができます。

以下のステップを実行して、コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「適切なレポート・スキーマの名前」を展開します。
2. 「列」ノードを展開し、「コンタクト・メトリック」または「レスポンス・メトリック」のいずれかを選択します。
3. 右のフォームで、「新規カテゴリー名」をクリックして、コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの名前を入力します。
4. 「列名」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
5. 「関数 (Function)」には、メトリックの計算方法または判別方法を指定します。
6. 「入力列名」には、IBM アプリケーション・データベースにある適切なテーブルから、この属性用の列の名前を入力してください。入力列名では、大文字と小文字が区別されます。
7. 「制御処理フラグ」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポート・スキーマではこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
8. 「変更の保存」をクリックします。
9. 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマにコントロール・グループ列を追加します。今度は、数値 1 を入力してください。数値 1 は、この列がコントロール・グループを表すことを示します。

カスタム属性の追加

カスタム・キャンペーン属性、オファー属性、およびセル属性をカスタム・キャンペーン属性レポート・スキーマに追加することができます。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- UA_CampAttribute、UA_CellAttribute、または UA_OfferAttribute のうちの適切なテーブルにある、属性の AttributeID 列の値。
- 属性のデータ型: ストリング値、数値、または日付/時刻値

以下のステップを実行して、カスタム属性を追加します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・カスタム属性」>「列」を展開します。
2. 追加する属性のタイプに一致する列のタイプを選択します。
3. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてカスタム属性の名前を入力します。
4. 「列名」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
5. 「属性 ID」には、この属性の ID を入力します。
6. 「値タイプ」には、属性のデータ型を指定します。

注: 通貨値を保持する属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに NumberValue を指定します。Campaign で、「フォーム要素タイプ」が「選択ボックス - 文字列」に設定されている属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに StringValue を追加します。

7. 「変更の保存」をクリックします。

レスポンス・タイプの追加

キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スキーマにレスポンス・タイプを追加することができます。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- ターゲット・グループに加えて、コントロール・グループのレポート・スキーマに列を追加する必要があるかどうか。70 ページの『レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ』を参照してください。
- UA_UsrResponseType テーブルからのレスポンス・タイプ・コード。

以下のステップを実行して、レスポンス・タイプを追加します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細」>「列」>「レスポンス・タイプ」を展開します。
2. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてレスポンス・タイプの名前を入力します。
3. 「列名」には、レポート・スキーマで使用するレスポンス・タイプの名前を入力してください。
4. 「レスポンス・タイプ・コード」には、このレスポンス・タイプの 3 文字のコードを入力します。レスポンス・タイプ・コードでは、大文字と小文字が区別されます。
5. 「制御処理フラグ」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポート・スキーマではこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
6. 「変更の保存」をクリックします。
7. 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマにコントロール・グループ列を追加します。今度は、数値 1 を入力してください。数値 1 は、この列がコントロール・グループを表すことを示します。

コンタクト・ステータス・コードの追加

キャンペーン・オファのコンタクト・ステータス内訳スキーマにコンタクト・ステータス・コードを追加することができます。コンタクト・ステータス・コードは、UA_ContactStatus テーブルから判別できます。

以下のステップを実行して、コンタクト・ステータス・コードを追加します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファのコンタクト・ステータスの内訳」>「列」>「コンタクト・ステータス」を展開します。
2. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてコンタクト・ステータス・タイプの名前を入力します。
3. 「列名」には、レポート・スキーマで使用するコンタクト・ステータス・タイプの名前を入力してください。
4. 「コンタクト・ステータス・コード」には、このコンタクト・ステータスの 3 文字のコードを入力します。コンタクト・ステータス・コードでは、大文字と小文字が区別されます。
5. 「変更の保存」をクリックします。

パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定

Campaign および Interact の標準レポートには、どちらにも、カレンダーの周期でデータを要約したパフォーマンス・レポートが含まれています。

これらのレポートで使用されている期間が、デフォルトの「時間経過に伴う変動」以外のものであることを指定するには、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択して「レポート」>「スキーマ」を展開し、「キャンペーン」または「対話」のいずれかを選択します。
2. 目的の実績スキーマを選択します。
3. 「設定の編集」をクリックします。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション・リストを選択します。
5. 「変更の保存」をクリックします。

パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエンス・レベルの構成

Campaign および Interact のレポート・スキーマをカスタマイズして、レポートに表示するカスタム・データを組み込むことができます。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- 目的のオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブルの名前。
- コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルに対するオーディエンス・キー。71 ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キー』を参照してください。

次に、該当するそれぞれのレポート・スキーマに対して、以下の手順を実行します。

- Campaign の場合: オファー・パフォーマンス、キャンペーン・パフォーマンス、キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細、キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳
 - Interact の場合: 対話実績
1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「<製品名>」>「SchemaName」を展開します。
 2. 右のフォームで、「設定の編集」をクリックします。
 3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーのシステム・テーブルを確認します。

注: 複数のオーディエンス・キーの列名を区切るには、コンマを使用してください。詳しくは、71 ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キー』を参照してください。

4. 「変更の保存」をクリックします。

追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマ

以下の情報を使用して、追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマを作成できます。

以下の理由で、追加のレポート・スキーマを作成する場合があります。

- 複数のオーディエンス・レベルでレポートを作成する必要がある。複数のオーディエンス・レベルのデータが存在するレポートを作成する場合や、ユーザーに複数のオーディエンス・レベルのいずれかを指定するよう求めるプロンプトを出すフィルターを追加する場合などです。そのため、追加の一連のコンタクトとレスポンス履歴テーブルを指すスキーマが必要です。
- 複数のパーティションにレポートを構成しており、パーティションのシステム・テーブルごとに異なるスキーマのカスタマイズを実装する必要がある。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- 作成するレポート・スキーマ。
 - Campaign の場合: キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細、オファー・パフォーマンス、キャンペーン・パフォーマンス、オファーのコンタクト・ステータスの内訳、およびキャンペーン・カスタム属性
 - Interact の場合: 対話パフォーマンス
- このオーディエンス・レベルに関する以下のテーブルの名前。
 - Campaign の場合: コンタクト履歴テーブル、詳細なコンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブル
 - Interact の場合: 詳細なコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブル
- このオーディエンス・レベルに関するオーディエンス・キー列 (複数列の場合もある) の名前
- オーディエンス・レベルの名前を表す 2 または 3 文字の短いコードを選びます。新規レポート・スキーマのテーブル名またはビュー名を指定する場合は、このコードを使用します。

レポートの目的に応じて、次の手順のステップを実行してください。

キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキーマの作成

複数のオーディエンス・レベルまたは複数のパーティションに対してレポートを構成する場合は、追加のオーディエンス・レベル用または追加のパーティション用のレポート・スキーマを作成できます。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリ名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・オファーのレスポンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

4. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンス・タイプ」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのレスポンス・タイプを構成します。

このステップのヘルプについては、76 ページの『レスポンス・タイプの追加』の手順を参照してください。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーンのレスポンスの内訳」を選択して「設定の編集」をクリックします。
6. 表示されるフォームで、「テーブル/ビュー名」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CRBO_HH_。

テーブルおよびビューの命名規則については、135 ページの『レポート | スキーマ (Schemas) | [製品] | [スキーマ名 (schema name)] | SQL 構成 (SQL Configuration)』を参照してください。

7. 「変更の保存」をクリックします。
8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細」を選択して「設定の編集」をクリックします。
9. 「テーブル/ビュー名」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。例えば、UARC_CORBO_HH_ と指定します。
10. 「変更の保存」をクリックします。

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳スキーマの作成

複数のオーディエンス・レベルまたは複数のパーティションに対してレポートを構成する場合は、追加のオーディエンス・レベル用または追加のパーティション用のレポート・スキーマを作成できます。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

4. 新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・ステータス・コード」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・ステータスを構成します。

このステップのヘルプについては、77 ページの『コンタクト・ステータス・コードの追加』の手順を参照してください。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・コンタクト・ステータスのコンタクト履歴」を選択して「設定の編集」をクリックします。
6. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CCSBO_HH_。
7. 「変更の保存」をクリックします。
8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスのコンタクト」を選択して「設定の編集」をクリックします。
9. 「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。例えば、UARC_COCSSBO_HH_ と指定します。
10. 「変更の保存」をクリックします。

オファー・パフォーマンス・スキーマの作成

オファー・パフォーマンス・スキーマを作成するには、「オファー・パフォーマンス・スター・スキーマ」を使用します。

以下のステップを実行して、オファー・パフォーマンス・スキーマを作成します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「オファー・パフォーマンス・スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」で、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、オファー・パフォーマンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションを選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

5. 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・メトリック」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、75 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンス・メトリック」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、75 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』の手順を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (オファ어의コンタクト履歴) を選択して「設定の編集」をクリックします。
8. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View name)」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。
UARC_OCH_HH_。
9. 「変更の保存」をクリックします。
10. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 7 から 9 を繰り返します。

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマの作成

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマを作成するには、「キャンペーン・パフォーマンス・スター・スキーマ」を使用します。

以下のステップを実行して、キャンペーン・パフォーマンス・スキーマを作成します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・パフォーマンス・スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・パフォーマンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションをすべて選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

5. 新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・メトリック」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、75 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンス・メトリック」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、75 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』の手順を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目（キャンペーンのコンタクト履歴）を選択します。
8. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View name)」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。
UARC_CCH_HH_。
9. 「変更の保存」をクリックします。
10. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 8 と 9 を繰り返します。

キャンペーン・カスタム属性スキーマの作成

それぞれのパーティションでは、キャンペーン・カスタム属性スキーマが 1 つだけが必要です。すべてのオーディエンス・レベルに同一のスキーマが使用されます。

以下のステップを実行して、キャンペーン・カスタム属性スキーマを作成します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・カスタム属性」を展開します。
2. 「新規カテゴリ名 (New category name)」で、パーティションを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・カスタム属性パーティション 2 と指定します。
3. 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」を展開し、次に、レポート・スキーマを作成するパーティションに必要なカスタム・セル、オファー、およびキャンペーン属性を追加します。

このステップのヘルプについては、75 ページの『カスタム属性の追加』の手順を参照してください。

4. オプション: ビューまたはテーブルの名前を編集できます。新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、各項目を選択してビューまたはテーブル名を調べます。名前を変更する場合は、長さを 18 文字以下にし、すべての文字を大文字にする必要があります。また、名前にスペースを含めることはできません。
5. 「変更の保存」をクリックします。

対話実績スキーマの作成

対話実績スキーマを作成するには、「対話実績スター・スキーマ」を使用します。

以下のステップを実行して、対話実績スキーマを作成します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「対話」>「対話実績スター・スキーマ」を展開します。

2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」フィールドで、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、対話パフォーマンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションをすべて選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (対話式チャネル・オファ어의コンタクト履歴サマリー) を選択します。
6. 表示されるフォームで、「テーブル/ビュー名」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18文字以下である必要があります。例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARI_OCH_HH_。
7. 「変更の保存」をクリックします。
8. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 6 と 7 を繰り返します。

IBM Cognos モデルのカスタマイズ

IBM EMM レポート・スキーマをカスタマイズして追加のメトリック、属性、またはオーディエンス・レベルを組み込み、レポート・ビューまたはテーブルをそのスキーマに基づいて変更する場合は、IBM Cognos BI モデルも編集する必要があります。

IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへの照会を実行し、データ・モデル内の追加項目をインポートしてください。

Cognos モデルの更新方法は、IBM EMM のレポート・ビューまたはテーブルに加えられた変更によって異なります。

- 属性、メトリック、またはレスポンス・タイプの列を追加して既存のビューを変更した場合は、関連ビューを表す照会オブジェクトを更新することによって新規列をインポートしてください。
- パフォーマンスやランタイム・レポートの時間経過に伴う変動を変更した場合、または追加オーディエンス・レベル用の新規レポート・スキーマを作成した場合、新規ビューが追加されています。この場合は、Framework Manager MetaData Wizard を使用して、ビューをデータ・モデルにインポートしてください。

このセクションでは、Cognos モデルにカスタマイズを追加するためのガイドラインとして使用できる例を示します。詳しくは、「IBM Cognos BI Framework Manager ユーザー・ガイド」および Framework Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

データ・モデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加

IBM Cognos Report Authoring を使用して、データ・モデル内の既存のビューまたはテーブルに属性を追加できます。

以下の例の手順では、IBM Cognos モデルの既存のビューに項目を追加する方法を示しています。この例では、Campaign データベースにカスタム・オファー属性を追加してから、レポートに含める必要があるとします。以下のタスクがすでに完了している必要があります。

- UA_OfferAttribute テーブルでオファー属性を作成する。
- オファー属性をキャンペーン・カスタム属性レポート・スキーマに追加する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、オファー・カスタム属性レポート・ビュー (UARC_OFFEREXTATTR) を更新する。

ここで、Cognos Campaign モデルに新規オファー属性を追加するには、以下の手順を実行します。

1. Campaign モデルのバックアップを作成します。つまり、Cognos/models ディレクトリを参照し、CampaignModel サブディレクトリをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
2. Framework Manager では、Campaign.cpf ファイル (プロジェクト) を開いて、「インポート・ビュー」ノードを展開します。
3. 「インポート・ビュー」の下で、カスタム・オファー属性 (「インポート・ビュー (Import View)」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「UARC_OFFEREXTATTR」) のレポート・ビューを表示する照会オブジェクトを選択します。
4. 「ツール」>「オブジェクトの更新 (Update Object)」を選択します。Cognos は、ビューのノードの下にリストされている列を最新表示して、Campaign データベース内の UARC_OFFEREXTATTR レポート・ビューに現在存在する列をすべて反映します。
5. 「モデル・ビュー」を展開し、このビュー内のカスタム・オファー属性 (「モデル・ビュー」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」) を表すノードを選択します。
6. 「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードをダブルクリックして、「照会サブジェクト定義 (Query Subject Definition)」ダイアログ・ボックスを開きます。
7. 新規列を見つけて、「モデル・ビュー」に追加します。照会項目の名前を編集して、読みやすくします。例えば、Campaign データ・モデルの「インポート・ビュー」にある LASTRUNDATE という名前の列は、「モデル・ビュー」で「前回実行日」として表示されます。

注: 「ビジネス・ビュー」には、「モデル・ビュー」にある「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードへのショートカットが含まれていません。これは、手動で追加することなく「ビジネス・ビュー」で現在使用可能な新規照会項目です。

8. モデルを保存します。
9. パッケージを Cognos Content Store に公開します。

これで、IBM Cognos Report Authoring を使用して、適切なレポートに属性を追加することができます。

IBM Cognos データ・モデルへの新規ビューの追加

IBM Cognos データ・モデルに新しいビューまたはテーブルを追加できます。 IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへの照会を実行し、データ・モデル内の追加項目をインポートしてください。

以下のサンプル手順は、IBM Cognos データ・モデルに新しいビューまたはテーブルを追加する方法を示します。この例では、キャンペーン実績のレポート・スキーマについての時間経過に伴う変動を変更し、ここで Cognos モデルの変更をインポートする必要があるとします。以下のタスクがすでに完了している必要があります。

- 「時間経過に伴う変動」オプションに四半期単位を追加して、キャンペーン・パフォーマンスのスキーマを変更する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。このスクリプトには、次の追加レポート・ビューを作成する指示が含まれています。UARC_CCCH_QU、UARC_CCH_QU、UARC_CCRH_QU、UARC_COCH_QU、UARC_CORH_QU、および UARC_CRH_QU
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、追加レポート・ビューを作成する。

ここで、Cognos Campaign データ・モデルに新規レポート・ビューを追加するには、以下の手順を実行します。

1. Campaign モデルのバックアップを作成します。

つまり、Cognos/models ディレクトリを参照し、CampaignModel サブディレクトリをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。

2. Framework Manager では、キャンペーン・プロジェクトを開いて、「インポート・ビュー」ノードを展開します。
3. 「キャンペーン・パフォーマンス」フォルダーを選択して、「メタデータ・ウィザード (Metadata Wizard)」(マウスの右クリック・メニューからアクセス) を実行します。
4. メタデータ・ウィザードを使用して、新規ビューをインポートします。
5. 「モデル・ビュー」>「キャンペーン・パフォーマンス」ノードを展開して、「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」という名前の新規項目をモデル化します。

このステップのヘルプについては、リファレンスのその他のエントリを調べてください。必ず同一の構造と、他の「時間経過に伴う変動」ノードに含まれる関係を維持してください。さらに、「Cognos BI Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照して、以下の情報を調べてください。

- 名前空間の作成。
 - スター・スキーマ・グループの作成。
 - 結合の追加。
6. 「ビジネス・ビュー」を展開して、「モデル・ビュー」にある「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」ノードへのショートカットを作成します。
 7. モデルを保存します。
 8. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
 9. Report Authoring を開き、作成した「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」スキーマのオブジェクトを使用して、新規レポートを作成します。

IBM EMM アプリケーション用の Cognos レポートのカスタマイズまたは作成

レポート例をカスタマイズしてカスタム・データを組み込んだり、新規レポートを作成したりすることができます。Cognos Connection から、レポートのオプションを構成したり、一定の時刻にレポートを実行するようにスケジュールしたり、Report Authoring を使用してレポートをカスタマイズしたりすることができます。

レポートを計画して実装する場合は、以下のソースを参照してください。

- IBM EMM アプリケーションのユーザー・ガイドには、その製品の IBM EMM レポート・パッケージにあるすべてのレポートの簡略説明が記載されています。
- IBM EMM レポート・パッケージには、パッケージ内の各レポートの仕様と、レポートをサポートしている Framework Manager メタデータ・モデルについて説明した参考資料が付属しています。レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の <Reports Pack インストール・ディレクトリー>/cognos10/<製品>Docs などの場所で、参照資料を見つけることができます。

例えば、IBM EMM Campaign レポート・パッケージの資料は、/IBM/EMM/ReportsPackCampaign/cognos10/CampaignDocs の下の Reports Pack インストール・ディレクトリーで見つかります。

モデルやレポートをカスタマイズする前に、これらの資料を調べてください。必ず、レポートの構成方法について理解してから、レポートの変更を行ってください。

- IBM Cognos レポートの作成および編集に関する詳細な資料については、IBM Cognos BI の資料 (特に「*IBM Cognos Report Authoring* プロフェッショナル ユーザー ガイド」) を参照してください。
- 使用するレポート・スタイルについては、付録の 153 ページの『付録 B. Cognos レポートの書式設定』を参照してください。
- Marketing Operations レポートのカスタマイズについては、「*Marketing Operations* 管理者ガイド」を参照してください。

新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン

Campaign の IBM EMM レポート・パッケージには、レポート例が含まれています。Report Authoring は、新しいレポートを作成したり、既存のレポートを変更したりする場合に使用します。

IBM Cognos Report Authoring で Campaign の新しいレポートを作成するには、以下のガイドラインを使用してください。

- Campaign メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様について説明している参考資料を調べます。これは、レポート・パッケージのインストール・ディレクトリーの CampaignReportPack\cognosN\docs サブディレクトリーにあります。N は、Cognos インストール済み環境のバージョン番号です。
- Report Authoring を使用して、新しいレポートを作成するか、既存のレポートをコピーし、変更します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- 既存のレポートのコピー（またはレポート自体）を変更する場合は、レポートの構成をよく理解しておいてください。その後、Report Authoring のツールバーと「プロパティ」ペインを使用して、カスタム属性およびメトリックを追加し、オブジェクトと照会項目を適切な方法で変更することができます。Report Authoring 使用方法については、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。レポート例の中のオブジェクトと照会項目については、レポート・パッケージにある参考資料を参照してください。
- 「分析」タブに表示されるオブジェクト固有のレポートを得るには、オブジェクトから渡された値を受け入れるパラメーター ID を作成します。「分析」ページに表示されるシステム全体のレポートを得るには、キャンペーンまたはオファーのすべてのオブジェクト値を含んだプロンプトを作成します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- 新しいレポートを Campaign で表示できるようにするには、「パブリック・フォルダー (Public Folders)」の下の適切なフォルダーにレポートを保存します。
 - 「分析」タブに表示するには、「Campaign - Object Specific Reports」フォルダーに保存します。
 - 「分析」ページに表示するには、「Campaign」フォルダーに保存します。
 - ダッシュボード・ポートレットに追加する計画の場合は、「Unica Dashboards\Campaign」フォルダーに保存します。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードの構成

Interact には、インタラクション・ポイント別サマリーという 1 つの IBM Cognos ダッシュボード・レポートがあります。ダッシュボード・レポートは、照会パラメーターについてのプロンプトをユーザーに出さないため、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの対話式チャネルのチャネル ID は静的値です。デフォルトでは、このレポートのチャネル ID は 1 に設定されます。チャネル ID が実装環境に適していない場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィルター式でチャネル ID を変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリング・スキルが必要です。IBM Cognos BI レポートの作成および編集についての

詳しい資料については、IBM Cognos BI の資料 (特に、ご使用の Cognos のバージョンに対応した「*IBM Cognos BI Report Studio Professional Authoring User Guide*」) を参照してください。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの照会およびデータ項目については、Interact レポート・パッケージに含まれている参考資料を参照してください。

複数の対話式チャンネルをダッシュボードに表示する必要がある場合は、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードのコピーを作成してチャンネル ID を変更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それをダッシュボードに追加します。

新規カスタム・ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン

Campaign、Interact、eMessage、および Marketing Operations の IBM EMM レポート・パッケージには、IBM EMM ダッシュボードで使用できるように特別に書式設定された事前構成レポート (ポートレット) が含まれています。

ダッシュボードの扱いおよびこれらの事前構成ポートレットの使用については詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Cognos Report Authoring で新規カスタム・ダッシュボード・レポートを作成する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様について説明している参考資料を調べます。これは、レポート・パッケージのインストール・ディレクトリーの製品名 `ReportPack¥cognosN¥docs` サブディレクトリーにあります。*N* は Cognos インストール済み環境のバージョン番号です。
- メインの **Unica Dashboards** フォルダの下に該当する製品サブディレクトリーに、すべてのダッシュボード・レポートを保存します。
- ダッシュボード・ポートレットに適切に収まるように、レポートを書式設定し、サイズを調整します。使用する必要のある書式設定の説明については、付録『IBM Cognos BI レポートの書式設定』の 161 ページの『ダッシュボード・レポートのスタイル』を参照してください。
- ダッシュボード・レポートにはタイトルを含めないでください。ダッシュボード・レポートが表示されるポートレットによって、レポートにそのタイトルが指定されます。
- ダッシュボード・レポートにはハイパーリンクを含めないでください。
- ダッシュボード・レポートにはページ番号を含めないでください。

新規ダッシュボード・ポートレットを作成してそれにレポートを追加するには、「*IBM EMM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

第 7 章 Cognos のフォルダーおよびレポートに対するユーザー権限

カスタム Java 認証プロバイダー (CJAP) は、Cognos のレポート・フォルダーおよびレポートにアクセスするユーザーに対して権限を提供します。この機能を実装する前に、IBM EMM 認証プロバイダーを実装して、IBM EMM アプリケーションおよび Cognos の間のシングル・サインオン認証を提供する必要があります。

IBM EMM 認証プロバイダーの制限

IBM EMM 認証プロバイダーを使用するように Cognos を構成すると、ユーザーが IBM EMM アプリケーション内でレポートにアクセスする際に、ユーザーは Cognos で自動的に認証されます。IBM EMM 製品にアクセスするために使用したブラウザー・セッション内でユーザーが Cognos URL にアクセスした場合、Cognos はユーザーに再度ログインするようには求めません。

Cognos のユーザー・インターフェースでログインするユーザーは、Cognos の **Everyone** グループのメンバーになります。これがデフォルトの Cognos 名前空間の実装です。Cognos の **Everyone** グループは、デフォルトで System Administrator 特権を持っています。これでは、すべてのユーザーが admin ユーザーになるため、セキュリティー・リスクになります。悪意のあるユーザーがこの権限を利用してパブリック・フォルダーにあるレポートを削除または編集することができるからです。

IBM EMM 認証プロバイダーは、Cognos 内でユーザーを認証しますが、それらのユーザーに権限を与えることはしません。この制限に対処するため、CJAP 実装により、Cognos のセキュリティー・セクションの名前空間にユーザーが表示されるようになります。これが行われると、ユーザーの役割と権限を Cognos で管理できるようになります。

CJAP 実装の概要

CJAP 実装は、レポート・アクセス権限を持つ IBM EMM アプリケーション内のすべてのユーザーを、指定の Cognos 名前空間に組み入れます。CJAP は、IBM EMM ユーザーを、それらのユーザーの IBM EMM 製品へのアクセス権限に基づいて Cognos グループに関連付けます。IBM EMM で **ReportsUser** 役割を持つユーザーには、Cognos のフォルダーおよびレポートに対して読み取り専用の限定的なアクセス権限が与えられます。IBM EMM で **ReportsSystem** 役割を持つユーザーには、Cognos での管理者権限が与えられます。Cognos のカスタム・レポートおよびレポート・フォルダーをセキュリティーで保護するために、グループと役割をカスタマイズすることもできます。

CJAP の前提条件

CJAP を実装する前に、IBM EMM 認証プロバイダーが実装され、テスト済みであることを確認してください。

CJAP セキュリティを実装する方法

CJAP セキュリティを実装するには、このセクションにある手順をこの順序で実行します。

実装の手順を始める前に、このセクションを読んで、使用する環境に当てはまるいくつかの特別な考慮事項について理解しておいてください。

認証モード

IBM EMM 認証プロバイダーを構成するときは、「**認証モード**」プロパティの値として「**認証**」または「**ユーザーごとに認証**」のいずれかを選択して設定できます。

「**認証**」を選択した場合は、すべてのユーザーが同じユーザー・アカウントを使用して認証されます。

「**認証**」オプションを使用する場合は、以下の考慮事項に注意してください。

- デフォルトでは、システムが認証のために使用するユーザー・アカウントは **Cognos_admin** です。CJAP 認証を実装するときは、**Cognos_admin** ユーザーに IBM EMM の **ReportUser** 役割を与えることをベスト・プラクティスとしてお勧めします。
- この章で説明されている以下の手順は、実行する必要がありません。これらの手順は、IBM EMM 認証プロバイダーに対して「**ユーザーごとに認証**」を選択した場合にのみ適用されます。
 - すべての Reports ユーザーに対するパブリック・フォルダーの読み取り専用アクセス権の付与
 - パブリック・フォルダーのセキュリティ保護
 - Cognos でのユーザー権限の検証

CJAP のバックアップの実行

CJAP を実装する前に、Cognos 環境をバックアップします。

1. Cognos サービスを停止します。
2. Cognos Configuration の「ファイル」メニューのエクスポート・オプションを使用して、Cognos の構成をバックアップします。
3. コンテンツ・データベースをバックアップします。
4. Cognos インストール済み環境にある `webapps\p2pd\WEB-INF\AAA` フォルダーを手動でバックアップします。

プロパティ・ファイルの編集と同期

プロパティ・ファイルにより、IBM EMM のどのグループが Cognos で複製されるかが決まります。プロパティ・ファイルを編集して、Cognos に同期する Marketing Platform グループを指定します。

最初に、必要なレポート・アクセスを Marketing Platform で設計するために、グループを作成し、グループに適切な役割を関連付け、これらのグループのユーザー・メンバーを作成します。

以下の手順を、Cognos サービスが停止した状態で実行し、プロパティ・ファイルを編集した後でサービスを再始動します。プロパティ・ファイルに変更を加えた後は、Cognos サービスを再始動する必要があります。

1. Cognos のインストール済み環境にある `%webapps%pd%WEB-INF%AAA%lib%` フォルダーから `ReportSecurityConfig.properties` ファイルを探し、そのファイルをテキスト・エディターで開きます。
2. プロパティを設定する方法について、ファイル内の指示に従います。

例えば、次のようにしてプロパティを設定します。

- `useFolderSecurity=true`
- `createEMMProductReportGroupsToSecureCognosReportFolders=Campaign`

Cognos では、サブフォルダーは、ここで指定したフォルダーの下に作成されます。

- `createCampaignReportsSyncFolderPermissionGroups=true`
- `createUserGroupInCognosSameAsPlatformGroup=Test_grp`

ここで指定するグループは、Marketing Platform 内に存在している必要があります。

- `createUserGroupInCognosWithPlatformUserRole=User_Defined_Role01`

ここで指定する役割は、Marketing Platform 内に存在している必要があります。

3. Cognos サービスを再始動します。
4. IBM EMM のユーザー・インターフェースで「設定」>「レポート・フォルダー権限の同期」をクリックして、プロパティ・ファイルを同期します。

Cognos での新しい名前空間プロバイダーの構成

CJAP のために Cognos で新しい名前空間プロバイダーを構成します。

1. Cognos Configuration で「セキュリティ」>「認証」フォルダーにナビゲートします。
2. 「認証」フォルダーに新しい名前空間リソースを追加します。
3. 名前空間に名前を指定します。
4. 「タイプ」メニューから「カスタム Java プロバイダー」を選択し、「OK」をクリックします。

これにより、セキュリティ CJAP のための新しい名前空間が作成されます。

5. 新しい名前空間を選択し、名前空間に付けた名前をプロバイダーの ID として入力します。
6. クラス名として `com.ibm.emm.cognos.provider.EMMSuiteSecurityCJAP` を入力します。

先頭と末尾にはスペースを使用しないでください。

7. 「認証で選択可能」プロパティに、テストの目的で「True」を設定します。
 - **True** - ユーザーは IBM EMM の資格情報を使用して Cognos にログインできます。

外部ユーザーはパスワードなしでログインできるので、これは実稼働時にはお勧めできません。

- **False** - この名前空間は Cognos UI 上での認証には使用できませんが、IBM EMM との統合は機能します。

テストが完了した後に、この設定に変更します。

8. IBM EMM で **Report_System** 役割を持つ IBM EMM アカウントを使用して、新しい名前空間の下で Cognos にログインします。

URL は、例えば次のようになります: `http://host:port/ibmCognos/cgi-bin/Cognos.cgi`。

Cognos アプリケーションを表示できれば、新しい認証プロバイダーが機能していることがわかります。

9. IBM EMM で、「設定」>「構成」ページにナビゲートし、「レポート | 統合 | Cognos 10 | 認証の名前空間 (Authentication namespace)」構成プロパティを、Cognos で設定した名前と同じ名前に設定します。
10. Cognos レポートが IBM EMM で正常に実行されることを確認します。

同期の検査

グループ、ユーザー、および役割が Cognos 名前空間内に想定どおりに存在していることを検査します。

1. Cognos Connection で、「起動」>「**Cognos Administration**」をクリックします。
2. 「セキュリティ」タブで、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
3. 作成した名前空間を選択します。
4. Groups フォルダーをクリックし、グループが正しく同期されていることを、次のようにして確認します。
 - 次の 3 つのデフォルト・グループが存在しており、想定どおりのメンバーが設定されていることを確認します。

- **EMM_Report_System_Admin_User**

IBM EMM の **ReportsSystem** 役割を持つユーザーがこのグループのメンバーです。

- **EMM_Report_User_Role_Users**

IBM EMM の **ReportsUser** 役割を持つユーザーがこのグループのメンバーです。

- **EMM_Report_Access_All_Users**

IBM EMM の **ReportsUser** 役割を持つユーザーがこのグループのメンバーです。

- ReportSecurityConfig.properties ファイルに指定したグループが存在しており、想定どおりのメンバーが設定されていることを確認します。

5. Users フォルダをクリックし、Marketing Platform の **ReportsSystem** および **ReportsUser** 役割を持つすべてのユーザーがこのフォルダー内にリストされていることを確認します。
重要: グループ・メンバーシップを通じてレポート権限を付与されるユーザーは、そのユーザーが IBM EMM でレポートにアクセスした後に、Cognos に表示されるようになります。また、新しいユーザーは、Cognos が再始動した後、またはユーザーが IBM EMM でレポートにアクセスした後にリストされるようになります。
6. Roles フォルダをクリックし、次に挙げる役割メンバーが想定どおりに存在することを確認します。
 - Marketing Platform で **ReportsSystem** 役割を持つすべてのユーザーが、Cognos で **Reports_System_Role** 役割を持っていること。
 - Marketing Platform で **ReportsUser** 役割を持つすべてのユーザーが、Cognos で **Reports_User_Role** 役割を持っていること。

新しい役割に対する Cognos の権限の割り当て

この手順は、Cognos で、Cognos の **Reports_System_Role** 役割および **Report_User_Role** 役割に対して権限を割り当てるために使用します。これらの役割は、それぞれ Marketing Platform の **ReportSystem** 役割および **ReportUser** 役割に相当します。

1. Cognos Connection で、「起動」>「IBM Cognos Administration」をクリックします。
2. 「セキュリティ」タブで、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
3. 「ディレクトリー」> [使用している名前空間] > 「役割」にナビゲートします。
4. 「**Report_User_Role**」アイコンをクリックし、次のように操作してこの役割に読み取り専用の権限を付与します。
 - a. 「権限」タブで、「追加」>「Cognos 名前空間」をクリックします。
 - b. 「すべての認証ユーザー」グループを選択し、「追加」をクリックし、「OK」をクリックします。
 - c. 「読み取り」、「実行」、および「全探索」権限を付与します。
 - d. 「書き込み」および「ポリシー設定」権限を拒否します。
 - e. 「OK」をクリックします。
5. 「**Reports_System_Role**」のアイコンをクリックし、次のように操作してこの役割にすべての権限を付与します。
 - a. 「権限」タブで、「追加」>「Cognos 名前空間」をクリックします。
 - b. 「すべての認証ユーザー」グループを選択し、「追加」をクリックし、「OK」をクリックします。
 - c. 「読み取り」、「書き込み」、「実行」、「ポリシー設定」、および「全探索」権限を付与します。
 - d. 「OK」をクリックします。

Cognos の System Administrators 役割からの Everyone グループの削除

デフォルトでは、認証されるすべてのユーザーは Cognos の **Everyone** グループのメンバーであり、このグループのメンバーは Cognos の **System Administrators** 役割を持ちます。そのため、デフォルトでは、すべてのユーザーに Cognos の管理者権限が付与されます。この手順では、**EMM_Report_System_Admin_User** グループまたは **Reports_System_Role** 役割に Cognos の管理者権限を割り当て、Cognos の System Administrators 役割から「**Everyone**」グループを削除します。

1. Cognos Connection で、「起動」>「**IBM Cognos Administration**」をクリックします。
2. 「セキュリティ」タブで、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
3. 「Cognos」名前空間をクリックします。
4. 「**System Administrators**」役割を探して、「プロパティの設定」アイコンをクリックし、次のようにして「**Everyone**」グループを変更します。
 - a. 「メンバー」タブをクリックします。

「**Everyone**」グループがリストされます。
 - b. 「追加」をクリックし、使用する名前空間をクリックします。
 - c. 「**EMM_Report_System_Admin_User**」グループ、または「**Reports_System_Role**」役割を追加します。
 - d. 「OK」をクリックします。
 - e. 「**Everyone**」グループを選択して、「削除」をクリックします。

すべての Reports ユーザーに対するパブリック・フォルダーの読み取り専用アクセス権の付与

EMM_Report_Access_All_Users グループの Marketing Platform **ReportSystem** 役割メンバーおよび **ReportUser** 役割メンバーを設定したユーザーを作成します。このグループのメンバーには、Cognos のパブリック・フォルダーに対する読み取り専用アクセス権を与えます。

注: **EMM_Report_System_Admin_User** グループは、Cognos でのシステム管理者権限を持っています。IBM EMM ユーザーに Cognos でのこのレベルのアクセス権を付与するには、そのユーザーを **EMM_Report_System_Admin_User** グループのメンバーにします。

1. Cognos Connection で、「パブリック・フォルダーのプロパティの設定 (Set properties for Public Folders)」アイコンをクリックします。
2. 「権限」タブで「追加」をクリックし、使用する名前空間をクリックし、「グループ」をクリックします。
3. 使用する名前空間から「**EMM_Report_Access_All_Users**」グループを追加します。
4. この権限から他のすべての役割およびグループを削除します。
5. 「読み取り」、「実行」、および「全探索」権限を付与します。
6. 「書き込み」および「ポリシー設定」権限を拒否します。

7. 「OK」をクリックします。

パブリック・フォルダーのセキュリティー保護

Cognos のパブリック・フォルダーへのアクセスを確実に制御するには、各 IBM EMM 製品のレポート・パック用に作成したフォルダーを含む、すべてのパブリック・フォルダーに対してこの手順を実行します。

下記の例で、**fff** は、使用する名前空間のユーザー・グループに割り当てる必要のある任意のパブリック・フォルダーを表します。

1. 「**fff フォルダーのプロパティを設定 (Set properties of fff folder)**」を選択し、「権限」タブをクリックします。

デフォルトでは、権限は、前のステップですべてのフォルダーに対して指定した **EMM_Report_Access_All_Users** グループ権限です。

2. 「親エントリーから取得したアクセス権をオーバーライド」チェック・ボックスをクリックし、次のようにして異なるグループを指定します。
 - a. 「追加」をクリックし、使用する名前空間をクリックし、「グループ」をクリックし、「選択」をクリックし、必要なグループを追加します。
 - b. 必要なグループを追加して、「OK」をクリックします。
 - c. 他のすべてのグループを削除し、新しく追加したグループに必要なアクセス権を付与します。
 - d. 「OK」をクリックします。
3. 選択したグループのユーザーがフォルダーに対する想定どおりのアクセス権限を持っていることと、そのグループのメンバーでないユーザーがこのフォルダーに対するアクセス権限を持っていないことを確認します。

Cognos でのユーザー権限の検証

CJAP の実装が想定どおりに機能していることを確認します。

Cognos の認証は、cookie に基づいて実行されます。以下のテストを実行する場合は、ユーザーを切り替える時に Cognos の cookie を削除し、新しいブラウザー・ウィンドウを使用してください。

1. Cognos の **Report_User_Role** 役割を持つアカウントを使用して Cognos にログインします。
2. このユーザーのアクセス権限が次のようになっていることを確認します。
 - IBM Cognos Administration へのアクセス権限がないこと。
 - セキュリティーで保護したパブリック・フォルダーへのアクセス権限がないこと。
 - 「切り取り」、「貼り付け」、および「削除」ボタンが使用不可になっていること。
 - ユーザーがコピーを実行できること。ただし、貼り付けは「個人用フォルダー」の下にあるそのユーザーのフォルダーに対してのみ実行できること。
 - ユーザーは「個人用フォルダー」の下にフォルダーを追加できるが、「パブリック・フォルダー」の下には追加できないこと。

3. プロパティ・ファイルに指定した Marketing Platform グループのメンバーが、想定どおりのグループに含まれており、想定どおりの権限を持っていることを確認します。
4. 問題を解決するには、以下の情報が役立ちます。
 - ユーザーがレポートを使用できない場合は、そのユーザーが Cognos の **Report_User_Role** または **Reports_System_User** 役割を持っていることを確認します。
 - ログを有効にするためにプロパティ・ファイルにログ・ファイルへのパスを指定します。
5. テストがすべて完了したら、Cognos Configuration で「**セキュリティ**」>「**認証**」フォルダーにナビゲートし、CJAP で使用した名前空間で「**認証で選択可能**」プロパティを「**False**」に設定します。

環境からの CJAP 実装の削除

いったん CJAP セキュリティーを実装した後に、IBM EMM 認証プロバイダーのみを使用するように環境をロールバックすることにした場合は、この手順を実行します。

1. 以下のようにして、CJAP を実装するために実行した手順を逆に行います。
 - a. バックアップから reportSecurityConfig.properties ファイルをリストアし、IBM EMM ユーザー・インターフェースで「**設定**」>「**レポート・フォルダー権限の同期**」をクリックして、プロパティ・ファイルを同期します。
 - b. Cognos 名前空間の「**Everyone**」グループに「**Cognos Administrators**」役割を追加します。

CJAP を構成した際には、この役割を Cognos 名前空間の「**Everyone**」グループから削除しました。この役割を再度 Cognos に追加する必要があります。そうしないと、Cognos の管理者権限を持つユーザーが存在しなくなります。そのような状態になった場合は、新しいコンテンツ・データ・ストア・データベースをセットアップするか、コンテンツ・ストアをバックアップ・データベースから復元する必要があります。

2. Cognos サービスを停止し、再始動します。

第 8 章 複数パーティション用のレポートの構成

Campaign および eMessage で複数パーティションを構成した後、レポートを設定できます。

Campaign および eMessage におけるパーティションの構成については、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

複数パーティション用の IBM Cognos レポートの構成

Campaign、eMessage、または Interact (あるいはそのすべて) を複数のパーティションで使用している場合、パーティションごとに IBM Cognos レポート・パッケージを構成する必要があります。レポートを複数のパーティション用に構成するには、**partition_tool.sh** ユーティリティを使用します。

partition_tool.sh ユーティリティを実行すると、以下のことが行われます。

- 元のレポート zip アーカイブから XML ファイルをコピーします。
- XML ファイル内のパッケージ参照を、指定した新しいフォルダーの下にある新しいパッケージを参照するように置換します。
- 新規ファイルを新しい zip アーカイブに圧縮し、新規パーティション名をファイル名の末尾に追加します。

partition_tool.sh ユーティリティの実行後、Cognos Connection 内に、指定した名前を使用してフォルダーを作成し、新しいアーカイブをそのフォルダーにインポートします。最後に、元のプロジェクト・ファイル (モデルが含まれるファイル) をコピーします。これで、新規パーティションを指すようにデータ・ソースを変更してから、新しいフォルダーにモデルを発行できます。

複数パーティションのための前提条件

レポート・パーティション・ユーティリティ **partition_tool.sh** は、UNIX シェル・スクリプトです。IBM Cognos レポート・パッケージを複数のパーティション用に構成するには、**partition_tool.sh** ユーティリティを使用します。

このユーティリティを実行する前に、以下の手順を実行してください。

入力パラメーターの値の決定

レポート・パーティション・ツールには、2 つの入力パラメーターがあります。1 つは Cognos で作成するパーティション・フォルダーの名前、もう 1 つはコピーするレポート・アーカイブの場所です。

- Cognos で作成する予定の最上位パーティション・フォルダーの名前を決定します。この名前は、Cognos でパッケージ参照のために使用されます。例えば、「Partition2」とします。
- 元のレポート・アーカイブへのパスをメモします。例: IBM\Unica\ReportsPacksCampaign\cognos<version>\Unica Reports for Campaign.zip

Windows のみ: シェル・スクリプト・シミュレーターを入手します。

Cognos が Windows で実行されている場合、スクリプトをシェル・スクリプト・シミュレーター (Cygwin など) から実行する必要があります。

Cognos Content Manager を実行しているコンピューターにシェル・スクリプト・シミュレーターがインストールされていない場合には、この時点でダウンロードしてインストールします。

zip ユーティリティーがインストールされていることを確認します。

レポート・パーティション・ツールによって、新しいパーティション・レポート用の zip アーカイブが作成されます。この機能を有効にするには、zip ユーティリティーが Cognos システムにインストールされていなければなりません。

Cognos Content Manager を実行しているコンピューターに zip ユーティリティーがインストールされていない場合には、この時点でダウンロードしてインストールします。

レポート・パーティション・ツールを実行してレポート・アーカイブ .zip ファイルのコピーを作成する

レポートのアーカイブ zip ファイルのコピーを作成する場合は、パーティションごとに **partition_tool.sh** ユーティリティーを実行する必要があります。

システム内のパーティションごとに、この手順を実行してください。

1. シェルまたはシェル・シミュレーターで、IBM\Unica\Platform\tools\cognos<version>\bin ディレクトリーを参照します。
2. パーティション名およびアーカイブ・パスのパラメーターに値を指定して、**partition_tool.sh** ユーティリティーを実行します。

例

Campaign レポート・アーカイブの場合

```
partition_tool.sh Partition2
"IBM¥Unica¥ReportsPacksCampaign¥cognos<version>¥Unica Reports for
Campaign.zip"
```

eMessage レポート・アーカイブの場合

```
partition_tool.sh Partition2
"IBM¥Unica¥ReportsPackseMessage¥cognos10¥Unica Reports for eMessage.zip"
```

注: パラメーター値にスペースが含まれる場合は、上記のアーカイブ・パスのように、パラメーター値を引用文字で囲む必要があります。

3. 新しい各 zip ファイルを Cognos 配置ディレクトリーにコピーします。

上記の例で指定したパーティション名を使用する場合、新しい zip ファイルの名前は以下ようになります。

- Campaign - Unica Reports for Campaign_Partition2.zip
 - eMessage - Unica Reports for eMessage_Partition2.zip
4. Cognos Connection を開きます。
 5. 「パブリック・フォルダー」の下に、レポート・パーティション用のフォルダーを作成します。例えば、Campaign Partition 2 を作成します。
 6. ステップ 5 で作成したフォルダーをインポート・ウィザードでターゲットの場所として選択して、新しい各 zip アーカイブをインポートします。

例に従った場合は、「Campaign Partition 2」フォルダーがターゲットになります。

Campaign 用の Cognos モデルのコピーの作成

新しい Campaign レポートのために IBM Cognos データ・モデルのコピーを作成します。モデルが正しいデータ・ソース名を参照していることを確認する必要があります。

Campaign レポートを複数パーティションで使用することを計画している場合は、以下の手順を実行してください。

1. 目的のパーティションの IBM Cognos データ・ソースが作成されていることを確認します。そのパーティションのデータ・ソースがまだ作成されていない場合は、13 ページの『JDBC データ・ソースの作成』を参照してください。
2. Framework Manager を使用して、Campaign プロジェクト (cpf ファイル) の CampaignModel.cpf ファイルを開きます。
3. 「名前を付けて保存」を使用して CampaignModel プロジェクトをコピーし、それが使用されるパーティションを表す新しい名前を付けます。例えば、CampaignModelPartition2 にします。
4. 「プロジェクト・ビューアー」で、「データ・ソース」ノードを展開し、「CampaignDS」を選択します。

「プロパティ」ペインがデフォルトで表示されない場合は、「表示」>「プロパティ」を選択してください。

5. 「名前」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (CampaignDS) から、この Campaign パーティションの正しいデータ・ソース名に変更します。例えば、CampaignDS_partition2 にします。
6. 「Content Manager データ・ソース」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (CampaignDS) から、前のステップで指定したのと同じ値に変更します。

この例では、値は CampaignDS_partition2 です。

7. 変更を保存します。
8. パッケージを Content Store に公開します。公開ウィザードで「場所タイプを選択」ウィンドウが表示されたら、前のタスクで Cognos Connection にレポート・アーカイブをインポートしたフォルダーを参照してそのフォルダーを指定します。

この例では、フォルダーは Campaign Partition 2 です。

eMessage 用の Cognos モデルのコピーの作成

eMessage レポートを複数のパーティションで使用する場合は、eMessage 用に Cognos モデルのコピーを作成する必要があります。新しい eMessage レポート用に IBM Cognos データ・モデルのコピーを作成し、そのモデルが正しいデータ・ソース名を参照するようにします。

1. 目的のパーティションの IBM Cognos データ・ソースが作成されていることを確認します。そのパーティションのデータ・ソースがまだ作成されていない場合は、13 ページの『JDBC データ・ソースの作成』を参照してください。
2. Framework Manager を使用して、eMessage プロジェクト・ファイルの eMessageModel.cpf を開きます。
3. 「名前を付けて保存」を使用して eMessageModel プロジェクトをコピーし、それが使用されるパーティションを表す新しい名前を付けます。例えば、eMessageModelPartition2 にします。
4. 「プロジェクト・ビューアー」で、「データ・ソース」ノードを展開し、「eMessageTrackDS」を選択します。

「プロパティ」ペインがデフォルトで表示されない場合は、「表示」>「プロパティ」を選択してください。

5. 「名前」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (eMessageTrackDS) から、この eMessage パーティションの新しいデータ・ソース名に変更します。
6. 「Content Manager データ・ソース」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (eMessageTrackDS) から、前のステップで指定したのと同じ値に変更します。

この例では、値は eMessageTrackDS_partition2 です。

7. 変更を保存します。
8. パッケージを Content Store に公開します。公開ウィザードで「場所タイプを選択」ウィンドウが表示されたら、前のタスクで Cognos Connection にレポート・アーカイブをインポートしたフォルダーを参照してそのフォルダーを指定します。

この例では、フォルダーは Campaign Partition 2 です。

IBM EMM 「構成」 ページでのパーティションのレポート・プロパティの更新

パーティションごとに、レポート・フォルダーの場所を指定するレポート・プロパティのセットがあります。新しい最上位パーティション・フォルダーを表すストリングを挿入することにより、レポート・プロパティそれぞれの値を編集して、フォルダーへの実際のパスを反映させる必要があります。

Campaign の例

Cognos Connection の新しいパーティション・フォルダーの名前が「Campaign Partition 2」であるとする、レポート・プロパティの設定を次の例に示すように編集します。


```
folder[@name='Campaign Partition 2']/
```

例えば、offerAnalysisTabCachedFolder プロパティを更新するには、値を以下のように変更します。変更前:

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific  
Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

変更後:

```
/content/folder[@name='Campaign Partition 2']/folder[@name='Affinium  
Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/  
folder[@name='cached']
```

eMessage の例

Cognos Connection の新しいパーティション・フォルダーの名前が「Campaign Partition 2」であるとする、レポート・プロパティの設定を次の例に示すように編集します。

```
folder[@name='Campaign Partition 2']/
```

例えば、campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティを更新するには、値を以下のように変更します。変更前:

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessageReports']
```

変更後:

```
/content/folder[@name='Campaign Partition 2']/folder[@name='Affinium  
Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

パーティションのレポート・プロパティの更新

パーティションのレポート・プロパティの値がそれぞれフォルダーの実際のパスを反映するようにするため、その値を編集して最上位パーティションのフォルダーを識別するストリングを挿入する必要があります。

1. IBM EMM に platform_admin ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」 > 「構成」を選択します。
3. 「キャンペーン」 > 「パーティション」 > *partitionName* > 「レポート」と展開します。
4. 各プロパティの値を、レポート・フォルダーへの実際のパスを反映するように編集します。
5. 変更を保存します。
6. パーティションごとに、ステップ 3 から 5 を繰り返します。

第 9 章 レポートのアップグレード

IBM EMM レポートの現行バージョンをアップグレードして、最新の機能を備えた状態に更新することができます。

IBM EMM では、レポートは Marketing Platform が提供するコンポーネントの 1 つです。

アップグレードする際、インストーラーおよびデータベース・スクリプトによってレポート機能のアップグレードも行われます。その際、Campaign および Interact レポート・スキーマの構成設定は保持されます。

アップグレード・シナリオ

ソース・バージョン	アップグレード・パス
7.5.1 より前	IBM EMM アプリケーションを 7.5.1 より前のバージョンからアップグレードする場合、レポートのためのアップグレード・パスは存在しません。代わりに、1 ページの『インストール・ロードマップ』を参照してください。
7.5.1	IBM EMM アプリケーションを 7.5.1 バージョンからアップグレードする場合、以下のトピックで説明されているステップを実行します。 • 104 ページの『アップグレードの前提条件』 • 111 ページの『第 10 章 バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード』 注: eMessage にはバージョン 7.5.x からバージョン 8.x 以降へのアップグレード・パスが存在しないため、eMessage レポートのためのアップグレード・パスも存在しません。
8.x および 9.x	IBM EMM アプリケーションをバージョン 8.x または 9.x からアップグレードする場合、以下のトピックで説明されているステップを実行します。 • 104 ページの『アップグレードの前提条件』 • 125 ページの『第 11 章 8.x または 9.x モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール』 eMessage では、以下のアップグレード・パスがサポートされています。 • バージョン 8.6.0.4 以降のフィックスパックからバージョン 9.1 へ • バージョン 9.0 以降のフィックスパックからバージョン 9.1 へ 注: eMessage レポートを既にカスタマイズしてある場合、8.6.0.4 以降のフィックスパックを使用するのではなく 9.0 にアップグレードすると、レポートのカスタマイズ作業は少なく済みます。 eMessage を Oracle または IBM DB2 で使用している場合、具体化されたビューを使用する必要があります。

アップグレードの前提条件

IBM EMM レポートのバージョンをアップグレードするには、その前に、特定のタスクを実行する必要があります。

ReportsSystem 役割を持つユーザー

バージョン 7.x からアップグレードする場合、レポートに関して作業するために適切な権限を持つ IBM EMM ユーザーを構成する必要があります。8.x からアップグレードする場合、このユーザーはおそらく既に存在しています。

レポート作成を行うこのユーザーを構成する必要がある場合には、11 ページの『ReportsSystem 役割を持つユーザーの構成』の説明を参照してください。

IBM Cognos BI のアップグレード要件

ご使用の IBM Cognos BI のバージョンを、インストールしているレポート・パッケージでサポートされているバージョンにアップグレードする必要があります。サポートされる IBM Cognos BI バージョンについては、「*Environment Support Matrix*」を参照してください。

このタスクのヘルプについては、IBM Cognos BI の資料を参照してください。

Cognos をアップグレードした後、このガイドのインストールに関する章で説明されている Cognos 構成タスクを実行してください。

Cognos モデルおよびレポート・アーカイブのバックアップ要件

IBM Cognos BI システムで、以下のタスクを実行します。

- モデル・サブディレクトリーをバックアップします。つまり、IBM EMM レポート・パッケージ・インストーラーによってインストールされたアプリケーション・モデルを見つけ、モデル・サブディレクトリー全体をコピーしてバックアップを作成します。
- Cognos Connection の配置仕様エクスポート機能を使用して、アプリケーションのレポート・アーカイブのバックアップを作成します。Content Store 全体をエクスポートします。
- Cognos ユーザー・インターフェースから、古いモデルおよびフォルダーを削除します。これらは、ファイル・ディレクトリー構造や Cognos Framework Manager から削除しないでください。

追加要件

ご使用の IBM EMM レポートのバージョンからアップグレードする前に、以下のタスクも実行する必要があります。

1. テーブルを削除する SQL の生成と、その SQL の製品データベースでの実行。
2. Marketing Platform でのレポート・スキーマのアップグレード。
3. Marketing Platform でのレポート・テンプレートのアップグレード。
4. eMessage および Interact の場合、ルックアップ・テーブルの更新。
5. eMessage の場合、acer_*.sql スクリプトを使用したデータベース・オブジェクトの作成。

6. eMessage の場合、ストアード・プロシージャの作成と実行。
7. 製品データベースでのビューまたはテーブルのアップグレード。
8. IBM EMM 統合コンポーネントのアップグレード。

これらのタスクについては、それぞれのセクションで詳しく説明しています。

eMessage レポートの追加要件

eMessage レポートの追加要件について理解するには、8 ページの『eMessage レポートの前提条件』を参照してください。

ビュー、具体化されたビュー、またはテーブルをドロップする SQL の生成および製品データベースでの SQL の実行

レポート SQL ジェネレーターを使用して、drop table SQL コマンドを生成し、それらを該当する製品システムのテーブル・データベースに対して実行します。レポート・スキーマをアップグレードする前に、この作業を行います。

この手順は、Campaign、eMessage、および Interact のみに適用されます。

以下の表は、Oracle、DB2、SQL Server の場合に Campaign、eMessage、Interact でオブジェクト・タイプがサポートされるかどうかを示しています。

表 13. サポートされるオブジェクト・タイプ

	Campaign	eMessage	Interact
Oracle	ビュー	具体化されたビュー	ビュー
	具体化されたビュー		具体化されたビュー
	テーブル		テーブル
DB2	ビュー	具体化されたビュー	ビュー
	具体化されたビュー		具体化されたビュー
	テーブル		テーブル
SQL Server	ビュー	ビュー	ビュー
	テーブル		テーブル

以下のタスクを実行して、SQL を生成し、実行します。

1. IBM EMM に platform_admin ユーザー (または「レポート SQL ジェネレーター」メニュー項目へのアクセス権限を持つ別のユーザー) としてログインします。
2. 前のステップで作成した JDBC データ・ソースにデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合のみ、以下を行います。
 - a. 「設定 | 構成 | レポート | スキーマ」＜製品名＞」を選択します。
 - b. 前のステップで JDBC 接続に付けた JNDI 名に対応する JNDI プロパティのデフォルト値を変更します。
3. 「設定 | レポート SQL ジェネレーター」を選択します。

4. 「製品」フィールドで、適切な IBM アプリケーションを選択します。
5. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。
6. 「データベース・タイプ」を選択します。
7. 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション (ビュー、具体化されたビュー、またはテーブル) を選択します。

「データベース・タイプ」が Microsoft SQL Server に設定されている場合、具体化されたビューというオプションはありません。

JNDI データ・ソース名が正しくないか、構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成する SQL スクリプトを検証できません。

8. 「Drop 文を生成しますか?」が「はい」に設定されていることを確認します。
9. オプション: 生成される SQL を調べるには、「生成」をクリックします。SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにそのスクリプトが表示されます。
10. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定を求めるプロンプトが出されます。「スキーマ」フィールドから単一のレポート・スキーマを選択した場合、スクリプト名はスキーマの名前と一致します (例えば eMessage_Mailing_Performance.sql)。複数のレポート・スキーマを選択すると、スクリプト名には製品名のみ (Campaign.sql など) が使用されます。名前の詳細なリストについては、28 ページの『データソース別の SQL スクリプト』を参照してください。

11. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保存」をクリックします。
12. 生成する必要があるテーブル削除スクリプトごとにステップ 5 から 12 を繰り返します。

注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

スクリプトの検証を無効化することが必要な場合があります。例えば、おそらく Marketing Platform は IBM アプリケーション・データベースに接続できないものの、とにかくスクリプトは生成する場合などです。検証を無効にするには、データ・ソース・フィールドからデータ・ソース名を消去します (上記ステップ 3 を参照)。スクリプトを生成する際に、データ・ソースに接続できないという警告を SQL ジェネレーターが表示しますが、それでも SQL スクリプトは生成されます。

13. テーブル削除 SQL を、製品のシステム・テーブル・データベースで実行します。この作業を、レポートをアップグレードしている製品ごとに繰り返します。

Marketing Platform でのレポート・スキーマのアップグレード

IBM EMM マスター・インストーラーをレポート・バック・インストーラーと共に実行し、レポート・スキーマおよびレポート統合構成プロパティをアップグレードする必要があります。

Marketing Platform がインストールされているコンピューター上で IBM EMM マスター・インストーラーと、該当するレポート・パッケージ・インストーラーを実行し、インストール・オプションとして「**IBM EMM 製品 レポート・スキーマ**」を選択します。

レポート・スキーマをアップグレードした後で、以下のタスクを実行してアップグレードを検証できます。

1. IBM EMM システムに **platform_admin** ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」>「構成」を選択します。
3. 「レポート」>「スキーマ」>「<製品名>」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成カテゴリーがアップグレードされなかった場合、Marketing Platform でレポートはまだアップグレードされていません。

注: Marketing Operations をアップグレードする場合、このステップをスキップしてください (Marketing Operations にはレポート・スキーマがありません)。

4. 「レポート」>「統合」を展開します。

スキーマ構成カテゴリーがアップグレードされていて、使用している現行レポート・インストールが 8.6.0 より前である場合、Cognos 10 構成の新しいカテゴリーが表示されます。「**Cognos 8**」カテゴリーは無効になっていますが、Cognos 10 の構成プロパティの設定を支援するために、参照の目的で保持されています。レポートのアップグレードを完全に構成およびテストした後、「**カテゴリーの削除**」リンクを使用して、Cognos 8 構成カテゴリーを削除してください。

Marketing Platform でのレポート・テンプレートのアップグレード

レポートをアップグレードするには、その前に、Marketing Platform でレポート・テンプレートをアップグレードする必要があります。Marketing Operations のレポートをアップグレードしている場合、Marketing Operations にはレポート・スキーマがないので、レポート・テンプレートのアップグレードは行わないでください。

レポート・バック・インストーラーを実行した後で、以下のタスクを実行します。

1. `Unica\製品ReportsPack\schema` ディレクトリーを参照して、`templates_sql_load.sql` スクリプトを見つけ、そのスクリプトを Marketing Platform システム・テーブル・データベースで実行します。
2. Marketing Platform が実行中であることを確認します。
3. 管理者特権を持つユーザーとして IBM EMM にログインします。
4. 「設定」>「ユーザー」の下で、自分に「**ReportsSystem**」役割を付与します。その後、ログアウトして、再びログインします。
5. **Campaign** のみ。

新しいキャンペーン属性を追加するためのデータベース・スキーマは、Campaign 8.0.0 で変更されています。そのため、レポート・スキーマのカスタマイズに追加のキャンペーン属性が含まれている場合、以下のステップを実行します。

- a. データベース管理ツールを使用して、UA_CampAttribute テーブルの各属性の AttributeID 列の値を判別します。
- b. IBM EMM で、「設定」>「構成」の順に選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・カスタム属性」>「カラム」>「キャンペーン」の順に展開します。
- c. このインストールで追加された既存のカスタム・キャンペーン属性を削除しますが、標準のカスタム・キャンペーン属性は削除しないでください。（標準カスタム・キャンペーン属性は、インストーラーによってアップグレードされたものです。）
- d. 削除した属性を再作成します。「属性 ID」フィールドに属性の ID を入力します。

IBM EMM 統合コンポーネントのアップグレード

Cognos Content Manager がインストールされているコンピューターで、インストーラーを実行して、IBM EMM 統合コンポーネントをアップグレードする必要があります。

以下のステップを実行して、IBM EMM 統合コンポーネントをアップグレードします。

1. Cognos Content Manager が実行されている IBM Cognos BI システムで、次の IBM EMM インストーラーを単一のディレクトリーにダウンロードまたはコピーします。
 - IBM EMM マスター・インストーラー
 - Marketing Platform インストーラー
 - IBM EMM アプリケーション・レポート・パッケージ・インストーラー
2. IBM EMM マスター・インストーラーを実行します。（Marketing Platform およびレポート・パッケージのサブインストーラーが順番に起動されます。）
3. 最初の「製品」ウィンドウで、Marketing Platform およびレポート・パッケージの両方のオプションが選択されていることを確認します。
4. 「Platform データベース接続」ウィンドウで、Marketing Platform システム・テーブルに接続するために必要な情報を指定します。
5. 「Platform インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)」ウィンドウが表示されたら、「Reports for IBM Cognos」オプションを選択し、他のオプションをクリアします。
6. Marketing Platform インストーラーで、JDBC ドライバーへのパスの入力を求めるプロンプトが出されたら、レポートの初回インストール時に Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの絶対パスを入力してください。

詳しくは、20 ページの『Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』を参照してください。

- Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストール済み環境の場所の入力を求めるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール済み環境の最上位ディレクトリーを入力するか、参照します。

このフィールドで提供されるデフォルト値は、ご使用の IBM Cognos システムの実際のファイル構造に基づかない静的な値です。

- レポート・パッケージ・インストーラーによってそのインストール・オプションが引き継がれて表示されたら、「**IBM EMM [製品] 用の IBM Cognos パッケージ**」オプションを選択し、レポート・スキーマのオプションをクリアします。このインストール・オプションにより、レポート・アーカイブが Cognos コンピューターにコピーされます。このアーカイブは、後ほど手動でインポートします。
- インストーラーが終了したとき、Marketing Platform データベースの JDBC ドライバーを IBM Cognos の `webapps\p2pd\WEB-INF\AAA\lib` ディレクトリーにコピーします。

ドライバーは必ずコピーしてください。ドライバーのカット・アンド・ペーストは行わないでください。

eMessage および Interact のルックアップ・テーブルの更新

eMessage および Interact のレポートを使用している場合、ルックアップ・テーブルを更新する必要があります。データベース・クライアントを使用して、システム・テーブル・データベースに対して特定のアップグレード・スクリプトを実行する必要があります。

以下のいずれかのステップを実行します。

- eMessage バージョン 8.6.0.4 または 9.0 からアップグレードしている場合は、以下のステップを実行します。
 - レポート・バック・インストール済み環境の `ReportsPackCampaign\tools` ディレクトリーで、`uare_lookup_create_DB_type.sql` スクリプト（ここで、`DB_type` は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ）を見つけます。
- Interact に対して、以下のステップを実行します。
 - レポート・バック・インストール済み環境の `ReportsPackInteract\tools` ディレクトリーで、`uari_lookup_create_DB_type.sql` スクリプト（ここで、`DB_type` は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ）を見つけます。
 - Interact 設計時データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを実行します。

製品データベースでのビューまたはテーブルのアップグレード

レポートのバージョンを正常にアップグレードするには、更新 SQL を生成し、製品データベースでビューまたはテーブルをアップグレードする必要があります。

注: eMessage の場合、このセクションはスキップしてください。

以下のタスクを実行して、製品データベースでビューまたはテーブルをアップグレードします。

1. 26 ページの『ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』の説明に従って、更新 SQL を生成します。
2. 以前に生成した SQL スクリプトを製品システム・テーブル・データベースに対して実行します。
3. Campaign および Interact では、レポート・パックに付属している新しい SQL および SQL スクリプトを使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成します。

第 10 章 バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード

レポートをバージョン 7.5.1 からアップグレードするには、その前に、すべてのアップグレード前提条件を満たしていることを確認してください。IBM EMM レポート作成機能は、Affinium Reports 7.5.x の場合のように、別個の Web アプリケーションで提供されることはなくなりました。

重要: eMessage レポートをバージョン 7.5.1 から 9.1 にアップグレードすることはできません。eMessage では、最初にバージョン 8.6.0.4 のレポートをインストールしてから、バージョン 9.1 にアップグレードする必要があります。

レポート・パッケージから IBM Cognos レポート・アーカイブをインストールする際には、Cognos データ・モードに対するカスタマイズを保持するアップグレード・スクリプトを実行します。ただし、7.5.1 レポートを新しいレポートで置き換える必要があります。古いレポートのほとんどは、アップグレードされた Cognos モデルと互換性があり、新しいレポート・パッケージには新規および拡張レポートが含まれています。また、ほとんどのパッケージにはダッシュボード・レポートも含まれています。新規または拡張レポートを取得する唯一の方法は新しいレポート・アーカイブをインストールすることで、これにより既存のレポートは上書きされます。

そのため、レポートをアップグレードする方法として、次のオプションがあります。

- 古いレポートをバックアップし、新規レポートをインストールした後、古いレポートを参照用として使用しながらカスタマイズを再作成します。
- 古いレポートをバックアップし、新規レポートをインストールします。新規レポートを古いレポートと比較し、カスタマイズを調べます。カスタマイズされたレポートが新規データ・モデルで適切に機能することが確実な場合、古いカスタマイズされたレポートをレポート・フォルダーに再びコピーします。

注: 7.5.1 バージョンの「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートと「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートは、手作業による修正がなければまったく機能しません。さらに、古いレポートの新規バージョンの多くに、拡張およびマイナー・バグ修正が含まれています。変更を入手するには、レポートの新規バージョンを使用する必要があります。

レポートをバージョン 7.5.1 からアップグレードするには、以下のステップの実行が必要です。

1. 7.5.1 モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール。
2. 古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートの更新。
3. 古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートの更新。

それぞれのステップについては、別個のセクションで説明しています。

7.5.1 モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール

7.5.1 レポートをアップグレードするために最初に実行する必要のあるステップは、7.5.1 モデルのアップグレードと新しいレポートのインストールです。

新しいレポート・パッケージには、新しいレポート、変更されたレポート、およびダッシュボード・レポートがほとんどの IBM EMM アプリケーション用に提供されています。モデルをアップグレードすることはできますが、7.5.1 レポートをアップグレードすることはできません。新しいレポートをインストールしてから、7.5.1 に対して行ったレポートのカスタマイズを再作成するか、古いレポートをフォルダーにコピーする必要があります。

以下のステップを実行して、7.5.1 モデルをアップグレードし、新しいレポートをインストールします。

1. モデルおよび以前のレポートをバックアップしたことを確認してください。
2. IBM EMM 製品インストール済み環境の下の *ProductNameReportsPack\CognosN* ディレクトリーを参照します。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

3. レポート・アーカイブ .zip ファイル (例えば *Unica Reports for Campaign.zip*) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

デフォルトの場所は IBM EMM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレクトリーで、Cognos Content Manager と一緒にインストールされた Cognos Configuration ツールで指定されます。

例: *cognosN\deployment*。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

分散 IBM Cognos 環境では、これは Content Manager を実行しているシステム上にあります。

4. Reports Pack インストール・ディレクトリーと Framework Manager が異なるコンピューター上にある場合、Reports Pack インストール・ディレクトリーの下で *cognosN\model* ディレクトリーを見つけて、それを Framework Manager がインストールされているコンピューター上のディレクトリーにコピーします。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

5. IBM EMM 製品をデフォルト・ディレクトリー (Windows の場合は *C:\Unica*) にインストールしなかった場合にのみ、このステップの説明にしたがって、いくつかのアップグレード・スクリプトを更新する必要があります。

ここでリストされているスクリプトを更新する必要があります。更新する必要のあるスクリプトは、以下に示すように、レポート・パッケージによって異なります。

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の *製品名ReportsPack¥cognosN¥製品名Model* ディレクトリーにあります。

パス内の N は、Cognos のバージョン番号を表します。

Campaign

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Interact

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Leads

- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Marketing Operations

- upgrade75to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

各スクリプトで、ローカライズされた言語のバージョンのモデルが格納されているディレクトリーを指しているファイル・パスを編集して、製品のインストール済み環境の場所を反映するようにします。ユーザーが必要とするすべての言語について、この変更を行ってください。以下に例を示します。

インストール・ディレクトリー

```
¥ReportsPackCampaign¥cognos/N¥CampaignModel¥  
translations¥L¥translations.txt
```

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

パス内の *L* は、以下の言語標識のいずれかを表します。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- ru
- zh

6. Cognos Connection を開きます。
7. 「**Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)**」 > 「設定」 > 「コンテンツの管理」の順に選択します。
8. ツールバーの「**インポートの新規作成**」ボタン  をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。
9. Cognos Framework Manager を開いて、古いレポートに対応するプロジェクトを選択します。
10. 「プロジェクト」 > 「スクリプトの実行」を選択します。
11. 新しいバージョンから古いレポートに対して以下のスクリプトを実行します。

ここでリストされているスクリプトを実行する必要があります。実行する必要のあるスクリプトは、以下に示すように、レポート・パッケージによって異なります。

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の **製品名 ReportsPack¥cognos/N¥製品名Model** ディレクトリーにあります。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

Campaign

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade75to751.xml
- upgrade751to80.xml
- upgrade80to81.xml

- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Interact

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade75to751.xml
- upgrade751to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Leads

- upgrade75to80.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Marketing Operations

- upgrade75to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)
- upgrade90to91.xml

- upgrade91to911.xml

12. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
13. レポートを実行して、正しく機能することを確認します。
14. 7.5.1 レポートをカスタマイズしていた場合には、それらのカスタマイズを再作成します。

または、アップグレード後のモデルで以前のレポートが正しく機能することを確認できる場合には、以前のレポートを元の場所にコピーします。

新しいデータ・モデルで機能するよう古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートおよび古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを修正する方法については、このセクションの残りの手順を進めていくと情報が示されます。

15. 複数パーティション用のレポートがインストールされている場合、複数パーティションの構成方法を説明している章の指示に従って、追加のパーティションのレポート・パッケージを構成します。
16. オプション: 新しい認証モード「ユーザーごとの認証」については、56 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』の情報を参照してください。

古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートの更新

Campaign モデルを 7.5.1 から 8.x にアップグレードした後、古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートは正しく機能しません。古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートを使用する場合、それらを手動で更新する必要があります。

以下のレポートを、手動でアップグレードおよび修正する必要があります。

- 「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポート
- 単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポート

「セル別のパフォーマンス」クロスオブジェクト・レポートの修正

レポート・バージョン 7.5.1 を手動でアップグレードするには、レポートが新しいデータ・モデルで機能できるようにするため、クロス・オブジェクトの「セル別のパフォーマンス」レポートを手動でアップグレードおよび修正する必要があります。

以下のレポートを修正する必要があります。

- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー
- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益を含む)
- セルおよびイニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー

以下のステップを実行して、レポートを修正します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。

2. ツールバーのロック・アイコンをクリックして、レポートをロック解除します。
3. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
4. 3 つのレポートすべてについて、次の表の情報に従って照会項目を再マップします。

表 14. 照会項目のマッピング

照会項目	マッピング
提供されたオファー数	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Number of Offers Given]
レスポンス・トランザクション	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Response Transactions]
ユニーク受信者	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients]
ユニーク・レスポnder	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders]
ユニーク受信者コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients Control Group]
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders Control Group]

5. 収益を含むレポートの場合、以下のように「総収益」項目を再マップします。

[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Gross Revenue]

6. 「レスポnder率コントロール・グループ」の式を更新し、以下のようにします。

```
IF(((Unique Responders Control Group)/([Unique Recipients Control Group]
* 1.00)) is missing)
THEN (0)
ELSE(((Unique Responders Control Group)/([Unique Recipients Control Group]
* 1.00)))
```

7. 「詳細フィルター」リストから最初の詳細フィルターを選択し、以下のように編集します。

[Campaign Performance Summary] . [Campaign] . [Campaign ID] in
(?CampaignIds?)

8. 「詳細フィルター」リストから、2 番目の次のような詳細フィルターを削除します。

[Campaign Performance Summary].[Responder Rate Control Group at Cell Level].[Campaign ID] in (?CampaignIds?)

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下のステップを行います。
 - a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - b. 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。

- d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。

11. レポートを保存して実行します。

オブジェクト固有の「セル別のパフォーマンス」レポートの修正

レポート・バージョン 7.5.1 を手動でアップグレードするには、レポートが新しいデータ・モデルで機能できるようにするため、オブジェクト固有の「セル別のパフォーマンス」レポートを手動でアップグレードおよび修正する必要があります。

以下のレポートを修正する必要があります。

- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー
- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益を含む)

以下のステップを実行して、レポートを修正します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. ツールバーのロック・アイコンをクリックして、レポートをロック解除します。
3. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
4. 両方のレポートについて、次の表の情報に従って照会項目を再マップします。

表 15. 照会項目のマッピング

照会項目	マッピング
提供されたオファー数	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Number of Offers Given]
レスポンス・トランザクション	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Response Transactions]
ユニーク受信者	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients]
ユニーク・レスポnder	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders]
ユニーク受信者コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients Control Group]
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders Control Group]

5. 収益を含むレポートの場合、以下のように「総収益」照会項目を再マップします。

[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Gross Revenue]

6. 「レスポnder率コントロール・グループ」の式を更新し、以下のようにします。

```
IF(((Unique Responders Control Group)/([Unique Recipients Control Group]
* 1.00)) is missing)
THEN (0)
ELSE(((Unique Responders Control Group)/([Unique Recipients Control Group]
* 1.00)))
```

7. 「詳細フィルター」リストから最初の詳細フィルターを選択し、以下のように編集します。

```
[Campaign Performance Summary].[Campaign].[Campaign ID] in  
(?CampaignIds?)
```

8. 2 番目の、次のような詳細フィルターを削除します。

```
[Campaign Performance Summary].[Responder Rate Control Group at Cell  
Level].[Campaign ID] in (?CampaignIds?)
```

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下のステップを行います。
 - a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - b. 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
11. レポートを保存して実行します。

古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートの更新

Campaign モデルを 7.5.1 から 8.x にアップグレードした後、古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートは正しく機能しません。古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを使用する場合、それらを手動で更新する必要があります。

以下のレポートを、アップグレードおよび修正する必要があります。

- 「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポート
- 単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポート

「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポートの修正

レポート・バージョン 7.5.1 を手動でアップグレードするには、レポートが新しいデータ・モデルで機能できるようにするため、「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポートを手動でアップグレードおよび修正する必要があります。

以下のタスクを実行して、レポートを修正します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
3. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

表 16. 「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数	なし	自動
レスポンス・トランザクション	なし	自動
ユニーク受信者	なし	自動
ユニーク・レスポnder	なし	自動
未コンタクト・レスポnder	なし	自動
満了後のレスポンス	なし	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	なし	自動

4. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

表 17. 「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率	自動	自動
レスポnder率	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ	自動	自動
次におけるベスト・オファーの上昇	自動	自動
最低オファーにおける上昇	自動	自動
上昇コントロール・グループ	自動	自動

5. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

表 18. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数 - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder - オファー	なし	自動
未コンタクト・レスポnder - オファー	なし	自動
満了後のレスポンス - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ - オファー	なし	自動

6. 「レスポンス・トランザクション - オファー」照会項目の式を、以下のものに変更します。

[Offer Performance Summary].[Offer Response History Summary].
[Response Transactions] / count([Campaign Name] for [Offer ID])

7. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

表 19. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス・トランザクション - オファー	合計	自動
ユニーク受信者 - オファー	合計	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ - オファー	合計	自動

8. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

表 20. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率 - オファー	自動	自動
レスポnder率 - オファー	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ - オファー	自動	自動
上昇コントロール・グループ - オファー	自動	自動

9. レポート合計レベルのカウントに関して、「合計レスポンス・トランザクション (Total Response Transactions)」の式を次のものに変更します。

total ([Response Transactions-Offer])

10. また、「合計レスポンス・トランザクション (Total Response Transactions)」に関して、「集計関数」が「自動」に設定され、「ロールアップ集計関数」が「自動」に設定されていることを確認してください。
11. レポートをロックします。
12. Report Authoring で、レポートごとに以下のステップを行います。
- 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
13. レポートを保存して実行します。

単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートの修正

レポート・バージョン 7.5.1 を手動でアップグレードするには、レポートが新しいデータ・モデルで機能できるようにするため、単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを手動でアップグレードおよび修正する必要があります。

以下のステップを実行して、レポートを修正します。

- IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。

2. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
3. 「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目について、次の表で示されているように集計を構成します。

表 21. 「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数	なし	自動
レスポンス・トランザクション	なし	自動
ユニーク受信者	なし	自動
ユニーク・レスポnder	なし	自動
未コンタクト・レスポnder	なし	自動
満了後のレスポンス	なし	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	なし	自動

4. 「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目について、次の表で示されているように集計を構成します。

表 22. 「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率	自動	自動
レスポnder率	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ	自動	自動
次におけるベスト・オファーの上昇	自動	自動
最低オファーにおける上昇	自動	自動
上昇コントロール・グループ	自動	自動

5. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目について、次の表で示されているように集計を構成します。

表 23. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数 - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder - オファー	なし	自動
未コンタクト・レスポnder - オファー	なし	自動
満了後のレスポンス - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ - オファー	なし	自動

6. 「レスポンス・トランザクション - オファー」照会項目の式を、以下のものに変更します。

[Offer Performance Summary].[Offer Response History Summary].
[Response Transactions] / count([Campaign Name] for [Offer ID])

7. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目について、次の表で示されているように集計を構成します。

表 24. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス・トランザクション - オファー	合計	自動
ユニーク受信者 - オファー	合計	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ - オファー	合計	自動

8. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目について、次の表で示されているように集計を構成します。

表 25. 「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目の集計関数：

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率 - オファー	自動	自動
レスポnder率 - オファー	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ - オファー	自動	自動
上昇コントロール・グループ - オファー	自動	自動

9. レポートをロックします。

10. Report Authoring で、レポートごとに以下の作業を行います。

- 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
- 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
- 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
- レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。

11. レポートを保存して実行します。

第 11 章 8.x または 9.x モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール

レポートをアップグレードするために実行する必要がある最初のステップは、8.x または 9.x モデルのアップグレードと新しいレポートのインストールです。

以下のステップを実行して、8.x または 9.x モデルをアップグレードし、新しいレポートをインストールします。

1. Unica~~¥~~製品名ReportsPack~~¥~~CognosN ディレクトリーを参照します。N は Cognos インストール済み環境のバージョンです。
2. レポート・アーカイブ .zip ファイル (例えば Unica Reports for Campaign.zip) を Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレクトリーであり、このディレクトリーは Cognos Content Manager と一緒にインストールされた Cognos Configuration ツールで指定されます (例: cognos\deployment)。

分散 IBM Cognos 環境では、このディレクトリーは Content Manager を実行しているシステム上にあります。

3. Campaign モデルのアップグレード前のバージョンを Framework Manager がインストールされているサーバー上のディレクトリーにコピーします。Reports Pack インストール・ディレクトリーと Framework Manager が異なるサーバー上にある場合、Reports Pack インストール・ディレクトリーの下でアップグレード後の cognos10~~¥~~model ディレクトリーを見つけて、該当する upgrade.xml ファイルを Framework Manager がインストールされているサーバー上のディレクトリーにコピーします。また、Framework Manager がインストールされているサーバー上のディレクトリーにコピーした古いモデルに、アップグレード後のモデルの translation フォルダをコピーします。置換を求めるプロンプトが出されたら、「はい」をクリックします。
4. Reports Pack インストール・ディレクトリーと Framework Manager が異なるサーバー上にある場合、Reports Pack インストール・ディレクトリーの下で cognos10~~¥~~model ディレクトリーを見つけ、該当する upgrade.xml ファイルを Framework Manager がインストールされているサーバーにコピーします。
5. Framework Manager がインストールされているサーバー上のディレクトリーにコピーした古いモデルに、アップグレード後の Campaign モデルの translation フォルダをコピーします。置換を求めるプロンプトが表示されたら、「はい」をクリックします。
6. IBM EMM 製品を Windows のデフォルトの C:\Unica ディレクトリーにインストールしなかった場合は、アップグレード・スクリプトを更新する必要があります。

各スクリプトで、ローカライズされた言語のバージョンのモデルが格納されているディレクトリーを指しているファイル・パスを編集して、製品のインストール

ール済み環境の場所を反映するようにします。ユーザーにとって必要な言語ごとに、各スクリプト内のファイル・パスを変更します。以下に例を示します。

インストール・ディレクトリー

```
¥ReportsPackCampaign¥cognos/¥CampaignModel¥  
translations¥L¥translations.txt
```

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

パス内の *L* は、以下の言語標識のいずれかを表します。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- ru
- zh

以下のアップグレード・スクリプトを編集します。

Campaign

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

eMessage

- upgrade86to90.xml
- upgrade8604to91.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade9102to911.xml (バージョン 9.1.0.x.0.0 (x >= 2) からアップグレードしようとしており、9.1.0.2 Reports Feature Pack 1 を適用していない場合)
- upgrade910201to911.xml (バージョン 9.1.0.x.0.1 (x >= 2) からアップグレードしようとしており、9.1.0.2 Reports Feature Pack 1 を適用している場合)

Interact

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Leads

- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Marketing Operations

- upgrade75to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

7. Cognos Connection を開きます。

8. 「Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)」 > 「設定」 > 「コンテンツの管理」の順に選択します。

9. ツールバーの「インポートの新規作成」ボタン  をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。

10. Cognos Framework Manager を開いて、アップグレード元のバージョンのプロジェクトを開きます。

11. 「プロジェクト」 > 「スクリプトの実行」を選択します。

12. ご使用の製品の新しいバージョンから以下のスクリプトを実行します。

注: アップグレード元である 8.x または 9.x バージョンについて、以下の点を検討する必要があります。

- それより前のバージョンを参照するスクリプトは、実行する必要ありません。例えば、バージョン 8.5.0 から Campaign レポートをアップグレードする場合、upgrade80to81.xml スクリプトと upgrade81to85.xml スクリプトは実行する必要がありません。
- 8.6 以外のどのバージョンからのアップグレードでも、preUpgrade_86_fromanyversion.xml スクリプトを実行する必要があります。
- レポートをソース・バージョンから宛先バージョンにアップグレードできません。例えば、レポートをバージョン 9.0.0 からバージョン 9.1.1 にアップグレードするには、まずバージョン 9.0.0 からバージョン 9.1 にアップグレードし、次にバージョン 9.1 からバージョン 9.1.1 にアップグレードする必要があります。
- eMessage レポートの場合のみ、バージョン 8.6.0.4 以降から 9.1 に直接アップグレードする必要があります。

Campaign

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

eMessage

- upgrade86to90.xml
- upgrade8604to91.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade9102to911.xml (バージョン 9.1.0.x.0.0 (x >= 2) からアップグレードしようとしており、Reports 9.1.0 Feature Pack 1 を適用していない場合)
- upgrade910201to911.xml (バージョン 9.1.0.x.0.1 (x >= 2) からアップグレードしようとしており、Reports 9.1.0 Feature Pack 1 を適用している場合)

Interact

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Leads

- upgrade81to85.xml

- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

Marketing Operations

- upgrade75to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の製品名 ReportsPack¥cognosN¥製品名 Model ディレクトリー (N は Cognos のバージョン番号) 内にあります。

13. eMessage レポートをアップグレードする場合、以下のステップを実行します。

注: データベースが DB2 である場合、ステートメントの終了文字を ; (セミicolon) から ! (感嘆符) に変更します。

- a. Campaign Report Pack インストーラーのホーム ¥Cognos10¥ emessage-ddl¥DB タイプ ¥Upgrade に移動します。

- b. 以下のスクリプトを、示されている順序で実行します。

- eMessage 8.6.0.4 以降から eMessage 9.1 にアップグレードする場合:

acer_tables_upgrade_DB 名.sql 基本バージョン名を検索して、以下のスクリプトを実行します。

--8.6.0.4 Updates--

- eMessage 9.0 以降から eMessage 9.1 にアップグレードする場合:

- **acer_tables_upgrade_DB 名.sql** 基本バージョン名を検索して、以下のスクリプトを実行します。

--9.0.x Updates--

- **acer_indexes_upgrade_DB 名.sql** 基本バージョン名を検索して、以下のスクリプトを実行します。

--9.0.x Updates--

- eMessage 9.1.0.x.0.0 (x >= 0) 以降から eMessage 9.1.1 にアップグレードする場合:

acer_tables_upgrade_DB 名.sql 基本バージョン名を検索して、以下のスクリプトを実行します。

--9.1.0.x 更新 (9.1.0 Feature Pack 1 アップグレードは適用外)--

注: 9.1.0 Feature Pack 1 を適用した場合は、テーブルや索引のアップグレード・スクリプトを実行する必要はありません。

- c. *Campaign Report Pack* インストーラーのホーム¥Cognos10¥emessage-ddl¥DB タイプ に移動して、以下のスクリプトを実行します。

acer_scripts_DB 名.sql

注: **acer_scripts_DB 名.sql** スクリプトは、レポートのフレッシュ・インストールの場合だけではなくアップグレードの場合も実行する必要があります。

注: Microsoft SQL Server を使用している場合、このステップを実行する前に、8.6.0.4 バージョンのプロシージャーを除去する必要があります。

- d. Run SQL Generator を使用して、レポート・ビュー・スクリプトを生成します。Microsoft SQL Server の場合、ビューを生成します。Oracle および IBM DB2 の場合、具体化されたビューを作成します。
- e. ストアード・プロシージャーを実行およびスケジュールします。

注: レポートのパフォーマンスを適切なものにするには、ストアード・プロシージャーが定期的に実行されるようにスケジュールする必要があります。eMessage ストアード・プロシージャーについて詳しくは、38 ページの『eMessage 用のストアード・プロシージャーの実行およびスケジュールング』を参照してください。

14. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
15. すべての IBM EMM 製品の場合、以下のステップを実行します。
 - a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - b. ご使用の製品に従って、該当するレポート・パッケージを選択し、「OK」をクリックします。
 - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
16. レポートを実行して、アップグレードをテストします。

付録 A. レポート作成の構成プロパティ

IBM EMM のレポート作成の構成プロパティは、「設定」 > 「構成」 > 「レポート」にあります。

レポートを生成するために、IBM EMM Suite は、サード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーションである IBM Cognos と統合します。「統合」 > 「Cognos」プロパティを使用して、IBM Cognos システムを識別します。また、Campaign、eMessage、Interact については、レポート作成スキーマをセットアップしてカスタマイズする際に追加の構成プロパティがあります。

レポート | 統合 | Cognos [バージョン]

IBM EMM スイートは、IBM Cognos と統合してレポートを生成します。

このページには、この IBM システムで使用される URL などのパラメーターを指定するプロパティが表示されます。

統合名 (Integration Name)

説明

読み取り専用です。レポートを表示するために IBM EMM によって使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールが IBM Cognos となるように指定します。

デフォルト値

Cognos

ベンダー (Vendor)

説明

読み取り専用です。IBM Cognos が、「統合名 (Integration Name)」プロパティで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

Cognos

バージョン

説明

読み取り専用です。「統合名 (Integration Name)」プロパティによって指定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

<version>

有効 (Enabled)

説明

Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

統合クラス名 (Integration Class Name)

説明

読み取り専用です。「統合名 (Integration Name)」プロパティで指定されたアプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java クラスの完全修飾名を示します。

デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

ドメイン (Domain)

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示します。例: myCompanyDomain.com

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

1024 文字未満のストリング。

ポータル URL (Portal URL)

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例:

http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<version>/cgi-bin/cognos.cgi

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で確認できます。

デフォルト値

http://[CHANGE ME]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi

有効な値

適切な形式の URL。

ディスパッチ URL (Dispatch URL)

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例:

`http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch`

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch`

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

有効な値

適切な形式の URL。

認証モード (Authentication mode)

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Authentication Provider を使用するかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定します。

デフォルト値

`anonymous`

有効な値

- `anonymous`: 認証が無効であることを意味します。
- `authenticated`: IBM システムと Cognos システムとの間の通信はマシン・レベルで保護されます。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、このユーザーには「`cognos_admin`」という名前が付きます。
- `authenticatedPerUser`: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

認証名前空間 (Authentication namespace)

説明

読み取り専用です。IBM Authentication Provider の名前空間です。

デフォルト値

`Unica`

認証ユーザー名 (Authentication user name)

説明

レポート作成システム・ユーザーのログイン名を指定します。IBM アプリケーションは、Cognos が Unica Authentication Provider を使用するよう構

成されている場合に、このユーザーとして Cognos にログインします。このユーザーは、IBM EMM へのアクセス権も持っています。

この設定は、「認証モード」プロパティが **authenticated** に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

cognos_admin

認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

フォーム認証の有効化 (Enable form authentication)

説明

フォームに基づく認証を有効にするかどうかを指定します。次のいずれかの条件に当てはまる場合に、このプロパティを **True** に設定します。

- IBM EMM が IBM Cognos アプリケーションと同じドメインにインストールされていない。
- IBM EMM アプリケーションと IBM Cognos の両方が同じマシンにインストールされている場合であっても、IBM Cognos が (IBM EMM アプリケーションへのアクセスに使用されている) 完全修飾ホスト名の代わりに、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使用してアクセスされている場合。

ただし、値が **True** の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBM Cognos と IBM EMM で SSL 通信を使用するように構成されていないと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM EMM は、同じドメインにインストールする必要があります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

レポート | スキーマ (Schemas) | [製品] | [スキーマ名 (schema name)] | SQL 構成 (SQL Configuration)

SQL スクリプトは、レポート・スキーマに関するビューやテーブルを作成します。
「レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成」プロパティは、
ビューやテーブルの名前に関する情報を提供します。

テーブル/ビュー名 (Table/View Name)

説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成されることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとなります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなければなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効な値

以下の制約事項を満たすストリング。

- 18 文字より長くすることはできません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

以下の命名規則を使用する必要があります。

- 名前の先頭は「UAR」でなければなりません。
- IBM EMM アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。
- 下線文字を追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す 1 つ以上の文字コードを含めます。
- 末尾は、下線文字にします。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。以下のコードのリストを参照してください。

例えば、UARC_COPERF_DY は Campaign のオファー・パフォーマンス (Offer Performance) の日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM EMM アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードのリストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン

「レポート | スキーマ | キャンペーン」プロパティは、Campaign データベースを識別するデータ・ソースに関する情報を提供します。

入力データ・ソース (JNDI)(Input Datasource (JNDI))

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | オファー・パフォーマンス (Offer Performance)

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。デフォルトでは、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー（またはテーブル）を生成するように構成されています。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例
: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

期間のバリエーション (Over Time Variations)

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [コンタクト指標 (Contact Metric)]

レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック] プロパティは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト・メトリックを追加する場合に使用します。

列名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数 (Function)

説明

コンタクト指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名 (Input Column Name)

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ (Control Treatment Flag)

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのメトリックを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのメトリックを表します。「**制御処理フラグ (Control Treatment Flag)**」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [レスポンス指標 (Response Metric)]

レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック] プロパティは、レポートに含めるレスポンス・メトリックをキャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があります、スペースを入れることはできません。

関数 (Function)

説明

レスポンス指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名 (Input Column Name)

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ (Control Treatment Flag)

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンスを表します。「**制御処理フラグ (Control Treatment Flag)**」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | キャンペーン・パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例
: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

期間のバリエーション (Over Time Variations)

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・レスポンス内訳

キャンペーン・オファー・レスポンス内訳スキーマは、キャンペーン詳細レスポンスをレスポンス・タイプとオファー・データごとに詳細化した、レポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのレスポンス・タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のレスポンス数が提供されます。

このスキーマ

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | カラム | [レスポンス・タイプ]

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | カラム | [レスポンス・タイプ] プロパティは、レポートに含めるカスタム・レスポンス・タイプをレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「レスポンス・タイプ・コード」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

レスポンス・タイプ・コード

説明

指定したレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コードです。この値は、UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス・タイプ・コードの例を次に示します。

- EXP (調査)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実行)
- USE (使用)
- USB (アンサブスクライブ)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タイプ・コードもさらに使用できます。

制御処理フラグ (Control Treatment Flag)

説明

IBM EMM Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タイプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グル

ープのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンス・タイプを表します。「**制御処理フラグ (Control Treatment Flag)**」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | キャンペーン・オファ ーのコンタクト・ステータスによるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout)

「キャンペーン・オファのコンタクト・ステータスによるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout)」スキーマは、キャンペーン詳細コンタクトをコンタクト・ステータスのタイプとオファー・データごとに詳細化した、レポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のコンタクト数が提供されます。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例
: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファ어의コンタクト・ステータスの内訳 | カラム | [コンタクト・ステータス]

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファ어의コンタクト・ステータスの内訳 | カラム | [コンタクト・ステータス] は、レポートに含めるコンタクト・ステータスをレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「コンタクト・ステータス (Contact Status)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があります、スペースを入れることはできません。

コンタクト・ステータス・コード

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前です。この値は、UA_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト・ステータス・タイプの例を次に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプもさらに使用できます。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [キャンペーン・カスタム・カラム]

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [キャンペーン・カスタム・カラム] プロパティは、レポートに含めるカスタム・キャンペーン属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

UA_CampAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このキャンペーン属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [オファー・カスタム・カラム]

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [オファー・カスタム・カラム] プロパティは、レポートに含めるカスタム・オファー属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

追加するために使用するフォーム

列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

UA_OfferAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このオファー属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [セル・カスタム・カラム]

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [セル・カスタム・カラム] プロパティは、レポートに含めるカスタム・セル属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があります、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

「UA_CellAttribute」テーブルの属性の「AttributeID」列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

レポート | スキーマ (Schemas) | インタラクト (Interact)

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。「レポート | スキーマ | インタラクト」プロパティは、これらのデータベースのデータ・ソースの JNDI 名を指定する場合に使用します。

SQL レポート生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このページで指定するデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、こうしたデータ・ソースがなくともレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

データ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと一致しなければなりません。

Interact 設計データ・ソース (Interact Design Datasource (JNDI))

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Interact 実行時データ・ソース (Interact Runtime Datasource (JNDI))

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

Interact 学習データ・ソース (Interact Learning Datasource (JNDI))

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

レポート | スキーマ (Schemas) | インタラクト (Interact) | インタラクト・パフォーマンス (Interact Performance)

インタラクト・パフォーマンス・スキーマは、チャネル、チャネル・オファー、チャネル・セグメント、チャネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話式セル・オファー、対話式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、対話式オファー・セル、対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベルにおいて、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例
: ColumnX,ColumnY

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

期間のバリエーション (Over Time Variations)

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | eMessage

レポート | スキーマ | eMessage プロパティは、eMessage トラッキング・テーブルを示すデータ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。

eMessage トラッキング・データ・ソース (eMessage Tracking Datasource (JNDI))

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。SQL レポート生成ツールを使用して、レポート作成テーブルを作成するスクリプトを検証する場合には、このデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Campaign | partitions | partition[n] | reports

Campaign | partitions | partition[n] | reports プロパティは、さまざまなタイプのレポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の（拡張された）オファー・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析」タブにリストされるセグメント・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファーの「分析」タブにリストされるオファー・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ

上にリストされる満杯の (拡張された) セグメント・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポート仕様を格納するルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされるキャンペーン・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーション・ページの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) キャンペーン・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

「対話式チャネル」分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

付録 B. Cognos レポートの書式設定

IBM EMM アプリケーションの新しい IBM Cognos レポートには、GlobalReportStyles.css ファイルにあるスタイルを使用し、追加で手動書式設定を少し行います。

IBM Cognos レポート統合コンポーネントには、グローバル・レポート・スタイル・シート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。これにより、新規レポートのスタイルが、IBM EMM レポート・パッケージで提供されるレポートで使用されるスタイルと一致するようになります。

この付録では、さまざまな種類のレポート (リスト、チャートなど) に関する次の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- スタイル・シートでは提供できないスタイルがいくつかあるため、レポートを作成する場合、スタイルの書式設定の一部は手動で行う必要があります。

グローバル・レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、新しい IBM Cognos レポートのために使用します。新しいレポート内のスタイルは、IBM EMM レポート・パッケージで既に提供されているレポートで使用されているスタイルと一致しなければなりません。

表 26. グローバル・レポートのスタイル：

項目	CSS クラス名	スタイル
一般フォント・ファミリー	pg、pp	font-family: Arial, ...
レポート・タイトル	ta	font-size: 10pt;
ページ - ヘッダー	ph	padding-bottom:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
ページ - フッター	pf	padding-top:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
フィールド・セット・ラベル	fs	font-size:8pt;
テーブル	tb	border-collapse:collapse

表 26. グローバル・レポートのスタイル (続き):

項目	CSS クラス名	スタイル
テーブル - リスト列の タイトル・セル	lt	text-align:left; background-color:#F2F2F2; /*ライト・グレー*/ font-weight:bold; border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1px solid silver; padding-top: 13px;
テーブル - リスト列の ボディ・セル	lc、lm	border:1px solid silver;
テーブル - 外部ヘッダ ー	oh	background-color:#FFFFCC; /*ライト・イエロー*/
テーブル - リスト・フ ッター	of、os	border-top:1.5pt solid black;
クロス集計	xt	border-collapse:collapse;
クロス集計 - デフォルト 測定セル	xm	border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1.5pt solid black;
クロス集計 - メンバ ー・ラベル・セル	ml	background-color: transparent; border:1px solid silver;
クロス集計 - 外部レベ ルの合計	ol	background-color:#F7F7F7; /*オフホワイト*/
クロス集計 - スペーサ ー	xs	background-color: transparent; font-weight: bold;
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	font-size:10pt; font-weight:bold;
チャート - 軸ラベル	al	font-size:10pt;
チャート - 軸線	at	color:#939393;

表 26. グローバル・レポートのスタイル (続き):

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート - グラデーション	XML レポート仕様の 場合	XML レポート仕様のチャート・タグ (</combinationChart>) を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <fillEffects> <chartGradient direction="up" fromColor="#F2F2F2" toColor="#FFFFFF"/> </fillEffects>
チャート - チャート・パレット	XML レポート仕様の 場合	XML レポート仕様のチャート・タグ (</combinationChart>) を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <chartPalette> <chartColor value="#00508A"/> <chartColor value="#376C37"/> <chartColor value="#FB9A4D"/> <chartColor value="#B8351F"/> <chartColor value="#69817B"/> <chartColor value="#473E9A"/> <chartColor value="#5384AE"/> <chartColor value="#61C2A3"/> <chartColor value="#FF5656"/> <chartColor value="#A583BB"/> <chartColor value="#506079"/> <chartColor value="#A0A080"/> <chartColor value="#F1EDC1"/> <chartColor value="#A6A6A6"/> <chartColor value="#818181"/> </chartPalette>

レポートのページ・スタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、レポート・ページのために使用します。

表 27. レポートのページ・スタイル:

項目	スタイル
テキスト	Arial フォント

表 27. レポートのページ・スタイル (続き):

項目	スタイル
レポート・タイトル・テキスト	Arial 10 ポイント
ページ・フッター・テキスト	Arial 8 ポイント
フィールド・セット・ラベル	Arial 8 ポイント

リスト・レポート・スタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、リスト・レポートのために使用します。

以下の表に、GlobalStyleSheet.css スタイル・シートの書式設定を示します。

表 28. リスト・レポート・スタイル

項目	スタイル
セル	1 px のシルバーの境界線 (特に注記がない場合)
列ヘッダー	ライト・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テーブルの残りの部分から列ヘッダーを分離させるためのもの)
サマリー・ヘッダー行 (リスト・ヘッダー)	ライト・イエローの背景
下部の合計行	ダーク・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テーブルの残りの部分から行を分離させるためのもの)

さらに新規リスト・レポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポートと一致させてください。

- リスト・ヘッダー (リスト・フッターではなく) を使用して、集計をオブジェクト・レベルで表示します。
- リスト・ヘッダーに表示されている数字を手動で右寄せにします。リスト・フッターとは異なり、リスト・ヘッダーは、外部コンポーネントとサマリー・コンポーネントに分離されることはありません (両コンポーネントではデフォルトで右寄せのスタイルが使用されます)。そのため、リスト・ヘッダーに情報を集計する場合は、追加のステップを実行して値を右揃えにする必要があります。
- 必要に応じて、グループ列に 1.5 pt の黒の実線で境界線を追加します。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないリスト・レポートです。

Example List Report

Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
Mortgage Multi-Channel Acquisition Campaign	Low Cost Refinance DM	3,973	3,973	1,239	1,117
	Low Cost Refinance TM	2,696	2,696	875	787
Multi - Wave Campaign		18,611	18,243	312	67
Multi - Wave Campaign	15 Pct Off \$75 Direct Mail	300	300		
	Buy One Get One 50 Pct Off Direct Mail	300	300		
	Money Market Savings	18,011	18,011	312	67
Multi-Channel Category Cross-Sell		19,672	19,672	4,825	2,541
Multi-Channel Category Cross-Sell	Bath Dmail	1,552	1,552	1,013	417
	Bath Email	2,260	2,260	1,281	528
	Clearance Dmail	145	145	26	16
	Clearance Email	200	200	33	22
	Electronics Dmail	207	207	47	30
	Electronics Email	270	270	59	39
	Home Care Dmail	71	71	20	12
	Home Care Email	92	92	22	13
	Home Decor Dmail	4,190	4,190	676	446
	Home Decor Email	6,250	6,250	931	605
	Juniors Dmail	11	11		
	Juniors Email	8	8		
	Kitchen Dmail	62	62	9	6
	Kitchen Email	86	86	15	11

以下は、グローバル・スタイルを使用するリスト・レポートです。

Offer Name		Campaign Name	Offers Given	Response Transactions	Response Rate	Unique Recipients	Unique Responders	Response Rate	Not Contacted Responders	Response Offer Organization
Offer Status (0000000000)			14	14	100.00%	14	0	0.00%	0	0
Full Campaign (0000000000)			14	14	100.00%	14	0	0.00%	0	0
Offer, Full (0000000000)			14	14	100.00%	14	0	0.00%	0	0
Home_Campaign_1 (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Test Campaign (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Full Campaign (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
DM Campaign Product/Full_Campaign_Test (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Campaign Test 1 (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Offer, Full (0000000000)			14	14	100.00%	14	0	0.00%	0	0
DM Campaign Product/Full_Campaign_Test (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Full Campaign (0000000000)			14	14	100.00%	14	0	0.00%	0	0
Test Campaign (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Home_Campaign_1 (0000000000)			0	0	0.00%	0	0	0.00%	0	0
Report Total			14	14	100.00%	14	0	0.00%	0	0

グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM EMM レポート・パッケージを使用する場合は、使用するロケールに応じてリスト・レポートの日付形式が異なります。 Cognos リスト・レポートは、中程度の長さの日付スタイルを使用します。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのリスト・レポートの日付形式を示します。

表 29. グローバル化されたバージョンの Cognos リスト・レポートの日付形式

ロケール	Cognos リスト・レポートの日付形式の例
英語	Mar 18, 2014
ブラジル・ポルトガル語	18/03/2014
フランス語	18 mars 14
ドイツ語	18.03.2014

表 29. グローバル化されたバージョンの Cognos リスト・レポートの日付形式 (続き)

ロケール	Cognos リスト・レポートの日付形式の例
イタリア語	18/mar/2014
日本語	2014/03/18
韓国語	2014-03-18
ロシア語	18.03.2014
中国語 (簡体字)	2014-3-18
スペイン語	18-Mar-14

クロス集計レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、クロス集計レポートのために使用します。

クロス集計レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

表 30. クロス集計レポートのスタイル :

項目	スタイル
セル	透明背景: 1 px のシルバーの境界線
測定セル (左上)	1.5 pt の黒い線 (クロス集計の残りの部分からセルを分離するためのもの)
外部レベルの合計	グレー/オフホワイトの背景

さらに新規リスト・レポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポートと一致させてください。

- 1.5 pt の黒の境界線を使用して、測定値から集計を分離
- 1.5 の黒の境界線を使用して、論理列グループをグループ化
- 一般ガイドライン: 同じレポート内で列と行の両方を集計しないようにしてください。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないクロス集計レポートです。

Example Crosstab Report

	1 Number of Offers Given Unique Recipients		2 Number of Offers Given Unique Recipients		3 Number of Offers Given Unique Recipients		4 Number of Offers Given Unique Recipients		7 Number of Offers Given Unique Recipients		9 Number of Offers Given
	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337			
Cross Sell	19,940	19,806	24,324	24,324					9,563	9,563	
Loyalty	3,856	3,856			4,414	4,414					
Retention	150	150			12,756	12,756					23,114
Acquisition					13,339	13,339	5,000	5,000			

以下は、グローバル・スタイルを使用するクロス集計レポートで、列のグループを示すために 1.5 px の境界線が適用されています。

Example Crosstab Report

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	Total
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given
Green Self	1,283	1,283	8,441	8,441	8,404	7,107	8,337	8,337	9,883	9,883	10,011	10,011	44,444
Loyalty	12,942	12,942	24,324	24,324	4,414	4,414					2,458	2,458	52,887
Summa	150	150			12,718	12,718			22,914	22,914	384	384	18,790
Acquisitor					13,338	13,338	9,886	9,886					58,780

チャートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、チャートのために使用します。

チャートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

表 31. チャートのスタイル：

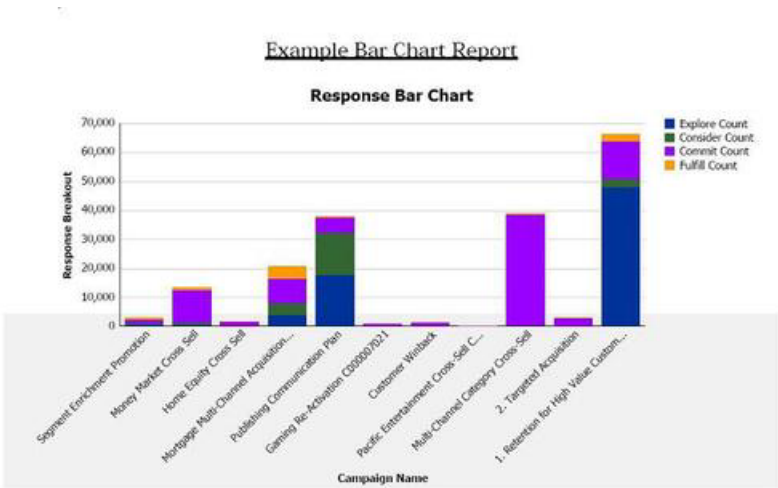
項目	スタイル
チャート	1 pt のライト・グレーの境界線
タイトルとラベル	10 ポイントの太字フォント

さらに新規チャートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のチャート・レポートに一致させてください。

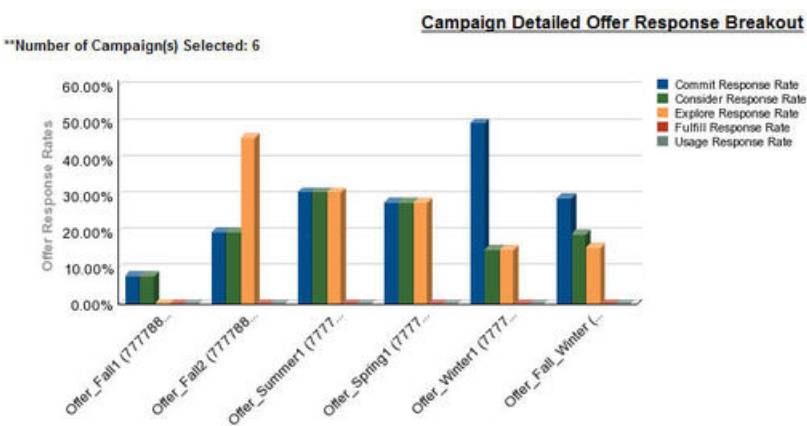
- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。
- グラデーションやカラー・パレットを使用するには、153 ページの『グローバル・レポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XML レポート仕様に貼り付けます。
- 一般ガイドライン: 返されると予想されるデータに基づいてチャート・タイプを選択します。
 - レポートが連続的なデータを取得すると保証できる場合にのみ、チャート・タイプとして折れ線グラフを使用してください。
 - 複数の系列がある場合は、積み重ね棒グラフは、非積み重ね棒グラフより効果的です。
 - ベスト・プラクティスとして、パーセント合計が 100% に等しい場合にのみ、パーセントを使用してください。値が 100% に達していない場合、円グラフではユーザーを混乱させる場合があります。
-

チャートにある系列が 2 つだけであり、Y1 軸と Y2 軸の両方を表示する場合には、ベスト・プラクティスとして、色を軸ラベルの最初の 2 つのパレットの色に一致させる必要があります。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないチャートです。



以下は、グローバル・スタイルを使用するチャートで、追加の書式設定が適用されています。



グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM EMM レポート・パッケージを使用する場合は、使用するロケールに応じて表示されるチャート・レポートの日付形式が異なります。Cognos チャート・レポートは、短い日付スタイルを使用します。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのチャート・レポートの日付形式を示します。

表 32. グローバル化されたバージョンの Cognos チャート・レポートの日付形式

ロケール	Cognos チャート・レポートの日付形式の例
英語	3/18/14
ブラジル・ポルトガル語	18/03/14

表 32. グローバル化されたバージョンの Cognos チャート・レポートの日付形式 (続き)

ロケール	Cognos チャート・レポートの日付形式の例
フランス語	18/03/14
ドイツ語	18.03.14
イタリア語	18/03/14
日本語	14/03/18
韓国語	14-03-18
ロシア語	18.03.14
中国語 (簡体字)	14-3-18
スペイン語	18/03/14

ダッシュボード・レポートのスタイル

ダッシュボード・レポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバル・スタイルを使用します。

必ず、ダッシュボード・ポートレットに正しく収まるように、以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示される形式のレポートにしてください。

表 33. ダッシュボード・レポートのスタイル:

項目	スタイル
背景色	背景色は常にグレー (16 進値 F2F2F2) に設定してください。
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを指定します。パーセントのサイズ指定を使用できない場合は、サイズを幅 323 ピクセル、高さ 175 ピクセルに設定してください。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないでください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレー (16 進値 D9D9D9) に設定します。
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

付録 C. Campaign および eMessage の Cognos レポートの書式設定

Campaign および eMessage の Cognos レポートに、追加のスタイリングを施しました。 Campaign レポートおよび eMessage レポートのルック・アンド・フィールを改善するため、グローバル・レポート・スタイルを修正し、既存のクラスのスタイル設定をオーバーライドするクラスを追加しました。

ページ・クラス newpg を、Campaign レポートおよび eMessage レポートのスタイル設定のために作成しました。ページ・スタイルに newpg クラスを使用するようにすべてのレポートを修正しました。 GlobalReportStyles.css 内の newpg 親クラスに、いくつかの子クラスを追加しました。

Campaign および eMessage の Cognos レポートのスタイルを設定する時に新しいレポート・ページを作成するには、新しいページ・クラス newpg を使用してください。

この付録では、さまざまな種類のレポート（リスト、チャートなど）に関する次の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- スタイル・シートでは提供できないスタイルがいくつかあるため、レポートを作成する場合、スタイルの書式設定の一部は手動で行う必要があります。

グローバル・レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、IBM Campaign および eMessage の Cognos レポートで使用します。

表 34. グローバル・レポートのスタイル：

項目	CSS クラス名	スタイル
ページ - ヘッダー	ph	padding-bottom:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
ページ - フッター	pf	padding-top:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;

表 34. グローバル・レポートのスタイル (続き) :

項目	CSS クラス名	スタイル
テーブル - リスト列の タイトル・セル	lt	text-align:left; background-color:#FFF; font-weight:bold; border-left:0px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1px solid silver; vertical-align: top; padding-top: 3px 5px;
テーブル - リスト列の 本文セルの内側	lci	border-top:1px solid #A0A0A0; border-bottom:1px solid #A0A0A0; background-color: white !important; text-align: right; padding: 3px 5px; vertical-align: middle;
テーブル - リスト列の ボディ・セル	lc	border-top:1px solid #ddd; border-bottom:1px solid #ddd; padding: 3px 5px; text-align: left; vertical-align: middle;
テーブル - リスト列の 本文の測定セル	lm	vertical-align: top; border:1px solid #ddd; border-right: 0; border-left: 0; padding: 3px 5px; text-align: right;
クロス集計 - 合計を示 す先頭行	tr	border-left: 2px solid black; background-color: #bebebe !important; font-weight: bold; padding: 3px 5px;

表 34. グローバル・レポートのスタイル (続き):

項目	CSS クラス名	スタイル
複雑な表の合計 - 新しいクラスを追加	ctth	color: #000000; background-color: #bebebe; border-bottom:2px solid black; padding: 3px 5px; border-left: 2px solid #bebebe;
テーブルの合計行	ttr	color: #000000; background-color: #bebebe; padding: 3px 5px; border-left: 2px solid #bebebe;
テーブルの合計行	ctr	color: #000000; font-weight: bold; border-left: 2px solid black; background-color: white; border-bottom:1px solid #a2a2a2;
テーブルの合計ヘッダー	cth	color: #000000; border-bottom:2px solid black; border-left:1.5px solid white; border-right:1.5px solid white; font-weight: 100;
リスト - 内部ヘッダー・セル	ih	border-top:1px solid #A0A0A0; border-bottom:1px solid #A0A0A0; padding: 3px 5px; vertical-align: middle;

表 34. グローバル・レポートのスタイル (続き):

項目	CSS クラス名	スタイル
リスト - 外部ヘッダー・セル	oh	font-weight: bold; vertical-align: top; background-color: #ddd; border: 1px solid #CCCCCC; border-right: 0; border-left: 0; padding: 3px 5px; word-break:keep-all;
外部ヘッダー・セル、 上側に境界線	ohl	font-weight: bold; vertical-align: top; background-color: #ddd; padding: 3px 5px; word-break:keep-all; border-top:2px solid black; border-left:1.5px solid #ddd; border-right: 5pt solid #ddd; border-style:solid; border-bottom:none;
クロス集計	xt	border-bottom:2px solid black;
クロス集計 - メンバー・ラベル・セル	ml	font-style: normal !important; color: black; font-weight: 300; height: 30px; border-left: none; border-right: none; border-bottom:1px solid #a2a2a2;
クロス集計 - メンバー・ラベル・セル	cht	vertical-align: top; background-color:transparent; padding: 3px 5px; text-align: left;

表 34. グローバル・レポートのスタイル (続き):

項目	CSS クラス名	スタイル
クロス集計 - メンバ 値セル	mv	vertical-align: top; white-space: nowrap; border: 1px solid #a2a2a2; padding: 3px 5px; text-align: right; border-left:none; border-right:none;
フィールド・セット	fs	display: -moz-inline-block; display: inline; text-align: left; font-size:8pt; margin-right: 1446px;
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	font-size:10pt; font-weight:bold;
チャート - 軸ラベル	al	font-size:10pt;
チャート - 軸タイトル	at	font-weight:bold; text-align:center; font-size:10pt; color:#939393;

表 34. グローバル・レポートのスタイル (続き):

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート - チャート・パレット	XML レポート仕様の場合	XML レポート仕様のチャート・タグ (</combinationChart>) を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <chartPalette> <chartColor value="#C7E0E9"/> <chartColor value="#A8C9E5"/> <chartColor value="#59A0BD"/> <chartColor value="#497C91"/> <chartColor value="#C9C6E4"/> <chartColor value="#B1ADD8"/> <chartColor value="#8D88C7"/> <chartColor value="#7B78A4"/> <chartColor value="#F0EEBB"/> <chartColor value="#EEEEA99"/> <chartColor value="#E8E667"/> <chartColor value="#B7B35C"/> <chartColor value="#C0D0A0"/> <chartColor value="#A8C179"/> <chartColor value="#677E13"/> <chartColor value="#768B4E"/> </chartPalette>

リスト・レポート・スタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、リスト・レポートのために使用します。

以下の表に、GlobalStyleSheet.css スタイル・シートの書式設定を示します。

表 35. リスト・レポート・スタイル:

項目	スタイル
セル	上側と下側に 1 px の非常に薄いライト・グレーの実線枠
列ヘッダー	白の背景、下側に 1.5 pt の黒線 (列ヘッダーを表の残りの部分と区切る)
サマリー・ヘッダー行 (リスト・ヘッダー)	ライト・グレーの背景

表 35. リスト・レポート・スタイル (続き):

項目	スタイル
下部の合計行	ダーク・グレーの背景

以下は、グローバル・スタイルを使用するリスト・レポートです。

Hide/Show Left Information Hide									
**Number of Offer(s) Selected: 4									
Offer Name	Campaign Name	Offers Given	Response Transactions	Response Rate	Unique Recipients	Unique Responders	Responder Rate	Not Contacted Responders	Responses After Expiration
Offer Winter (300000004)		14	18	128.57%	14	6	42.86%	0	0
	Fall Campaign (C000000022)	14	18	128.57%	14	6	42.86%	0	0
Offer Fall2 (300000024)		25	72	288.00%	11	15	136.36%	5	0
	Winter_Campaign_1 (C000000006)	6	30	500.00%	6	9	150.00%	3	0
	Test Campaign1 (C000000020)	5	18	360.00%	5	5	100.00%	0	0
	Fall Campaign (C000000022)	5	18	320.00%	5	6	120.00%	1	0
	IBM Campaign ProjectFall_Campaign_test1 (C000000018)	9	8	88.89%	5	7	140.00%	2	0
	Campaign Test 1 (C000000008)	0	0	0	0	0	0	0	0
Offer Fall2 (300000024)		27	64	237.04%	21	21	100.00%	0	0
	IBM Campaign ProjectFall_Campaign_test1 (C000000018)	3	15	500.00%	2	2	100.00%	0	0
	Fall Campaign (C000000022)	10	30	300.00%	10	10	100.00%	0	0
	Test Campaign1 (C000000020)	10	15	150.00%	10	10	100.00%	0	0
	Winter_Campaign_1 (C000000006)	4	4	100.00%	4	3	75.00%	0	0
Report Total		66	154	233.33%	-	-	-	25	0

グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM EMM レポート・パッケージを使用する場合は、使用するロケールに応じてリスト・レポートの日付形式が異なります。 Cognos リスト・レポートは、中程度の長さの日付スタイルを使用します。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのリスト・レポートの日付形式を示します。

表 36. グローバル化されたバージョンの Cognos リスト・レポートの日付形式

ロケール	Cognos リスト・レポートの日付形式の例
英語	Mar 18, 2014
ブラジル・ポルトガル語	18/03/2014
フランス語	18 mars 14
ドイツ語	18.03.2014
イタリア語	18/mar/2014
日本語	2014/03/18
韓国語	2014-03-18
ロシア語	18.03.2014
中国語 (簡体字)	2014-3-18
スペイン語	18-Mar-14

クロス集計レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、クロス集計レポートのために使用します。

クロス集計レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

表 37. クロス集計レポートのスタイル：

項目	スタイル
セル	白の背景、上側と下側に 1 px の中程度のライト・グレーの境界線
測定セル (左上)	下側に 1px のライト・グレーの境界線
複雑なテーブル行 (ctr)	左側に 2px の黒の実線枠、太字フォント
複雑なテーブル合計 (ctt)	グレーの背景、左側に 2px の黒の実線枠
複雑なテーブル合計 (ctth)	グレーの背景、下側に 2px の黒の実線枠
テーブルの合計行 (ttr)	グレーの背景

以下は、グローバル・スタイルを使用するクロス集計レポートです。

Example Crosstab Report

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	Total(Month)	
	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown	Number of Offers Shown	Unique Requests of Offers Shown
Green Sat	1,263	1,263	8,541	8,537	8,484	7,107	8,337	8,337			10,811	10,543	884	884
Loyalty	18,940	18,898	24,324	24,324	4,414	4,414		9,563	9,563				61,807	61,803
Retention	3,898	3,898									2,458	2,458	16,728	16,728
Acquisition	152	152			12,750	12,750		25,114	25,114				36,826	36,826
			13,338	13,338	9,895	9,895				384	384		18,793	18,793

チャートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれているスタイルを、チャートのために使用します。

チャートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

表 38. チャートのスタイル：

項目	スタイル
チャート	1 pt のライト・グレーの境界線
タイトルとラベル	10 ポイントの太字フォント

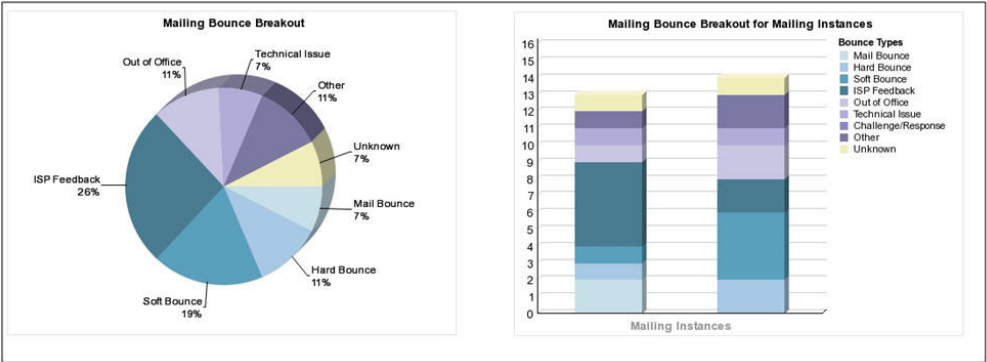
さらに新規チャートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のチャート・レポートに一致させてください。

- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。

- グラデーションやカラー・パレットを使用するには、163 ページの『グローバル・レポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XML レポート仕様に貼り付けます。
-

チャートにある系列が 2 つだけであり、Y1 軸と Y2 軸の両方を表示する場合には、ベスト・プラクティスとして、色を軸ラベルの最初の 2 つのパレットの色に一致させる必要があります。

以下は、グローバル・スタイルを使用するチャートで、追加の書式設定が適用されています。



グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM EMM レポート・パッケージを使用する場合は、使用するロケールに応じてチャート・レポートの日付形式が異なります。Cognos チャート・レポートは、短い日付スタイルを使用します。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのチャート・レポートの日付形式を示します。

表 39. グローバル化されたバージョンの Cognos チャート・レポートの日付形式

ロケール	Cognos チャート・レポートの日付形式の例
英語	3/18/14
ブラジル・ポルトガル語	18/03/14
フランス語	18/03/14
ドイツ語	18.03.14
イタリア語	18/03/14
日本語	14/03/18
韓国語	14-03-18
ロシア語	18.03.14
中国語 (簡体字)	14-3-18
スペイン語	18/03/14

ダッシュボード・レポートのスタイル

ダッシュボード・レポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバル・スタイルを使用します。

必ず、ダッシュボード・ポートレットに正しく収まるように、以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示される形式のレポートにしてください。

表 40. ダッシュボード・レポートのスタイル：

項目	スタイル
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを指定します。パーセントのサイズ指定を使用できない場合は、サイズを幅 323 ピクセル、高さ 175 ピクセルに設定してください。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないでください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレー (16 進値 D9D9D9) に設定します。
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

付録 D. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ

Campaign レポート・パッケージに含まれるレポート・スキーマをカスタマイズするために、コンタクト、レスポンス・メトリック、属性、またはレスポンス・タイプを追加できます。

次の方法で、Campaign レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズすることができます。

- コンタクトまたはレスポンス・メトリックを追加する
- カスタムのキャンペーン、オファー、またはセル属性を追加する
- レスポンス・タイプを追加する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベル用のレポート・スキーマを作成する

以下の表では、Campaign レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートするレポート・スキーマにマップしています。

表 41. IBM Cognos BI レポートからレポート・スキーマへのマッピング

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャンペー ン・パフォー マンス・スキ ーマ	オファー・パ フォーマン ス・スキーマ	キャン ペーン オファー・レ スポンスの詳 細	オファーのコ ンタクト・ス テータスの内 訳
仮定オファー 収支サマリ ー・レポート	X	X		X		
キャンペーン 詳細オファ ー・レスポ ンスの詳細	X		X		X	
オファー・レ スポンスの詳 細 (ダッシュボ ード版)	X		X		X	
オファー別キ ャмпейン収 支サマリ (実 績)	X	X	X			
キャンペーン 投資収益率比 較	X	X	X			

表 41. IBM Cognos BI レポートからレポート・スキーマへのマッピング (続き)

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャンペー ン・パフォー マンス・スキ ーマ	オファー・パ フォーマンス スキーマ	キャン ペーン オファー・レ スポンスの詳 細	オファーのコ ンタクト・ス テータスの内 訳
月別のキャン ペーン・オフ ァー・パフォー ーマンス	X		X			
キャンペー ン・パフォー マンス比較	X		X			
キャンペーン レスポンス率 の比較	X		X			
収益を伴うキ ャンペーン・ パフォーマンス の比較	X		X			
イニシアチブ 別のキャンペ ーン・パフォー ーマンスの比 較	X		X			
セル別のキャン ペーン・パ フォーマンス スキーマ・サマリー	X		X			
収益を伴うセル 別キャンペーン・パフォー ーマンス・サ マリー	X		X			
セルおよびイ ニシアチブ別 のキャンペー ン・パフォー ーマンス・サマ リー	X		X			
オファー別の キャンペー ン・パフォー ーマンス・サマ リー	X		X			

表 41. IBM Cognos BI レポートからレポート・スキーマへのマッピング (続き)

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャンペー ン・パフォー マンス・スキ ーマ	オファー・パ フォーマンス スキーマ	キャン ペーン オファー・レ スポンスの詳 細	オファーのコ ンタクト・ス テータスの内 訳
収益を伴うオ ファー別キャン ペーン・パ フォーマンス スキーマ・サマリー	X		X			
オファー別の キャンペーン 収益の比較	X		X			
キャンペー ン・サマリー	X					
オファー・キ ャンペーン・ リスト	X					
オファー・パ フォーマンス スキーマ・メトリッ ク	X			X		
日別のオファ ー・パフォー マンス	X			X		
過去 7 日間の オファーレス ポンス	X			X		
オファー・パ フォーマンス の比較	X			X		
オファー奏功 率の比較	X			X		
キャンペーン 別のオファ ー・パフォー マンス・サマ リー	X		X	X		

次のレポートでは、Campaign で提供されるカスタムのコンタクトおよびレスポンス・メトリック属性の標準セットを使用します。

- 仮定オファー収支サマリー
- キャンペーン詳細オファー・レスポンスの詳細
- オファー別キャンペーン収支サマリー (実績)
- 収益を伴うキャンペーン・パフォーマンスの比較
- 収益を伴うセル別キャンペーン・パフォーマンス・サマリー

- ・ 収益を伴うオファー別キャンペーン・パフォーマンス・サマリー

eMessageレポートおよびレポート・スキーマ

eMessage レポート・パッケージでは、メッセージ概要レポート、詳細リンク・レポート、eMessage レポート処理の概要、SMS メッセージのサマリー・レポートなど、さまざまなレポートを使用できます。

以下の表では、eMessage レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM レポート・スキーマにマップしています。

表 42. eMessage レポートおよびレポート・スキーマ

	メール配信パフォーマンス・スキーマ
メッセージ概要レポート	X
詳細リンク・レポート	X
セル別詳細リンク・レポート	X
詳細バウンス・レポート	X
A/B テスト・パフォーマンス・レポート	X
eMessage レポート処理の概要	X
SMS メッセージのサマリー・レポート	X

Interact レポートおよびレポート・スキーマ

Interact のレポート・パッケージのレポートは、IBM レポート・スキーマによってサポートされます。スキーマをカスタマイズすれば、時間枠の指定、オーディエンス・レベルの構成、追加のパフォーマンス・レポート・スキーマの作成を行うことができます。

次の方法で、Interact レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズすることができます。

- ・ パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠を指定する
- ・ パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- ・ 追加オーディエンス・レベルの追加パフォーマンス・レポート・スキーマを作成する

以下の表は、Interact レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM レポート・スキーマにマップしています。

	対話式 ビュー・スキ ーマ	Interact パフ ォーマンス・ ビュー・スキ ーマ	対話 式 チャンネル/ キャンペーン 配置履歴	Interact ラン タイム・ビュー ・スキーマ	Interact ラー ニング・ビュー ・スキーマ
キャンペーン - 対話式チャ ネル配置履歴	X		X		
キャンペーン - 対話式セル・パフォー マンス	X	X		X	
キャンペーン - オファー別 対話式セル・ パフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - 対話式オフ ァー・パフォー マンス	X	X		X	
キャンペーン - セル別対話 式オファー・ パフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - 対話式オフ ァー学習の詳細	X				X
対話式セル・ リフト分析	X	X		X	X
対話式チャネ ル - チャンネル 配置履歴	X		X		
対話式チャネ ル - チャネ ル・イベン ト・アクティ ビティのサ マリー・レポ ート	X			X	
対話式チャネ ル - チャネ ル・インタラ クション・ポ イント・パフ ォーマンス・ サマリー	X	X		X	

	対話式 ビュー・スキ ーマ	Interact パフ ォーマンス・ ビュー・スキ ーマ	対話 式 チャンネル/ キャンペーン 配置履歴	Interact ラン タイム・ビュー ・スキーマ	Interact ラー ニング・ビュー ・スキーマ
対話式チャネ ル - チャンネル 処理ルール・ インベントリ ー	X				
対話式セグメ ント・リフト 分析	X	X		X	
インタラクシ ョン・ポイン ト・パフォー マンス	X	X		X	

IBM 技術サポートに問い合わせる前に

資料を参照しても解決できない問題が発生した場合は、貴社の指定サポート窓口の方が IBM 技術サポートに問い合わせることができます。以下のガイドラインを使用して、問題が効果的かつ成功裏に解決するようにしてください。

貴社の指定のサポート窓口以外の方は、必要な情報についてお客様の IBM 管理者にお問い合わせください。

注: 技術サポートが API スクリプトを記述したり作成したりすることはありません。API オファリングを実装するための支援が必要な場合は、IBM Professional Services に連絡してください。

収集する情報

IBM 技術サポートに問い合わせる前に、以下の情報を収集してください。

- 問題の性質についての簡単な説明。
- 問題発生時に表示される詳細なエラー・メッセージ。
- 問題を再現するための詳細な手順。
- 関連したログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 『システム情報』で説明されている方法で取得できる、製品とシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートにお問い合わせいただいた際に、お客様の環境に関する情報の提供をお願いすることがあります。

生じている問題によってログインが妨げられていなければ、この情報の多くを、インストールされている IBM アプリケーションについての情報を示す「バージョン情報」ページから取得できます。

「バージョン情報」ページには、「ヘルプ」>「バージョン情報」と選択することでアクセスできます。「バージョン情報」ページにアクセスできない場合には、アプリケーションのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを調べてください。

IBM 技術サポートの連絡先情報

IBM 技術サポートに連絡する方法については、IBM 製品の技術サポートの Web サイト (http://www.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するためには、IBM アカウントを使用してログインする必要があります。このアカウントは、IBM 顧客番号とリンクされている必要があります。

す。アカウントを IBM 顧客番号と関連付ける方法については、Support Portal の「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および [ibm.com](http://www.ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンド・ユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限りません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明するこ

と、および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような意図による、クッキーを含めたさまざまなテクノロジーの使用に関する情報は、「IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント」(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja>) の『クッキー、Web ビーコン、その他のテクノロジー』の節を参照してください。



Printed in Japan